今日のソ連邦

1978
13
7.1.



第11回世界青年学生祭
ハバナ祭典に備えるソ連の青年

ボリショイ・バレエの日本公演

宇宙開発の大きな前進

今日のソ連邦

第13号　1978年7月1日号

本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

本誌を入手するには

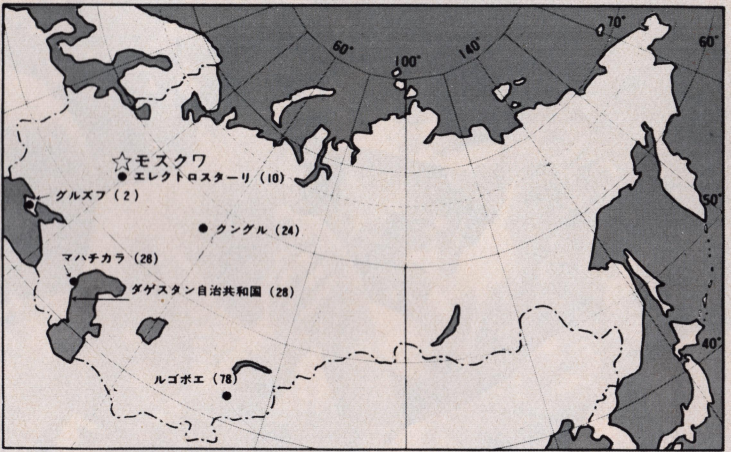
下記送料を添えて広報部にお申込み下さい（誌代無料）。（送金には振替または切手を御利用下さい）

半年分送料……1200円

1年分送料……2100円

同時一括送りの部数が多くなれば、送料も割安になりますから、広報部にお問合わせ下さい。

★数字は関連記事のページ



ソビエト社会主義共和国連邦大使館

東京都港区麻布台2—1—1　電話(583)4224

（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田3—9—13

郵便番号141　電話(03)447—3536(代表)

振替口座東京9—122358（加入者名—ソ連大使館広報部）

ルポルタージュ

クリミアの国際青年センター

リュボーフィ・イワノフ



こんな力持ちぞろいなら、声援がなくても勝利は確実……

国際青年センター

……朝、波の音で目が覚めた。数十段の階段を駆け下りて、黒海の浜辺に横たわる。初めは太陽も肌に心地よかったが、やがて身体がひりひりしだし、心ならずも浜辺から大きなシュロの葉陰へ後退……

クリミア半島のヤルタに近いグルズフ町の亜熱帯植物とバラの間に、国際青年センター〝スプートニク〟の建物が広がっている（ソ連にはこのようなセンターが全部で13ある）。年間このセンターを利用するソ連の青年は五〇〇〇人、外国の青年は三〇〇〇人にのぼる。

ロシアの古いしきたりにならって、〝スプートニク〟にくる人は、パンと塩で歓迎される。華やかな音楽が演奏される中で、五大陸の青年の親善を象徴する5本のバラの束が、私たち全員に贈られる。そして私たちは、国際青年キャンプのさまざまな多彩な行事にたちまち引き込まれる。

モーターボートで海岸をまわって、クリミア半島の歴史を知り、半島の絵のように美しい眺めをめで、隣の全ソ・ピオネール・キャンプ〝アルテク〟を訪れた。

〝スプートニク〟では、自分の力と敏捷さを発揮して、〝小



ここではアドレスの交換風景がよく見られる。たとえ別れても、ここで会った友は忘れられない。

〝ミス・スプートニク〟コンクール出場者は、音楽の才能も披露しなければならない。皆がこのようにたのしく打奏できるわけではない。



〝小オリンピック競技会〟で勝ち抜くには、まず練習試合で調子を上げることが肝心だ。だから練習試合にも熱が入る。





〝ミス・スプートニク〟の座に挑戦したポーランドの学生ベアタ・シュカリスカさん。



ここではウィンドサーフィンも楽しめる。

国際青年センター

オリンピック競技会〟のチャンピオンになることもできれば、夜の〝ミス・スプートニク・コンクール〟で、一番感じがよくて、器用で、頭のよい女性に一票を投じることもできる。それにミス入賞者がウンといえば、彼女のダンスのお相手も。

希望すれば、討論会で〝舌戦を交える〟ことも、国際クラブ〝フォーラム〟の会議に出席して、お茶を飲みながら各国からきた労働者や技師、学生や医師と話し合い、論争し、夢をえがくのも自由……

〝スプートニク〟を去るさい、私たちはここで知り合った新しい友人とアドレスを交換し、ここでの楽しい日々がたちまちのうちに過ぎ去ったことをなげいた。そしてお別れに、米国からきたリタ・カーフリャさんが書いたような言葉を、赤革の感想帳に記そうと思った。カーフリャさんの感想——「グループ全体を代表して暖かいもてなしとたのしい日課に感謝します。私たちはいろんな国の青年の代表と仲よくなりました。

世界諸国民の親善万歳！」

そして私たちはチェコスロバキアのドウド・ミロシュさんの次の言葉に賛成した。

「グルズフは世界一すばらしいところです。さらに〝スプートニク〟従業員の心くばりをつけ加えれば、なぜわれわれがもう一度ここにきたいかが、分かるでしょう。すべてに厚く感謝します！ではまた……」





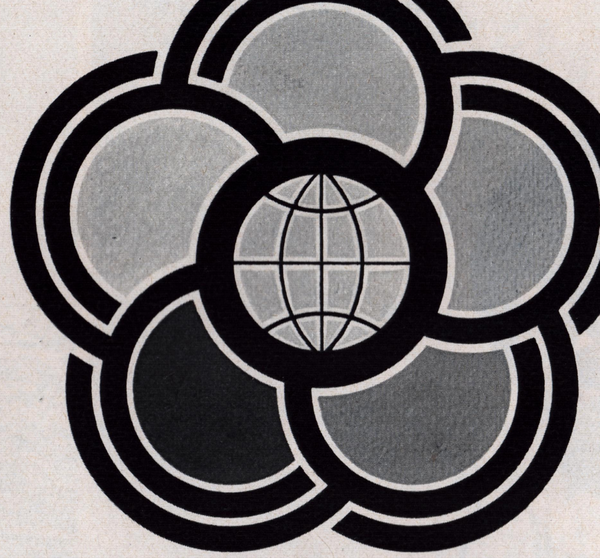
国際クラブ〝フォーラム〟でまず友好が芽生える。何十という質問が出され、ふるさとの話が出る。

▶クリミアの名所リワジヤ宮殿を見物する〝スプートニク〟滞在の青年たち。

第11回世界青年学生祭に備えるソ連の青年

ハバナに集う世界の若者

ソ連青年団体委員会副議長　ユーリー・ゴリャチェフ



ハバナ祭典のシンボルマーク

ことしの7月28日から8月5日まで、第11回世界青年学生祭がキューバ共和国の首都ハバナで開催される。この祭典のシンボルマークは、5色の花びらに囲まれた地球という象徴的な花である。

地球上の民主的な青年たちはすでに10回、自分たちのフォーラムに集まっている。このような祭典を開くという構想は30年以上も前に生まれた。一九四五年11月、二〇〇〇の青年団体の代表たちがロンドンの最初の世界会議に集まった。この会議で世界民主主義青年連盟が結成された。さまざまな民族の青年男女数百万人の名において会議の出席者たちは、世界の若者たちへの呼びかけで次のような決意を表明した――「世界中でファシズムの残りかすを絶滅するために、……諸国民の強い、心からの友好のために、公正で永続的な平和のために、貧困と失業を根絶するために闘う」。この会議で、第1回世界青年学生祭を一九四七年にチェコスロバキアの首都プラハで開催することが決定された。

71ヵ国から一万七〇〇〇人の青年男女が集まった第1回祭典の成功は、あらゆる予想を上回った。この祭典の精神が、当時の若者たちの広い支持を受けたのである。

それ以後さらに9回の祭典が行われた。そして回を重ねるたびにこの祭典の人気は高まった。その理由は簡単である。祭典は若者たちが関心を持っていた問題にいつもこたえていたからである。

一九五一年、ベルリンの第3回祭典では若者の代表たちは、朝鮮、インドシナ人民にたいする帝国主義の侵略の中止を強く要求した。一九五三年、ブカレストの第4回祭典ではアジア、アフリカ人民の解放闘争を支持する大規模なデモンストレーションが行われた。一九六八年、ソフィアの第9回祭典で一三八ヵ国の代表たちは、ベトナムの平和を勝ちとるために闘うとの決意を力強く表明した。一九七三年にベルリンで開催された第10回祭典の「反帝勢力の連帯、平和と友情のために！」というスローガンは、各国の数百万人の若者たちの共感を呼んだ。

ソ連は、世界青年学生祭運動のベテランと呼んでもいい。ソ連の代表たちは、これまでのすべての青年学生祭に参加してきた。

一九五七年にはモスクワもまた、第6回祭典の開催地として全世界の若者たちを迎えた。モスクワ祭典の参加者は一三一ヵ国三万人を上回った。参加者の多くは、このとき初めて社会主義の世界を自分の目で見たのであった。

一九七五年の国際準備委員会設立会議でハバナが第11回祭典の開催地として選ばれた。世界青年学生祭は、初めてヨーロッパ大陸の外で開かれることとなった。この重要なフォーラムのプログラムには、平和と軍縮、国際緊張緩和、青年の権利、青年の反帝統一行動をめざす闘争の問題にかんする会議、集会、ゼミナール、討論会などが予定されている。

学生用のプログラムとしては、教育を受ける権利、教育の民主化、社会生活における大学の役割、学生の文化活動やスポーツ活動などをテーマとした討議が予定されている。

ハバナではさまざまな国の青年男女が若い画家や映画人の優秀な作品を観賞し、スポーツ選手は各種競技に参加する。

キューバ人たちは、このフェスティバルを熱心に準備している。キューバ共産党と国家の指導者フィデル・カストロがハバナ祭典準備委員会の議長をしていることを見れば、キューバ国内でこの祭典がどれほど重視されているかが分かる。

ソ連準備委員会は一九七六年の11月に作業を開始した。この委員会は青年労働者、農民、社会活動家、政治家、知識人、科学者、宇宙飛行士、学生などで構成されている。

祭典への代表を選ぶ行事がソ連で大規模に行われており、数千の青年男女がこれに参加している。全国各地で外国の若者たちの生活、勉学や労働をソ連の若者たちに紹介するクイズ大会や会合が持たれている。ソ連準備委員会は、ハバナへ持って行く作品を決めるためにポスターや絵の選考会、写真や絵画の展覧会、映画祭などを行った。

ソ連の青年男女は何回か土曜労働を組織し、これで得た金を世界青年学生祭国際基金に振り込んだ。たとえば、昨年はソビエト青年デーを前にした6月25日に全ソ・コムソモール・青年土曜労働が行われ、モスクワだけでも一〇〇万人以上、全国では五〇〇〇万人が参加した。

※　※　※

ハバナ祭典に向けた準備活動は、社会・政治体制のいかんにかかわらず、多くの国で行われている。世界の運命に無関心でいられず、また、戦争のない世界で学び、働き、愛したいと望んでいる若者たちが居るところならば、どこでもその準備が進められている。世界の若者が、ハバナの祭典に集まってくる。

☆　☆　☆

ソ連各地の準備状況

第11回世界青年学生祭（ハバナ祭典）は7月28日から8月5日まで開かれるが、いま毎日のようにソ連各地から青年学生祭への参加準備の報告がソ連の準備委員会に入ってきている。その報告のいくつかを紹介しておこう。

※　※　※

ソ連の青年男女は、青年学生祭前の「反帝連帯、平和と進歩をめざす青年」世界キャンペーンのわく内で、「ソビエト青年からベトナムの若い世代に」、「ソビエトのピオネールからアンゴラの子どもたちに」などの全ソ運動に参加している。

※　※　※

アゼルバイジャン共和国。この共和国の青年男女が参加した青年土曜労働は、ハバナ祭典を迎える最大の記念行事の一つとなった。土曜労働でかせいだ約一〇〇万ルーブルは、第11回青年学生祭の基金に入れられた。

※　※　※

イルクーツク州（東シベリア）。同州の諸市の青年は州の自立芸術活動コンクールに参加している。コンクール優勝者たちはハバナ行きの権利を獲得する。

※　※　※

アシハバード市（トルクメン共和国）。同市の企業、官庁、学校に78の国際親善青年クラブが設立され、クラブ員は青年学生祭の歴史や他国の青年、児童団体の活動を調べたり、外国の青年たちと文通をしたりしている。

※　※　※

トリアッチ市（ロシア共和国）。同市では政治歌謡フェスティバルやハバナ祭典をテーマにした優秀歌謡コンクールが開かれており、コンクールの優勝者はソ連代表団に加わってハバナへ行く予定。

※　※　※

バクー（アゼルバイジャン共和国）。バクー市では国際学生週間が催され、その週間中に数多くのコンサートが開かれた。いま学生は「反帝連帯をめざす青年」というリポートのコンクールに、また学校生徒は「キューバ――わが愛」（キューバの学童にあてた手紙）のコンクールに、それぞれ参加している。

※　※　※

エレバン（アルメニア共和国）。同共和国の青年団体委員会内に青年美術家会議があり、会議の会員はエレバンの公園でハバナ祭典記念の青年美術展を催した。

※　※　※

アバカン（西南シベリア）。現地のピオネール・学童宮殿で「キューバ――青年学生祭の国」という名の政治ポスター・コンクールが催された。応募ポスターは平和闘争や第11回青年学生祭の準備への青年の参加、社会主義キューバの生活をえがいている。

※　※　※

アルハンゲリスク（ソ連欧州地域の北）。同市の学童のコンサートの全収入が青年学生祭の基金に入れられた。コンサートを主催したのは国際親善クラブの活動家と同市のピオネール・学童宮殿の舞踊アンサンブル「友好」。

工場を代表してハバナ祭典へ

タチヤナ・ワシリエワ　カメラ S・ソロビヨフ

ハバナで開催される世界青年学生祭に、ソ連は大型代表団を派遣する。この代表団員の一人として、モスクワ郊外にある″エレクトロスターリ″電炉冶金工場の25歳の労働者ウラジーミル・マトベーエフが選ばれた。この工場の青年たちが、なぜ自分たちの代表として彼を選んだのかを知るために、記者は工場を訪ねた。

モスクワから55km東に一三万五〇〇〇の人口をもつエレクトロスターリ市がある。市の名は、ソビエト政権とともにここで発展してきた電炉冶金工場に由来している。時がたつにつれて市内には他の部門の企業も出現するようになった。しかし以前通り、冶金は市の″基幹産業″となっている。

エレクトロスターリの生粋の住人であるウラジーミル・マトベーエフにとって、このまちで育った多くの若者と同様に、将来はもう決まっていた。中学校を卒業すると、父親の働いていた″エレクトロスターリ″工場に就職し、家族の伝統に従って鍛冶工となったのである。

正直言って私は、生まれて初めて鍛造プレス工場へ行って、あんなに恐ろしいと感じたことはなかった。ハンマーの連打に合せて足元から床が逃げて行くようだ。炉からはものすごい熱気が来る。火炎と轟音の地獄からなにがなんでも外に出たいという欲求に打ち勝って、私はウラジーミル・マトベーエフの作業班が働く鍛造機に近づこうと決心した。

加工物がやっとこで引き寄せられた。ハンマーがその上にある。打撃の準備はできた。私はことわざを思い出した。

「ハンマーは、鉄を鍛えず、鍛冶屋を鍛える」。このことわざは、今日の科学技術革新の時代にも通用するのだろうか?

ハンマーの操縦手——現代の鍛造工が、打撃をもっと正確にしようと、ねらい定めるかのように、加工物を注意深く見つめていた。とはいえ、彼は操作レバーを握っていただけなのだが……。レバー一つで、ハンマーは加工物に襲いかかり、必要な形に打ちのめしていた。

隣の操縦パネルにはマニピュレータ



引き継ぎが終わっても、交替者の仕事を注意深く見守るウラジーミル・マトベーエフ班長。ウラジーミルの青年作業班は、熟練工の良いところをすべて見習ってまたたくまに成功を収めた。

上　マトベーエフは、4歳になる息子コースチャが自分の跡を継いで立派な鍛冶工になってほしいと思う。

下　科学技術が進歩した現代でも、鍛冶工には大きな体力が必要だ。重量挙げで体力作りにはげむマトベーエフ



の操縦手が座っている。〝鉄の手〟が人間の意志通りに、半トンもあろうという鋼塊をハンマーの下でひっくりかえす。操縦手たちと呼吸を合わせて、熱処理工も働いている。そして、この作業班全体を率いているのが、ウラジーミル・マトベーエフなのだ。彼は、背が高くて肩幅の広い、屈強な男である。

ウラジーミルは語った。

「私たちの作業班は、実験的な作業班です。通常、冶金工場の職階は、見習い助手にはじまって、見習い、炉前工とつづき、ようやく鍛冶工になるのです。古いシステムでこの職階をのぼるならば、多くの年数がいります。私たちは、はやく自主的に働きたいと思いました。そして熟練工にひけを取らない青年作業班を組織することにしたのです。このような作業班の存亡は、この試みの成功と私たちの労働の成果にかかっていました」

この考えは、〝エレクトロスターリ〟工場の管理部とコムソモール工場委員会の支持を受けた。青年作業班が設立された。

ウラジーミル・マトベーエフは、さらに二人の若者を選び出し、お互いの仕事をもっと良く理解するために関連職種の習得を開始するよう提案した。なぜなら鍛冶工の成功は、集団で働けるかどうかにかかっており、〝個人プレー〟はここでは少ないからだ。

その後、作業班員たちは、工程管理技師の援助で、鍛造の強さや冷却・加熱レベルの最適条件を工夫した。この結果、作業速度は増加し、良質の製品ができ、しかも労働生産性が向上したのである。

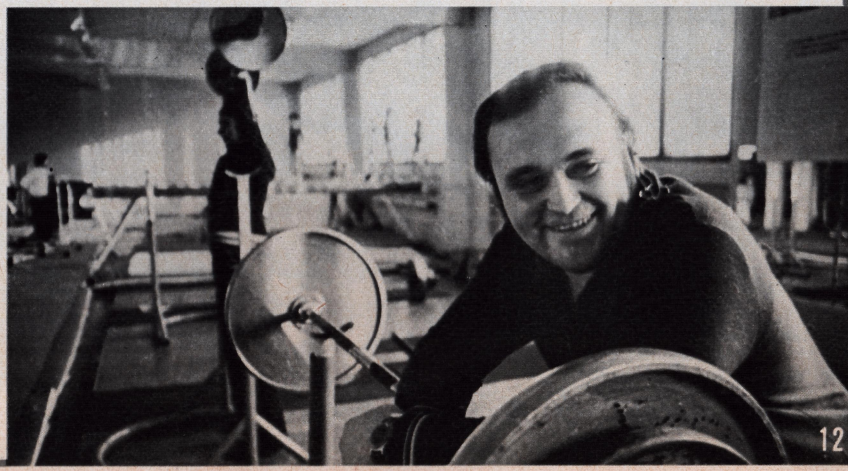
「約一年後に、私たちは新品質鋼の鍛造をまかされるようになりました。その上この職場には、さらに二つの青年作業班ができました。私たちの後継者たちです」とウラジーミルは語った。

実験作業班は、そのイニシアチブに対してコムソモールから賞をもらった。

「マトベーエフは、本物の鍛冶工であり、立派な作業班長です。彼の肝心な点は、常に前進しようという気概です」という評価を私は、熟練炉前工のひとりであるユーリー・ゴロビンから聞いた。

マトベーエフは、鍛造技術をもっと良く習得するために大学へ進学することを決意して、モスクワ鉄鋼合金大学電炉冶金科への入学試験の準備を始めた。全作業班員がこれに習った。来年彼らは一緒に受験することだろう。

コムソモールの委員会で、皆が私に語ってくれた。「マトベーエフは、自分のふだんの、時にはうんざりするような任務を、興味津々の創造にかえてしまうことのできる人だ。決して小成に安んじようとはしない。世界青年学生祭に工場のコムソモール員たちの代表としてウラジーミル・マトベーエフを選んだことを、われわれは喜んでいる」



ソ日経済協力シリーズ⑩

ソ日両国間のコンペンセーション契約

ここ数年間に大きく伸びたソ日両国の通商・経済関係の特徴は、一口でいえば新しい協力形態が探求されたことだといえよう。その点で最も注目すべき例は、シベリア、極東の天然資源の開発でのソ日両国の協力の新しい形態である。

いま「コンペンセーション取引」という用語が、ビジネスマンの用語としてどんどん使われているが、一体「コンペンセーション取引」とはどういうことか？

ソ日両国間のクレジット関係の性格は、大体が一種独特なものであり、日本側のクレジットはその用途がきびしく決められている。つまり一定の施設の建設に使われることになっていて流用はできず、そのクレジットで建設された返済は、そのクレジットで建設された企業の生産物の一部で行われる。この種の協定が「コンペンセーション取引」と呼ばれているのである。

さてこの種のプロジェクトは大規模かつ長期にわたるものばかりだから、プロジェクトの実現にはどうしても特別の指導機関が必要である。

ソ日経済交流を拡大深化するために、一九六五年7月1日に設立されたソ日、日ソ経済協力委員会は「実務的協力委員会の設置にかんする交換書簡」に基づき、日ソ経済人間の連絡ならびに協議を行う。（注— この委員会の名称はソ日（日ソ）経済委員会であるが、その後一部で実務協力委員会の名が使われ、さらには経済協力委員会の名が使われている）

交換書簡には「両国の委員会の目的は、日ソ実業界の相互理解と友好を深め、両国の経済協力の拡大を促進することにある」と書かれている。

日ソ経済委員会の代表委員は、経団連名誉会長植村甲午郎、日本商工会議所会頭永野重雄の両氏。

ソ日経済委員会の委員長は外国貿易第一次官I・F・セミチャストノフである。

日ソ経済委員会のわく内で多くの分野の対ソ経済協力を具体的に実現するために、次の常設委員会が設立された。

——木材（委員長—河合良一小松製作所社長）、パルプ原料（田中文雄王子製紙社長）、サハリン大陸棚探鉱（今里広記日本精工会長）、石炭（槇田久生日本鋼管社長）、天然ガス（安西浩東京瓦斯会長）、決済問題（岩佐凱実富士銀行相談役）、技術交流（吉山博吉日立製作所社長）。

一九六六年以来これらの委員会の会議は、モスクワと東京で交互に開かれ、これまでに7回開催された。

ではいまソ日間にどのようなコンペンセーション契約が結ばれており、これらの契約はどのように実現されているか？

一、極東森林資源開発基本契約

この基本契約は一九六八年7月29日東京で調印された。この契約によると、日本側は一億三三〇〇万ドルのサプライヤーズ・クレジット（年利5・8％、延払い期限5年）で設備・資材をソ連に提供するほか、クレジットのわく外で三〇〇〇万ドルの消費物資を提供する。ソ連は5年間（一九六九—一九七三年）に約八〇〇万立方mの木材を日本に提供して、さきのクレジットの返済にあてた。

第6回ソ日・日ソ経済合同委員会の会議で指摘されたとおり、現在までに契約は完全に履行された。ソ連側は日本に丸太約七六〇万立方mと製材六万四〇〇〇立方mを輸出した。

ソ連側は日本から供与されたクレジットで、一億一九一〇万米ドルの設備、資材と二九九〇万米ドルの消費物資を日本から輸入した。主な輸入設備は製材工業用総合設備、一二八〇台のブルドーザ、二三二五台の木材運搬車、96台の13tクレーン車、3隻の浚渫船などである。

二、ウランゲル湾港湾建設基本契約

契約は一九七〇年12月18日、全ソ機械輸入公団（マシノインポルト）と日本のワイブイ株式会社との間で調印された。

日本側は八〇〇〇万米ドルのサプライヤーズ・クレジットを供与し、石炭バース、チップ・木材バース、国際規格コンテナ積み替えバースの建設に必要な設備、機械、資材その他の必需品を提供した。

ウランゲル湾のウォストーチヌイ港が全面開港すれば、極東の諸港の貨物受入能力は年間一一〇〇万—一二〇〇万tふえよう。設備、機械、資材の供給契約は一九七五年12月末でほぼ全部履行された。

三、工業用チップの生産と対日輸出にかんする基本契約

基本契約の調印は、一九七一年12月6日に全ソ木材輸出公団と日本チップ貿易株式会社との間で行われた。

この契約によると、日本側は年利6%、延払い期限6年のサプライヤーズ・クレジットを供与し、そのクレジットで工業用チップ・広葉樹パルプ長材生産用の設備、機械、資材を輸出し、ソ連側は一九七二—一九八一年中に八〇五万立方mの工業用チップと四七〇万立方mの広葉樹パルプ長材を日本に供給する。

契約調印以来の日本への輸出量は次のとおり。(単位一〇〇〇立方m)

年度	一九七二	七三	七四	七五	七六	七七
工業用チップ	三四	八九・四	二八五・二	四五〇	六一八	六八六・七
広葉樹パルプ長材	二〇三	二五一・七	二〇四・六	五〇〇	四六六・六	五五〇・七

四、第2次極東森林資源開発基本契約

契約は一九七四年7月30日調印。契約による丸太と製材品の供給量は次のとおり。(単位一〇〇〇立方m)

年度	一九七五	七六	七七	七八	七九	合計
丸太(一般材、パルプ材)	二五〇〇	三〇〇〇	三五〇〇	四〇〇〇	四五〇〇	一七五〇〇
製材品	一二〇	一五〇	一八〇	二一〇	二四〇	九〇〇

バンク・ローン協定は一九七四年10月23日にソ連の外国貿易銀行と日本の輸出入銀行との間で調印された。

総額五億五〇〇〇万ドル(一六二六億円)のバンク・ローンの使途の割当ては次のとおり。

機械、設備に——四億三五〇〇万ドル(一二八六億円)

船舶——六五〇〇万ドル(一九二億円)

消費物資——五〇〇〇万ドル(一四八億円)

駐日ソ連通商代理部の発表によると、一九七八年5月15日現在、一四〇〇億円分(うちバンク・ローンを使って支払われる分は一二二七億円)の取引契約が結ばれており、バンク・ローンの75・5%が使われた。この基本契約により一二七〇億円分の商品が提供された。

木材委員会委員長の河合良一小松製作所社長は、モスクワ訪問中に第3次極東森林資源開発基本契約の次のような締結準備作業計画を提示した。

——専門家の予備交渉(一九七八年秋)

——常設委員会の幹部を団長とする代表団の公式交渉(一九七九年春)

——基本契約の調印(一九七九年6月)

五、南ヤクート原料炭開発にかんする基本契約

この契約は一九七四年6月3日、モスクワで、全ソ公団「ソユーズプロムエクスポルト」総裁と南ヤクート炭開発協力株式会社社長との間で調印された。

契約によると、一九七九年から一九八八年までにクズネツクK10炭(またはKJ14炭)を毎年一〇〇万t日本に輸出するほか、南ヤクートのネリュングラ炭を次のとおり供給する。

一九八三年—三二〇万t、一九八四年—四二〇万t、一九八五—一九九八年—五五〇万t。

契約の有効期間中に合計一億四四〇万tの石炭が供給されよう。

日本側は、炭田の開発とバム＝ティンダ＝ベルカキト鉄道の建設に必要な設備、機械の購入費として三億九〇〇〇万米ドル(一〇九五億円)の円貨クレジットと消費物資購入費として六〇〇〇万米ドル(一六八億円)の円貨クレジットを供与した。

一九七八年5月15日現在、一二九四億円相当の契約が結ばれたが、そのうち一一八一億円はクレジットを使用するものである。クレジット使用率は93・5%。この基本契約により九四一億円の商品が供給されている。

六、サハリン大陸棚石油ガス探鉱協力基本契約

この契約は一九七五年1月28日に東京でV・N・スシコフ・ソ連外国貿易次官と今里広記サハリン石油開発協力株式会社社長(現会長)との間で調印された。

基本契約に基づいて一九七五年10月21日に三つのクレジット協定(ソデコ1、ソデコ2、ソデコ3)が結ばれた。ソデコ1は地質探鉱費として一億ドルを融資するもので、期限は5年間(一九七五—一九八〇年)。ソデコ2は恒久設備購入資金(二二五〇万ドル)、ソデコ3は消費物資購入資金(三〇〇〇万ドル)である。

リスク・マネー一億ドルは、ジャパン石油開発株式会社が供与し、油田(またはガス田)設備を建設しても十分採算がとれるだけの石油(ガス)埋蔵量が発見されれば、石油の値引き供給によって、クレジットの元利償還が行われる。ただしそれだけの資源が発見されねば、ソ連側はクレジットの償還をやらない(いわゆる成功払いクレジットである)。

一九七八年5月15日現在、基本契約に従って、一九七六—一九七八年度の機械、設備、消費物資のリース、供給契約(約一億一七〇〇万ドル)が結ばれている。うち約一億一五〇〇万ドルはクレジットにより支払われる。

提供された商品およびリースされた設備による作業量は、金額にして約五〇〇〇万ドル相当になっている。

一九七七年12月の第6回ソ日・日ソ経済合同委員会会議(モスクワ)で、一九七八年度のサハリン大陸棚探鉱計画が合意に達し、5年間の探鉱作業計画が修正された。

このプロジェクトにかんする協力は順調に伸びている。一九七七年9月にボーリングされた最初の探査井から大量の石油が産出され、有望視されている。探査計画によると、一九七八—一九七九年にはオドプチンスカヤ地層の石油鉱床の探査に拍車がかけられるが、これはこの鉱床の石油・ガスの鉱量を測定し、採算性をはっきりさせるためである。一九七八年6月—7月に、ユジノサハリンスクで開かれる合同委員会会議で、探査作業の具体的プランが審議されよう。

七、ヤクート天然ガス開発にかんする基本契約

この基本契約は一九七四年12月11日にソ日米三国の間で調印された。

ソ連側からN・オシポフ外国貿易次官、米国側からボイド・エルパソ・ナショナルガス会長とハマー米オクシデンタル・ペトロリアム会長、日本側から安西浩東京瓦斯会長が契約に調印した。

契約の目的は、ガスの工業埋蔵量を確認するための地質・探査作業を実施することにある。5月26日、東京でこのプロジェクトを実施するための三カ国会議が開かれたが、この会議の経過とその結果については本号16ページを参照されたい。

南ヤクート炭開発プロジェクトにかんする基本契約と第2次極東森林資源開発にかんする基本契約の調印後、ソ日協力に新しい一ページが開かれ、ソ日協力は長期かつ大規模なものとなり、ソ国のバンク・ローンにもとづいて協力が実現されている。

すでに実現されているか、または実現の日が近いプロジェクトのほかに、検討段階にあるソ日協力プロジェクトがいくつかある。

その中でシベリア、極東(ハバロフスクとアムールスク地区)の紙パルプ・コンビナート建設協力プロジェクトは、近々実現する可能性が濃く、最も見通しが明るい。これらの工場の紙パルプの生産量は約一〇〇万tの見込みである。

エネルギー産業分野でのソ日経済協力のもう一つの実現可能な形態は、長期にわたって(25年以上)日本のためにウラン原料をソ連で濃縮することである。ソ連はすでに他の資本主義先進国とこのような協力をやってきている。一九七一年にウラン濃縮サービスを提供する協定がフランスと結ばれ、一九七三年には西独、ベルギー、イタリアと結ばれた。ソ連は日本とも同じような協力体制をつくろうと前向きの態度をとっており、その協力を将来性のある貿易形態とみている。

実例が示すように、シベリアと極東の生産力を発展させる共同開発に日本の諸会社が参加することは、一方では製造工業の多くの種類の製品に、非常に大きな、長期間保証される販売市場を開き、また一方では日本の一定グループがある特定の国だけを貿易相手とするのを防ぎ、貿易の方向に変化を与えるチャンスを開く。

日ソ友好議員連盟第6回総会

5月31日、東京の霞が関ビルで日ソ友好議員連盟(日ソ議連)の第6回定期総会が開かれた。

石田博英・衆議院議員を会長とし、5年前に結成された日ソ議連は、議会の線による接触と交流を拡大することによって日ソ両国間の友好関係を発展させることを目的としている。

ソ連最高会議と日本国会との間の接触がすでに両国間の公式外交関係の復活以前に確立され、ソ日関係の正常化を大いに促進したことを指摘しなければならない。この見地からも日ソ議連の活動は両国間の善隣友好関係の強化に多くの点で寄与している。



あいさつする石田博英会長

総会参加者は過去1年間の活動を総括し、次年度の計画を定めた。

各発言者は、日ソ間の関係を強化するため現在の条件のもとで日ソ議連の活動の役割を高めなければならないと語った。

ポリャンスキー駐日ソ連大使は総会で次のようにあいさつした。「日ソ議連の会員数がすでに五五〇人に達したという事実は、日本の国会議員が隣国ソ連との関係を重視していること、ソ連と平和・友好のうちに生活したいと熱望していることを証明しています。

ソ連国民は国会議員の線による交流を、ソ日両国国民間の相互理解と善隣を深める重要なルートとみなしています。これらの交流の深化と拡大は、ソ日両国関係の発展だけでなく、緊張緩和プロセスの深化とその地球のすべての地域への拡大、全面完全軍縮の達成のような現代の緊要な問題の解決にも少なからぬ貢献を加えることができます」

M・プロコフィエフ・ソ連最高会議議員団ソ日部長のメッセージが総会で読み上げられた。

具体化進むヤクート天然ガス開発

ソ日米三国東京会議終わる

V・タラネンコ



覚書に調印するソ連、日本、米国の代表

5月23日から東京で開かれていた東シベリアのヤクート天然ガス開発プロジェクトにかんするソ連、日本、米国三国の代表団による定例会議は、5月26日、今後の措置についての覚書の調印をもって終了した。

覚書に調印したのは、ソ連側からN・オシポフ・ソ連外国貿易次官、日本側から安西浩・東京瓦斯会長、米国側からH・ボイド・エル・パソ社社長、A・レパルロ・オキシデンタル・ペトロリアム・コーポレーション副会長。

これはこのプロジェクトの5回目の三国会議だった。しかし今日の会議は結果の点では、会議出席者がヤクート天然ガス開発プロジェクトの実現と関連した具体的な問題を検討したという見地からきわめて重要な意義を持っている。

今回の会議の結果について述べる前に、本誌読者にヤクート天然ガス開発プロジェクトの歴史をご紹介したい。

プロジェクトの歴史

シベリアのガス田開発プロジェクトの積極的な共同研究は、すでに一九七二年に開始された。一九七三年に日本側はガス田開発に参加する意向を表明し、日本側の提案に従ってこの計画にエル・パソとオキシデンタル・ペトロリアムの両社が参加した。このときは〝北極星〟という名称のプロジェクト——チュメニ州（西シベリア）のウレンゴイ・ガス田の共同開発が検討された。

しかし政治的性格を持つ原因により、とくにジャクソン米上院議員らのソ連を差別する通商法修正案が米上院によって採択された結果、米国側がクレジットを供与することができなくなったことにより、このプロジェクトは放棄された。同じ一九七三年にN・オシポフ次官が日本を訪問した結果、ヤクート天然ガス開発プロジェクトを検討するという合意が達成された。しかし、このガス田がまだあまりよく調査されておらず、基本契約にかんする交渉を行うことが時期尚早だったことにより、ガス田の探鉱予備作業を行うという決定が採択された。この協定はパリで調印された。

この協定の目的は、ガスの試掘埋蔵量を一兆立方mにまで高め、日本と米国に液化天然ガスを供給することにあった。

基本契約に従ってソ連外国貿易銀行はパリで二つの信用協定に調印した。一つは一九七六年3月30日にバンク・オブ・アメリカと、もう一つは一九七六年3月31日に日本輸出入銀行と調印したもので、いずれも米国側と日本側からそれぞれ二二五〇〇万米ドルのバンクローンを、ヤクート・ガス田の探鉱予備作業のために提供するという内容だった。

目標寸前の試掘埋蔵量

東京で調印された覚書の項目はまだ効力を発生していないが、ソ連の探鉱関係者がすでに試掘埋蔵量を八二五〇億立方mにまで高めたことを指摘しなければならない。

このように、計画作成の参加者の前にヤクート天然ガス開発プロジェクトを実現する今後の措置を打ち出す問題が出てきた。東京会議の参加者はプロジェクト全体の実現の具体的な諸問題——ガス田の設備建設、ガスパイプライン、天然ガス液化工場、港湾施設の建設、他の可能なガス輸送方法を討議した。ヤクート・ガス田の開発により、日本と米国に25年間にわたって毎年各一〇〇億立方mの天然ガスが供給される。

ヤクート天然ガス開発プロジェクトにかんする作業の全体計画はだいたい下の図のように示すことができる。

輸送方法の三つの案

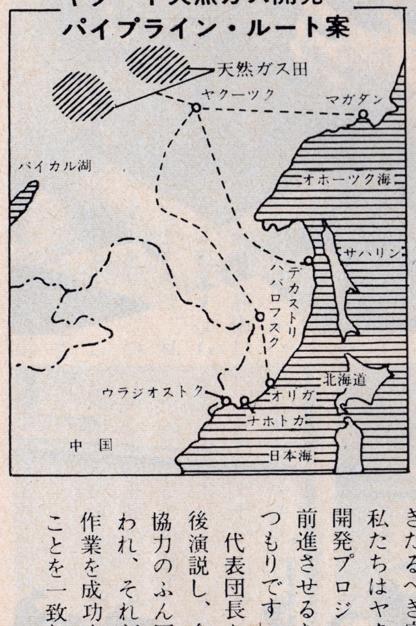
会議ではガス輸送方法にかんする問題が討議され、三つの案が検討された。

——オリガ湾までガスパイプラインを敷設し、そこでガスを液化し、日本と米国へ船で運ぶ。

——マガダン港またはデカストリ港までパイプラインを敷設する。この計画は第1の案よりも短距離なので、投資も少なくてすむ。しかし両港はかなり長期間凍結するので、砕氷船でガス運搬船を誘導する措置が講ぜられなければならない。

——ガス・パイプラインをタタール海峡を横切ってサハリン島まで敷設し、ここでサハリンのガス田と連結させ、さらに北海道までパイプラインを延長し、液化する。

三つの案のうちのどれを採用するか——ヤクート天然ガス開発プロジェクト作成参加者は今後の会議でこの問題を決めなければならない。



東京会議の出席者はその結果を高く評価した。N・オシポフ次官は次のように語った。「ヤクート天然ガス開発プロジェクトの特徴は、ソ連、日本、米国が20世紀のわくを越えるこれほどの大計画をコンペンセーション方式で実現する最初の協力だということにあります。このプロジェクトが実現すれば、三国の今後の経済協力のための物質的基盤を拡大できるでしょう。これらすべてのことはヘルシンキ協定実現の例とみなすことができます」

A・レパルロ副会長は冗談半分にこのプロジェクトを独特に評価して、有名な実業家A・ハマー・オキシデンタル・ペトロリアム会長は米国の主婦がロシアのガスでスープをこしらえることを希望していると語った。

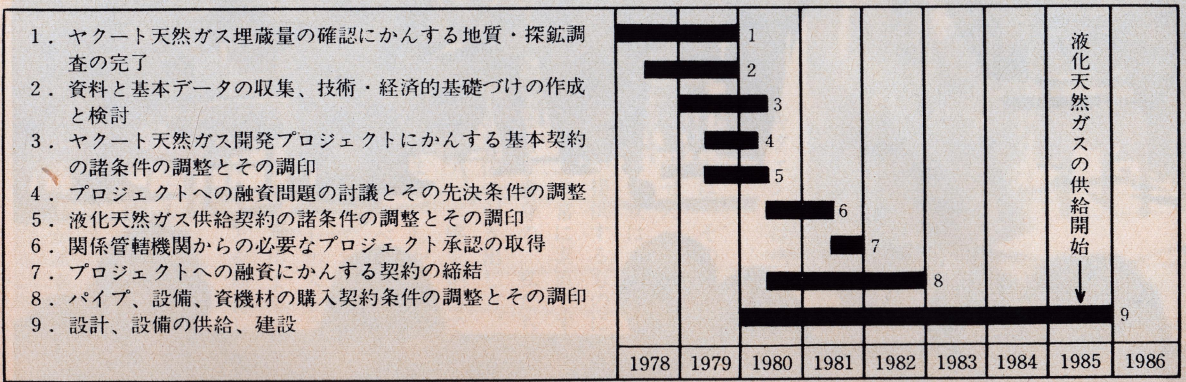
ハマー会長が「諸民族友好」勲章受章のためモスクワに行っているので閉会式に出席しなかったことを言わなければならない。ハマー会長はこのようなソ連の高い表彰を受けた西側の最初の実業家である。

ボイド社長は次のように指摘した。

「今回の会議はヤクート・プロジェクトを大きく前進させました。その実現は、需要がますます増えている天然ガスを米国に大量に供給することを保障し、産地を多様化することができます。私たちは実業家であって政治家ではありませんが、実務的接触と協力の発展が諸国民間の相互理解の深化を助長するものと確信します」

安西浩・東京瓦斯会長は次のように語った。「私たちは言葉から実行へ移りました。ソ米日三国代表団の会議の主な成功は、会議出席者がプロジェクト全体の実現の期限について合意を達成したことにあります。米国におけるきたるべき定期会議では、私たちはヤクート天然ガス開発プロジェクトをさらに前進させるために努力するつもりです」

代表団長たちは覚書調印後演説し、会議は実務的な協力のふん囲気のうちに行われ、それが会議出席者の作業を成功裏に完了させたことを一致して強調した。



ヤクート天然ガス開発プロジェクトにかんする今後の措置の全体計画

中村紘子さんのソ連公演



コンサートのあとのインタビュー



チャイコフスキー記念コンサート・ホールでモスクワ・フィルハーモニー・オーケストラと協演した中村紘子さん

4月2日から17日までモスクワ、レニングラード、キエフで日本の有名な女流ピアニスト中村紘子さんの演奏会が開かれた。

モスクワの音楽ファンはすでに昨年の公演で彼女をよく知っており、従って今回の公演に大きな関心を寄せた。

4月7日、モスクワの最も大きなホールの一つ――チャイコフスキー記念コンサートホールで、中村紘子さんはモスクワ・フィルハーモニー・オーケストラ（正式の名称は、モスクワ国立フィルハーモニー・アカデミー・シンフォニー・オーケストラ）と協演してチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を演奏した。

中村さん自身こう告白している。「モスクワでチャイコフスキーを演奏するには大きな勇気を持たなければなりません。ですからこの日は緊張の連続でした」

このピアノ協奏曲は、書かれてからすでに一〇〇年以上過ぎているが、今日でも世界のすべてのコンサート・ホールで演奏されている。このコンチェルトにたいする解釈は演奏家の数と同じくらいある。その多くの解釈のなかで中村さんに最も親しみ深いものは？

「アメリカのバン・クライバーンとソ連のエミール・ギレリスの演奏が最も親しみ深いですね。私が初めてギレリスの演奏でこのピアノ協奏曲を聴いた時はわずか13歳でした。私はすっかりギレリスに"熱を上げ"、半年のあいだ1日数回ずつ聴きました」と、中村さんは語る。クライバーンに中村さんが親しみを感じているのは、おそらく彼女が日本以外に、クライバーンと同じニューヨークのジュリアード音楽院で学び、同じ先生のロジナ・レビンに師事したからだろう。

中村さんの言葉を借りると、チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番は、「最もロシア的な音楽」である。そのほかに彼女はチャイコフスキーのピアノ協奏曲、ピアノ曲集『四季』を好み、しばしば演奏している。

中村紘子さんはモスクワ・フィルハーモニー・オーケストラを高く評価した。「このオーケストラは実にすばらしいと思います。と申しますのは、私はめったに同じような演奏をせず、つねに多少の変化を加えていますが、このオーケストラはほんの少しの変化でもすぐに感じ取り、非常に敏感に反応するからです。指揮者のキタエンコさんについて言いますと、私は日本でも彼と演奏したいと思っています」

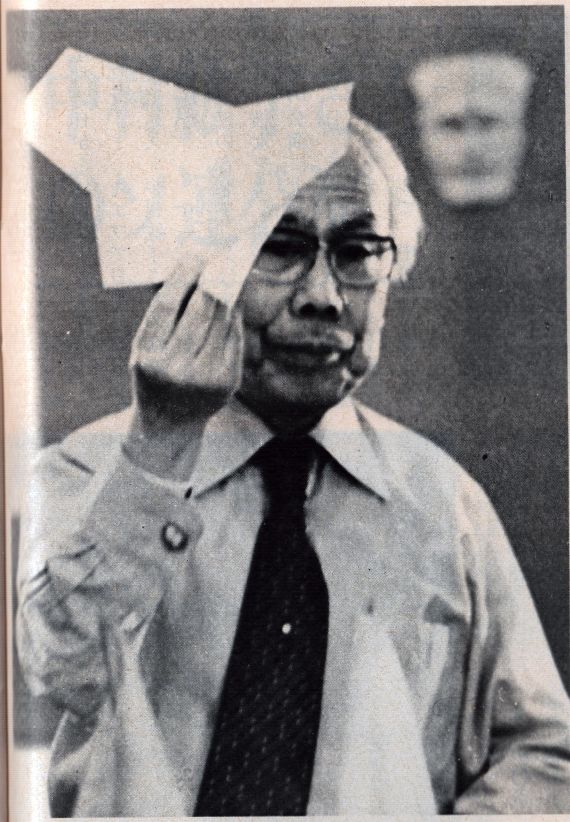
このオーケストラの芸術的指導者で主任指揮者、ロシア連邦共和国功労芸術家、ヘルベルト・フォン・カラヤン基金国際指揮者コンクール優勝者のドミトリー・キタエンコ（38歳）は、現代の若手指揮者の中の逸材。彼はレニングラード、モスクワ両市の音楽院で学び、ウィーン音楽院で研修した。スタニスラフスキー・ネミロビチ＝ダンチェンコ記念モスクワ・アカデミー音楽劇場の主任指揮者として働き、ビゼーの『カルメン』、ショスターコビチの『カテリーナ・イズマイロワ』、プッチーニの『ボエーム』、チャイコフスキーの『スペードの女王』等のオペラを上演し成功を収めた。日本をもふくむ諸外国での公演も大きな成功を収めている。

中村紘子さんの演奏について、ドミートリー・キタエンコは次のように語った。

「中村さんの魅力は、その音楽性や技巧だけではありません。アンサンブル感覚が抜群です。彼女はつねにオーケストラや指揮者が提供するものに喜んでついてきます。非常に素直ですが、しかし時には自分自身の、私たちにとって予想外の旋律の引き出し方、フレーズの切り方、テンポ感を納得できるように出してきます。しかし中村さんが出してくるものはすべて非常に論理的であり、明快ですので、彼女とは協演しやすいのです。オーケストラも私も協演から大きな満足を得ましたし、これからも協演することを期待しています」

モスクワを出発するに先立って、4月17日に対外友好会館で中村紘子さんの独奏会が開かれ、モーツァルト、ショパン、リストの作品が演奏された。

日本の折り紙にうっとり



「まず、このように折ります」と吉沢先生。

右下　「これはゴリラです」と笑みを浮かべる吉沢夫人。

左下　すぐにきちんとした美しいものができるわけではない。そこで日本の大使館員夫人が助言する。





世界中どこを探しても、折り紙を知らない日本人などまずいない。日本人ならたいてい、小さいときから折り紙が折れる。その折り紙芸術が、このほどソ連で紹介された。

4月17日、モスクワの対外友好会館で、日本大使館が招待した国際折り紙研究会の吉沢章会長とソ日協会活動家との会合が、ソ日協会主催で開かれた。吉沢さんはモスクワにくる前に、すでにナホトカやレニングラードでもその腕前を披露しており、またソ日協会会合の二日後の4月19日にもモスクワ市ピオネール・学童宮殿で、大勢の子どもたちに折り紙のつくり方を説明した。

さて、17日の友好会館での吉沢さんの折り紙の〝入門コース〟は、日本の小学校の授業風景そっくり。吉沢さんの前に並べられた自作の手本には、華麗な尾をひろげたクジャクあり、いまにも襲いかかるかのようなつら構えのゴリラあり、さまざまな犬や馬、ゾウやウサギ、白鳥やチョウありといったぐあい。陳列壁にも折り紙の面(めん)がいくつかかかっていた。

この日は参加者一人一人に折り紙セットが配られたので、吉沢さんの合図と指導で進められた折り紙づくりの実習は真剣そのもの。吉沢さんが折り方を一つ一つ順を追って説明し、それを女性通訳がロシア語に通訳。さらに重光大使夫人をはじめ同席の日本大使館員夫人たちが席をまわって手ほどきした。

出席者たちはなごやかに、熱心に、積極的に意見や助言を交換したり、自分の作品を見せ合い、また家に帰って子どもや孫に折り紙を教えようと、つとめてたのしい形のものをつくった。吉沢さんも20―30分ごとに全員に息抜きの体操をさせ、折り紙に不慣れな手を休めさせるという気のくばりようだった。

もちろん初心者のつくったチョウや花や犬、ツルは先生の作品とは程遠い出来だったが、どの出席者も、2時間のうちに、わずかとはいえ、この日本の古い民族芸術に触れ、紙きれと想像力さえあれば創作できる手の芸術の喜びを感じることができたようであった。



✳ トピックス

風力発電の未来

ソ連領内を吹くすべての風の総〝出力〟は約1030億KWと計算されている。たとえばソ連北極地域には、地球全体の電力需要をカバーできるような合計出力数十億KWの風力発電所群を建設することも可能だ。

ソ連では翼長 3.6mまたはそれ以上の出力 100KWのシリーズ型風力発動機が製造されている。これらの風力発動機は製粉、飼料の粉末化、野営地の照明、畑や果園のかんがい、畜産場や小集落への給水、硬水の軟化や海水の脱塩など、さまざまな用途に使われている。

現在テスト中の風力装置は羽根車の直径が24m。この発動機は年平均風速が秒速６m以上のステップや極北地域で小集落への電力供給を保障できる。また、１時間に深さ15mの井戸から1500立方mの水を吸み上げることができる。

ソ連では今後10年間に15万台の風力装置を生産し、設置する予定。ソ連欧州部の北にあるコラ半島の第１号風力発電系統の設計が作成された。送電線の延長1100km。この発電系統には出力各 100万KWの風力発電グループが 238組み込まれる。この巨大な出力は翼長50mの風車２基を持つ回転塔からなる発電施設で得られる。最初の発電施設は1980年までに建設される。

ソ連の経営管理者の大きな権限

経済学博士　アレクサンドル・ビルマン

計画はスコアと同じ

外国の経済学者から私はたびたびこんな意見を耳にする——ソ連の経済は計画性が災いして半身不随になっており、経営管理者の行動はいろんな指令でがんじがらめになっているため、経営管理者はどうにも創意を発揮できないでいると。

こんなとき、すぐ私は、道路交通の場合と同じじゃないかと言いたくなる。もし交通規則をよく知っていて、行き先までの交差点や信号の場所がよく分かっておれば、自分の車の最適のコースがたやすく選べるというものだ。

計画経済のもとで、経営上の創意を発揮できるかどうかも、それと同じことだ。計画経済の場合は、少なくとも向こう5年間の資源と需要が分かっているし、土地、地下資源、交通機関、生産手段の私有などという障害物も、ストライキその他の社会的な紛争もなく、外国貿易は国が独占しており、科学技術の成果はどの企業も平等に利用できる。だから最適の進路が選べるわけだ。

もし企業長に、一九七九年、または一九八〇年に、自分の工場が何を生産する予定かが分かっておれば、企業長はもっと自由な行動がとれよう。

ここで読者はこう反論するかも知れない——計画的課題とか、義務支出規準とか、〝上から〟承認された製品リストとか、中央の投資額などで縛られていて、自由に動けないのじゃないかと。この質問に答える前に、読者に一つ質問したい。たとえばスコアは演奏者を縛らないものだろうか？　そもそも、計画もスコアと同じようなものなのだ。

ではソ連の企業長の行動はどの程度自由であり、どの程度制限されているのだろうか？　ここで企業長といったが、正確には管理部といったほうがよいだろう。なぜなら企業長はふつう、生産上の大きな問題がでるとすべて、技師長、エコノミスト（経済担当）長、建設・補給・販売担当の各副企業長、その他の主だった専門家と共同で解決にあたるからだ。

企業長の行動の制限

さてさきの質問に答えるにあたって頭におかねばならないのは、ソ連では、「国営社会主義企業規程」によって、一連の義務が定められているということだ。

とくに企業が所有することを認証されている財産は、企業の定款で定められた基金（すなわち使用できる資本）である。企業は国家または指導機関の債務に責任を負わず、後者も企業の債務に責任を負わない。企業の生産物は国家が承認した価格で販売される。つまり価格は計画で定められた生産費の補償と、定款で定められた基金額のほぼ15％の利潤を見込んでいる。実際の利潤はそれよりも多くなったり少なくなったりするが、それは製品の量や実際の生産費しだいだ。国家「品質保証マーク」のつく製品（世界の優秀基準なみか、それ以上の品質の製品）は10％ほど価格が高くつけられ、従ってその製品を生産する企業の利潤は増える。

利潤の一部は国家予算の歳入の中に加えられ（一九七六年に工業平均でこの利潤は59％）、一部分は物質的刺激基金に（同じ一九七六年に16％）、残りは建設、学術研究や材料のストックの増加にあてられる。

必要があれば、企業は銀行から融資を受ける（たとえば、一九七六年末現在、銀行信用は工業企業の全回転資金の約半分を占めた）。銀行の貸付金の利子はふつう年利2—4％である。

では中央は何を承認するのか？　まず製品の販売総量である。たとえば、年間一〇〇〇万ルーブルの商品を販売する課題を出す（ある種の製品、たとえばユニークな設備、船舶などは一点ずつ指示）。

そこで企業が支出できる賃金の総額（フォンド）が承認される。もちろん、製品の実際の販売量が計画目標を上回った場合は、賃金フォンドも増える（ふつう計画量以上の販売分の60％）。

このほか中央が決めるのは、利潤総額や国家予算との相互関係（予算歳入への企業の納入金、または国家予算からの企業への融資額）である。

最も重要な建設物とその操業開始時期の指定、新しい技術や工程の導入課題、納入者がその企業へ納入するものの量を中央が決める。

現行規程によると、企業長は国家計画に定められていて、それにもとづいて売り渡し契約を結んでいる者以外の買い手に製品を売ることはできない。また自分の裁量で、製品の価格を上げ下げすることもできない（新製品または特殊製品を製造する場合は例外。その場合は発注者と合意した価格で売る）。企業長は自分の企業の製品をクレジットで販売したり、労働組合の同意なしに労働者を解雇したり、賃率を勝手に変えたりすることはできない。

経営手腕の見せどころ

しかし……

それにもかかわらず、企業長の権限は大きい。何分企業の長だからそれも当然だ。

生産施設に余裕があるなら、注文をとり、計画目標以上に製品をつくることができる。その場合、その発注者が計画に指示されている、いないにかかわりなく、発注者に製品を販売できる。それが優良品の場合、さきに述べたとおり、管理部はふつうよりも高い価格をつけようとする。このほか企業長は関係省庁の会議に参加し、品質のよい製品をつくるために工程を変える必要を説くこともできる。工程を変えるとなると事実上工場全体を本格的に再編成しなければならず、企業長はこのリスクにたいする責任を全面的に負うことになる。

企業長は発展フォンドや利潤を、生産の拡大に使うことができる。銀行から融資を受け、建設組織と契約を結ぶ権限も持つ。また工場内、または工場のためのあらゆる建設の設計案を承認し、建設者の仕事にたいして支払いをする。

ある具体的な企業へ製品を販売すると計画の中に定めてあり、それが〝上から〟承認されていても、企業長はこの点で実際に融通をきかすことができる。あれこれの商工業見本市、または展示会に自分の企業の製品を出品したり、その製品を極力宣伝したりして、企業長（正確に言うとその代理人）は、自分の裁量で卸しの買い手と直接の契約を結ぶことができる。企業長のイニシアチブで結ばれたこの契約は、他の国家的な課題といっしょに、国家計画に含められる。

企業長は賃率を変えずに、労働者の実質賃金を引き上げることもできる。国家計画の遂行とともに、これは企業の指導者の最も重要な課題の一つである。そもそもこれらの課題は相互に関連し合っている課題である。なぜなら国の利益と労働者自身の利益とが一致しているからだ。つまり品質、期限ともに計画目標が達成されると（まして超過遂行されると）、労働者は賞与金やその他の報奨金を受けとる。これらは企業長が管理している物質的刺激フォンドから出る。

ソ連の企業長は労働組合の同意がなければ労働者を解雇できないが、労働法のわく内で、経済的効率から見て企業に有利な人事政策をとることができる。

このような企業長のイニシアチブが成功した例は、ソ連で好評をえた〝シチョキノの実験〟である。その要点はこうだ。シチョキノ市（モスクワの近くにある）の化学コンビナートの管理部は、同工場では、ある職種の人員が余っており、もっと少ない人手でも、同じ作業量がやれると見てとった。そこで管理部はかなりの人員を整理し、残った従業員の賃金を大幅に引き上げた。だからといって整理された労働者の利益が侵されたわけではない。その一部は新しい技能資格を身につけて（もちろん、企業の負担で）、同じ工場の人手のたりない職種に回され、一部はそのまま市内の人手不足の他の企業に回された（もちろん、賃金はカットされない）。要するに、だれも利益を損うことなく次の仕事についたわけだ。労働生産性が上がったコンビナート自体も経済効果がうんと上がった。

社会・生活問題も解決

純生産的な諸問題のほかに、工場、企業合同の職場勤労集団がかかえる社会・日常生活上の問題の解決も企業長の権限内にあり、その権限はとても大きく、企業が大きくて利潤も多いと、それだけいろんなこともやれる。たとえば、企業長はクリミアの黒海沿岸のサナトリウム建設に利潤の一部を支出する権限を持っている。従業員用の高層アパート、スタジアム、文化会館も建設できる。管理部は労働者の協同組合住宅の費用の一部に、利潤の一定部分をあてることができる（この住宅は労働者の個人所有になる）。

要するに、イニシアチブを発揮できるかどうかは、なによりも企業長個人の実務的能力いかんにかかっている。

企業長の単独責任制とはいっても、それにはかなりの条件がついているといえる——もちろん、どんなに才能のある企業長でも、大企業内のあらゆる生産問題や社会・生活面の問題をひとりで解決できるわけはない。その場合問題になるのは、十分な権限をもっている副企業長の〝指揮〟ではなく、すでにしきたりになっている企業長と社会団体（党、労働組合、コムソモールなどの団体）との協力である。実を言えば、このような協力には、何十年もの実践を通じてためされたわが生産関係の民主主義が反映している。つまり、企業の管理に多くの労働者が直接参加すればするほど、それだけよいということだ。

地球の呼吸を聴く

――ウラルの地球潮汐観測所

ウラジーミル・マロフ

地球はその秘密を簡単には明かさない。地球内部についてはまだ、たとえば宇宙よりもナゾの部分が多い。人間は地球深部にまだ数kmしか侵入していないので、もっと深い所で何が起こっているかについては、いくらか信頼できる仮説を立てるしかない。いわゆる地球潮汐（ちょうせき）についても二、三の仮説を立てることができる。

以下は地球潮汐を研究しているウラルのクングル観測所からのルポ。

……ごう音とともに重いドアが閉まるとすぐに、冬の寒さが膚に感じられる。ドアを境に世界が二分されたかのようだ。外のレジャナヤ山のふもとはまだ夏の息吹が残っていたが、ここの、遠くへ延びているゆるやかな斜面の廊下はおよそ零度の寒さだ。目が薄闇に慣れてきて、案内役の工学技師・地質学者のウラジーミル・シェルストビトフが口元に笑みを浮かべているのが見えた。

「この山がどうしてレジャナヤ（氷の）と呼ばれているのかいま分かったでしょう。いつの季節でもここには冬が潜んでいるんです。たとえば1月はマイナス30度C、一番暑い7月でも今日のように寒いんですから……」

国内各地からやって来た見学者はもう廊下の奥へと消えた。

「あの人たちは仕事の邪魔になりませんか？」

「計器類はずっと離れた洞窟（どうくつ）の中にあって、見学者はそこへは行きません」と、シェルストビトフは答える。

コンクリートの廊下は突如終わり、氷の床と円天井との間の巨大な空間がひらける。ナイフスイッチがぱちりと音を立てると、投光機がぱあっとついて、円天井が彩られる。入口もたくさんの燈火で照らされる。壁や天井では多彩な氷の結晶面がきらきら光っている。精巧な宝石細工のまばゆい輝きそっくりだ。ここはクングル氷洞窟の第1洞窟で、有名なブリリアント洞窟である……

ソ連科学アカデミー・ウラル科学センターの地球潮汐観測所は、石と氷からなるおとぎ話のような地下宮殿の中にある。ここへ毎年二〇万人の見学者がやってくる。

しかし、今日では氷洞窟はもう見学の対象だけでなく、研究室でもある。地球物理学者はこの研究室を地球潮汐観測所に選んだのだ。

月と太陽の引力を受けて地殻は、海面のように毎日上下している。地殻と一緒に工場やビルの建ち並ぶ大都市、森林や河川のひろがる平野、砂漠、巨大な山脈までが上下に振動する。もちろん、水の動きほどには目立たない。大洋の潮波は数mの高さに達することがあるが、地球の呼吸は敏感な計器しか感じとれない。

系統的な観察が始まった前世紀に、地球の潮汐はそれほど小さいものでないことが分かった。地殻の垂直転位は時には50cmにさえ達し、水平転位は3―5cmに達することがある。たとえば、モスクワは毎日ほぼ50cm上下している。いわば呼吸しているのである。このような呼吸に耳を傾け、よく聴くと、多くのこと、なによりもまず地球の内部構造がわかる。これにかんする最近の理論が、地球潮汐の綿密で長期の研究によって裏付けられているのは、それなりの理由がある。時間の経過による地球潮汐変化の規模は、まず第一に地球の構造、たとえば地球の表面から中心までのさまざまな層の密度や弾性の分布に左右されている。

またたとえば、潮汐は地球の回転を妨げることが明らかになった。そのほか、地球の潮汐は月が地球からゆっくりと遠ざかること（1年に3cmの速度で遠ざかる）によっても起こる。

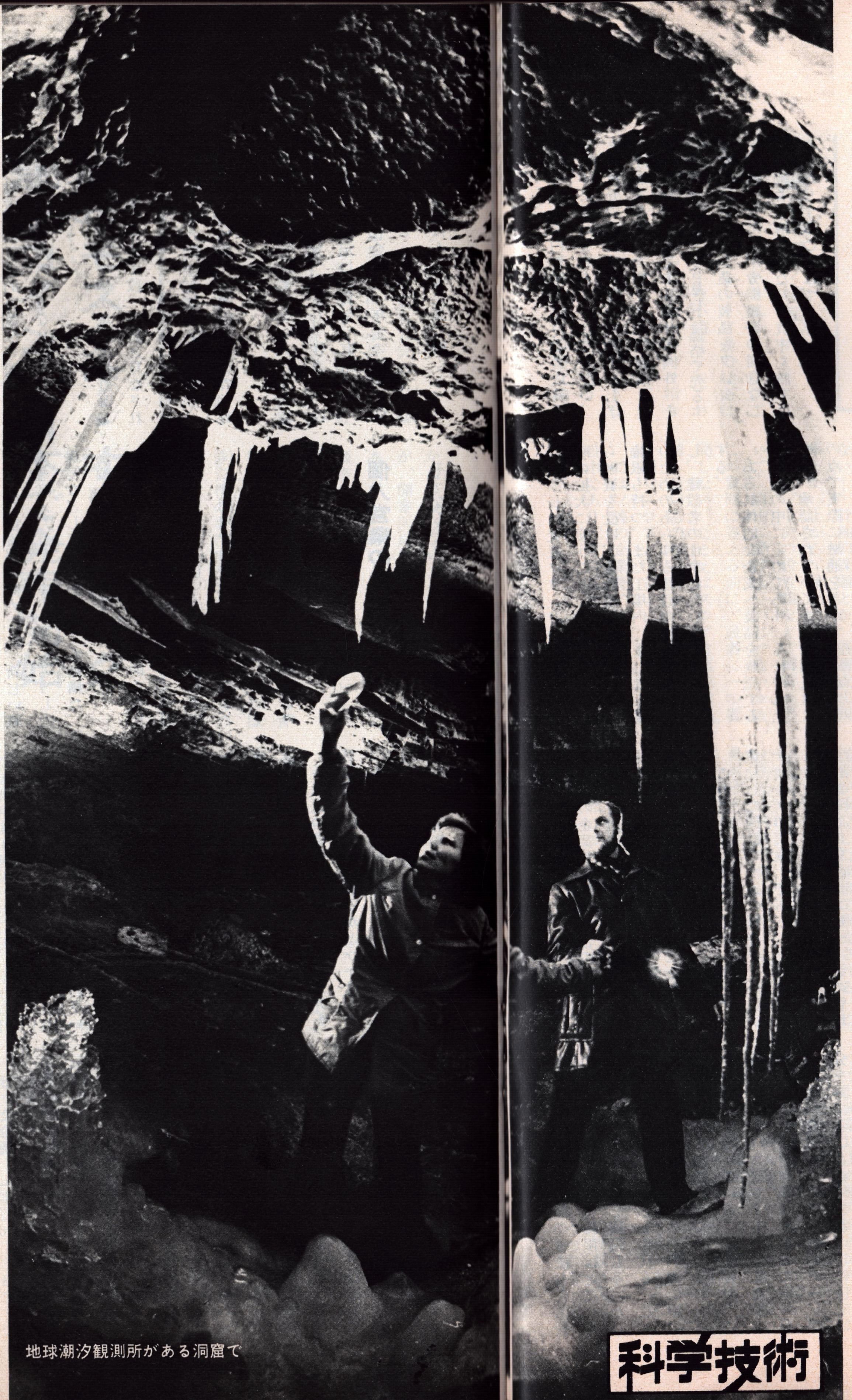
もっとも、長年の観測データをまとめてはじめて、一定の法則が明らかになろう。その場合、多くの国の観測所の歩調を合わせた毎日の〝予備的〟測定が必要だ……

刺すような灯火の光が暗闇を引き裂き、洞窟の奥の、広大な石の広場を照らしている。彫り抜いた壁のくぼみには計器類が置いてある。暗闇の中でやっと見分けが付く電線がそれらの計器から増幅器や自記計の付いた装置へと延びている。

私の案内人が自記計から紙テープを引き出すと、そのあとに新しい紙テープが挿入される。計器は1分間たりとも仕事を中断しない。そして地下70mのここでは、計器はとくに正確に作動し、ほかのどの観測所の機器よりも確実に地球の呼吸を記録している。なにしろ気圧の変化や風、または温度の変化のようなささいなものでさえ、記録の正確さにひびくからだ。クングル観測所ではこれらいっさいの邪魔物をほとんど取り除いている。

大地にかんする知識は少しずつ集まっている。次に紹介するのは、クングル地球潮汐観測所の小さな〝収穫〟の一つ。Y・エジョフ地質・鉱物学博士候補が明らかにしたところによると、潮汐は水源の化学的組成にさえ影響を与える。地殻が東へ〝傾く〟と、洞窟と隣り合った水源では炭酸の含有量が増える。地殻の運動が逆方向に向くと、炭酸の含有量は減る。これは興味深い発見である。

このような不思議な現象がどうして起こったかは、まだナゾだ。新しい発見は新しい問題も提起したが、最も興味深い現象である地球潮汐の不断の観測は、こんごさらに数多くの発見とナゾをもたらすことだろう。



地球潮汐観測所がある洞窟で

科学技術

ソビエト民主主義

メリットの少ないソ連の個人営業

アレクサンドル・トルンダエフスキー

国営企業で働けば…

「かりに私が個人で何か商売を始めることができるだろうか」と、レニングラード市人民代議員ソビエト執行委員会でたずねると、「もちろんできますよ」という答えが返ってきた。

私がこんなことをたずねたのは、ソ連の勤労者の圧倒的多数が、国営企業で働いているからだ。なぜそうなっているのだろう？

そもそもソ連では土地、天然資源および主要な生産手段・用具と見なされるものはすべて、ソ連憲法により私有物とはなりえないことになっており、全部が全人民的、国家的所有なのである。

だれでも国営企業でなら、いつでも適当な仕事が見つかるし、仕事につけばその人は安定した賃金、有給休暇、国庫負担の社会保険、年金の権利が保障される。

そのほかにも国営企業で働くと、いろいろな実際的な特権が与えられる。たとえば現地のソビエト執行委員会を経由するよりも早く住宅が自分の働く企業から手に入り、サナトリウムまたは休息の家行きの特典付き（無料または実費の7割引）の利用券がもらえ、子どもを企業付属の保育所または幼稚園に入れることもできる。また企業の負担で技能資格を高めたり、新しい職業を学んだりできる。だからこうした保障などしてもらわなくても結構だ、と個人商売に入る人は少ない。

国営企業で働くさいの精神的な要因も見逃せない。集団内で働けば、交際仲間が見つかるし、よい成績をあげれば、仲間内での社会的権威も高まるというものだ。堅苦しく言うと、集団主義はソ連における実際的な精神財なのである。

個人営業の許可条件

そうなるとソ連の市民の雇用者は国家だけということになるのか？　さにあらずである。個人で商売をやりたい人々がいるが、その人たちはどうしたらいいのだろうか？

レニングラード市ソビエトのゲラシム・ラムバム歳入部長の話をきこう。

「ソ連憲法第一七条には、市民およびその家族員の自らの労働だけにもとづく（他人の労働の搾取を排する）手工業者の個人経営が法律により認められるということが述べてあり、そのさい、他人の労働を搾取しないということが、唯一の原則的条件である」

手工業者はなんでも製造できるわけではなく、若干の制限が定めてある。たとえば、一切の兵器と弾薬、薬品や医療器械、化学製品、香水、化粧品類、毒物、麻薬は製造できない。

手工業の場合、個人的なイニシアチブが大いに発揮できるかどうかは、すべて市況と職人の腕しだい。たとえば、人口約五〇〇万人のレニングラードで一人のマニキュア師が独立し、個人で営業を始めた。また流行が〝モダニズム〟から〝復古調〟へ移ったのをきっかけにある女性は、自家営業としてふさ付きの絹のランプ・シェードづくりを始めた。

写真師、靴屋、開業医

レニングラードではこうした家内手工業の種類は約30種で、従事者数は約三〇〇〇人と少ない。だが家内手工業をやるための登録証明証の取得手続きは簡単だ。

まずどんな商売をやるかを決めたうえ、適当な建物を探す。これはレニングラードではむずかしいことではない。毎年約五万フラットの新住宅が建てられているので、いまの居住条件に合わない建物なら、たくさん空いている。自分の地区の公営事業部に申し出てそれを借り、そこに仕事場を設ければよい。それには、登録証明料として5ルーブル（1ルーブルは約三四〇円）を支払わねばならない。

レニングラードで最も人気のある個人営業は写真業、2位は小規模なくつ修理業。造花も需要が多い（従事者数約40人）。宝石細工師、洋服屋、土産品製造者もいるし、10人ぐらいだが開業医もいる。

ソ連の開業医は医療報酬を受け取るさい、無料の保健制度の存在を頭におかねばならない。ついでに言っておくが、開業医以外の個人営業者も、客を逃さないために、安定した、安い国家価格を頭において、製品やサービスの価格を決めなければならない。

財務省の現行規則によると、個人営業者の所得が、国営企業で働く同じ技能資格の専門家なみであれば、通常の所得税を支払う。もし家内工業者の所得が平均水準より多ければ、税金もそれだけ多くなる。

さてソ連にとってこの非典型的な〝自由市場〟の先行きはどうか？

さきのゲラシム・ラムバム部長はこう説明する。「一九二〇年代に手工業は国民経済の発展に非常に貢献した。しかし、国の経済が発展するにつれて、社会主義的国営産業の地位が強まり、拡大した。当然、そのため個人労働の比率は今のように最低限まで落ちた。もう長年レニングラードの家内手工業従事者の数は増えていない。別にだれも彼らの活動を制限しているわけではない。われわれはただ財政規則が順守されているかどうかを注視しているだけだ。しかし注目すべき点は、若い人が家内工業へまったく走らないことだ」

80年モスクワ・オリンピック記念コイン、日本で発売開始

一九八〇年にモスクワで開催される第22回オリンピック大会の記念コインが6月2日から日本全国で売り出され、コイン愛好家の人気を集めている。モスクワ・オリンピック記念コインは、一九八〇年夏までに額面5ルーブルから150ルーブルまでの銀・金・白金およびプルーフ貨（コレクション用に特別加工したもの）がシリーズで39種類発行されるが、今回発売されたのは、そのうちの第1回発行分——銀貨（銀品位90%）6種で、10ルーブル貨2種、5ルーブル貨4種。デザインはアレクサンドル・エルマコフ。

記念コインのデザインは、表面は全コイン共通で、ソ連の国章、ソ連邦の略称（ＣＣＣＰ）、コインの額面が刻印されている（写真参照）。

裏面のデザインはそれぞれ異なり、今回発売のものは10ルーブル貨が一九八〇年オリンピック・シンボルマークとソ連地図のものと、モスクワ市の風景をデザインしたもの。円周にそって「第22回オリンピック大会・モスクワ・一九八〇年」の銘がある（これは他のコインにも共通）。

5ルーブル貨の裏面には80年オリンピックの副会場となる他の四都市（写真の下段左から）ミンスク、タリン、キエフ、レニングラードの風景がデザインされている。

モスクワ・オリンピック記念コインの日本での輸入総代理店には西武百貨店が当たり、新しく設立された「一九八〇年オリンピックコイン企画」が総発売元になり、有名百貨店、金融機関、コイン専門店、貴金属商、スポーツ用品店などで発売している。今回の第1回発行分のコインの価格はケース入りで未使用貨6種セット二万二五〇〇円、プルーフ貨6種セット三万円。日本で販売されたコインの総額面の3%は日本オリンピック委員会に寄付される。

なお、お問合わせは、左記へ。

（郵便番号一七一）東京都豊島区南池袋1−28−1　**一九八〇年オリンピック企画**　（電話03−983−0161㈹内線3789）



写真上：今回発売されたモスクワ・オリンピック記念銀貨の表面

写真下：同じく裏面のデザイン——上段10ルーブル貨、下段5ルーブル貨。





山国ダゲスタンを訪ねて

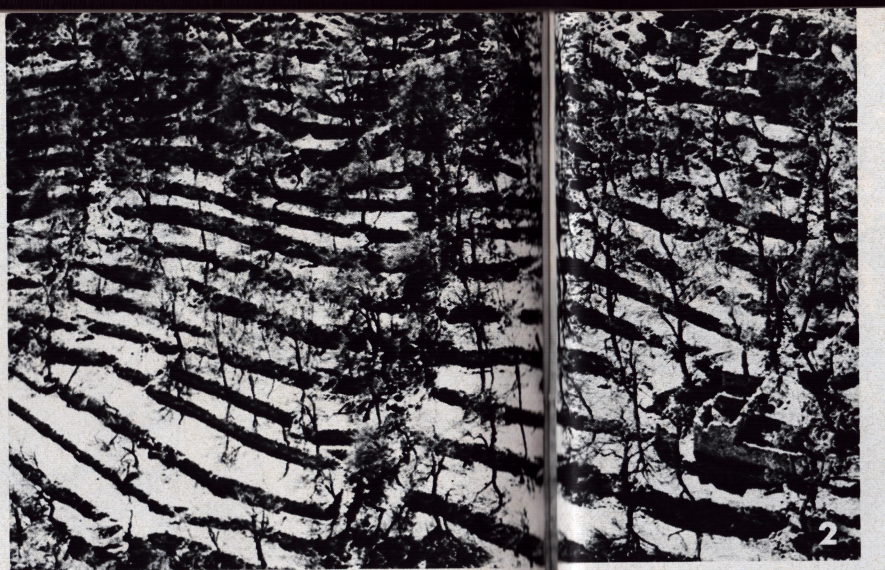
エブニカ・スベトラノワ
カメラ　A・ズイビン

山羊皮のそで無し外とうブルカは、羊飼いのふだん着。苦労は多いが、ロマンチックなその生活にぴったりの衣装だ。

ダゲスタンはカフカズにある人口一五〇万余の小さな自治共和国。面積約五万平方km。カスピ海に面したその国土の3/4は山である。そして、この地にある畑の多くは、人間が山を削り、手で石を取り除いて作り出したものだ…

山国ダゲスタン









ダゲスタンについて語るとき、その〝特色〟として第一にあげられるのは多言語性と地震。

ダゲスタンには大昔から大小30以上の民族が隣り合って暮らしてきた。各民族はそれぞれ独自の言語を話していた。一九一七年の10月革命後、ダゲスタンの諸民族はようやく共通の言語としてロシア語でお互いの意思を通じ合うようになった（ダゲスタンはロシア連邦共和国に入っている）。しかし、これは母語が忘れ去られたということではない。母語は母語として学校で教えられ、それぞれの母語で新聞、雑誌、本が発行されている。

一方、地震はダゲスタンの歴史上、数え切れないほど起こっている。過去一五〇年間だけでも、大きな地震が20回以上あった。その中で最大の被害をもたらしたのが一九七〇年5月の地震。この地震で約四万五〇〇〇人が住む家を失った。しかし、文字通り翌日には食料、医薬品、セメント、材木、レンガ、ガラスなどの建材、ブルドーザ、エクスカベータなどの土木機械を積んだ救援列車がソ連全国からダゲスタンに駆け付けてきた……

この地震から5年後、被災地には美しいコンクリートの建物からなる街区——公園や池のある現代的な団地がいくつも誕生した。新しい建物はいずれも耐震設計で、その後の地震ではびくともしなかった。

美しい自然と経済

この風光に恵まれた土地には、カスピ海の砂地の岸をめがけて滑り降りてゆくカフカズの山塊もあれば、砂漠性のステップ、亜熱帯性のカツラの林もある。ダゲスタンの首都マハチカラの近くには、飛んできた黄砂で出来た世界最高（二一三m！）の山がある。これはここが風の交差路になっていて、反対方向から吹いてくる風同士が衝突するために形成されたもの。この珍しい山には独特の植物相と動物相、それも古い、絶滅しかかっている動植物が見られるので、歴史家、民族学者、生物学者、その他の分野の学者たちの研究対象になっている。ほんの半世紀前には住民の90％が文盲だったダゲスタンに、今ではソ連科学アカデミーの支部をはじめ、経済、文学、地質学、半導体物理学など多数の研究所がある……

山の斜面を流れ落ちてくる陽気な河川はダゲスタンの景観を美しくし、果樹園や畑を潤しているだけではない。水量の多いスラク川にはチルケイ発電所をはじめとする15の発電所からなるカスケード状発電所体系が建設中。その総出力は約四〇〇万KWで、カフカズ最大の発電センターになる。

この発電所群の電力は、ダゲスタンの地に現代的な工業企業を生み出した。たとえば、ソ連で初のプラスチック・フィルム印刷機工場もここに建設された。現在、自治共和国全体で約二〇〇の工場がある。

カスケード状発電所群とともにスラク川には面積40平方km以上の貯水池が生まれ、乾燥地のかんがいに利用されている。

1 水力発電所が建設された古い村チルケイのかつての住民は、今では新しい集落ドゥブキに住んでいる。
2 農民たちは山を削り、石を拾って畑を作った。勤勉と創意は山国ダゲスタンの人々すべての気質。
3 平地の少ないダゲスタンでは、山のふもとにあるこのアフティ村のようなところでも、建物は階段状に山の斜面を上ってゆく。
4 首都マハチカラの南一二五kmにある要塞都市デルベントは世界で最も古いものの一つ。学者の推定では紀元五六七年に建てられた。城壁は周囲約5km。石の門が九つ、建設当時のまま残っている。

〃銀の村〃の工芸

16世紀以来、彫金工芸で知られるダゲスタン南部のクバチ村は〃銀の村〃と呼ばれている。貴金属の打ち出し細工(チェカンカ)、彫刻、黒金象眼、宝石のカッティングがここでは村人たちの伝統的な生業になっている。ダゲスタンの名工たちが作った水さし、腕輪、首飾り、グラスなどは各地の博物館に陳列されている。かれらはまた国際的な博覧会で多くの賞を受けている。

クバチ村の普通教育学校では生徒たちは初等科からもう彫金や装飾画の技術を学んでいる。これはもちろん、生徒たちが全員、工芸家になるということではない。クバチ村の出身者で医師、トラクタ運転手、物理学者、野菜栽培者、織物工として働いている人も多い。しかし、この工芸の村は自己の伝統的な美的文化を保持している。ここではだれもが美術を理解しなければならないし、美術を正しく評価できなければならないのだ。

今日に生きる伝統

ダゲスタンではほとんどどこの集落でも、何かの工芸技術または生業が発達している。ここには古くから長ぐつ作り、鍛冶屋、陶器作り、じゅうたん織り、木彫り、錫(すず)めっき、織物、あるいは綱渡りを専門にする村があった。

これらの伝統の多くは、現在も生きている。たとえば、ツォフクラ村ではかつて、子どもが断崖の上に張られた綱を渡ることができた日をその子の真の誕生日と見なしていた。この村では今でもほとんど全員がぴんと張った電線の上で上手に体のバランスを取る。

ツォフクラ村からはサーカスの珍しい綱渡りアンサンブルが生まれている。ダゲスタンはまた、火のように激しい情熱的な踊り、憂いを秘めた優しい踊りなどその民族舞踊でも名高い。ダゲスタン西南部ベジタ村のアマチュア女性民族舞踊アンサンブルは、15カ国の民族舞踊団が参加したパリのフェステ





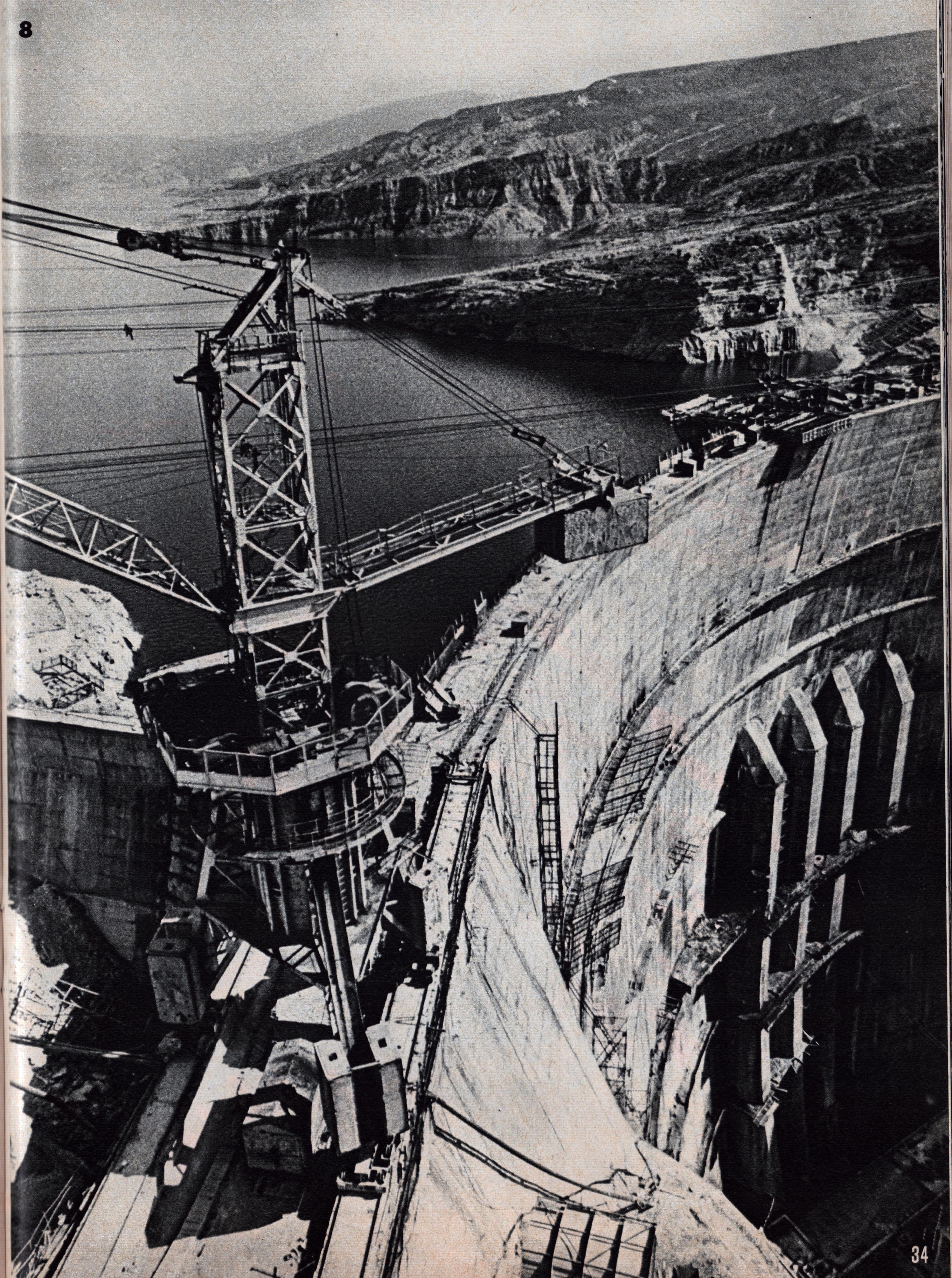


5 アクシャ村の民族舞踊アンサンブルのメンバー

6 クバチ村の工芸家たちが作った伝統的な水さしと、家の壁の石積みが描き出す図形には、ダゲスタンの民族文化に特徴的なフォルムと線が共通している。

7 ダゲスタン南部の村や、都市の工場で織られているじゅうたん。国際市場でも人気が高い。

8



ィバルで一等賞を獲得してダゲスタンの人々を大喜びさせた。

じゅうたん織りもダゲスタンの古くからの生業。複雑な模様の手織りの製品がここから世界各国へ輸出されている。厚みがあり、柔らかく、ビロードのような輝きを持つダゲスタンのじゅうたんは現在も国際市場で高い評価を受けている。

祭りのしきたり

ダゲスタンのお祭りはにぎやかで、エキゾチックである。〝最初の畝（うね）起こし〟祭りの日は、夜が明けるか明けないうちから着飾った村人たちがドゥルナというラッパと太鼓の伴奏付きで広場に集まってくる。突然、乱暴に水をひっかけられたとしても、ここではあわてたり、けしからんなどという素振りを見せてはいけない。これは「日照りがありませんように」という願いを込めたこのお祭りのしきたりなのだ。土を一握りぶつけられるかもしれない。これも「豊作でありますように」という願いを込めたこのお祭りのしきたりである。女たちは焼き立てのパンをふるまい、子どもたちにはお菓子を配る。

祭りの始まりを宣言するのは、この儀式の主人公である種まきの人たち。まず最初に古色そうぜんたる木のすき（犂）を持った老人が登場する。このすきは若者たちに昔の農民の労働がどういうものだったかを見せるために、特にこの祭り用として村に保存されているのだ。そして最後に登場するのが、テープや花で身を飾った若いトラクタ運転手。アタッチメントを付けた最新式のトラクタを運転している。彼は最初の畝を起こし、種まきの作業を開始する大役をおおせつかっている。

夕方、仕事を終えたトラクタ運転手たちに大きな丸パンが捧げられる。競馬やのど自慢大会、村人たちが全員参加する踊りが始まる。

〝羊飼いの祭り〟も面白い。これも春の祭りで、ステップが新鮮な緑の草におおわれ、真っ赤なケシの花が点々と咲き乱れるころに行われる。このころ、羊飼いたちは7－8ヵ月ぶりに故郷の村に帰ってくる。彼らは冬のあいだ故郷から数百km離れた山上の放牧地で羊の群れの世話をしていたのである。村人たちは楽器を演奏し、歌をうたいながら、羊飼いたちを出迎える。

9



8 スラク川に建設されたチルケイ水力発電所のダム

9 自分たちの作品の一つ、ワイン用角杯を見せるダゲスタンの村の宝石細工師たち。

イデオロギー問題

ボリシェビズムはこうして始まった

パーベル・シャリコフ

マルクスの墓前での誓い

一八〇三年8月24日、ロシアの革命家グループがロンドンのハイゲート墓地にあるマルクスの墓前に着いた。彼らは全部で18人だった。それは最初のボリシェビキとなるべき運命にあった人々だった。彼らは自分たちの教師の前にひざまずき、師が始めた事業に忠誠を尽くすことを誓うために、遠路はるばるやって来たのである。

困難な道が控えていた。このグループに加わっていたレーニンが言ったように、彼らの前面には敵の要塞が立ちふさがっており、そこから彼らの頭上に雨あられと砲弾や弾丸があびせかけられ、最良の闘士たちを奪いさっていた。「われわれはこの要塞を奪取しなければならない。そして、もしわれわれが目ざめつつあるプロレタリアートの全勢力とロシアの革命家の全勢力を結集して、ロシアにおける生命あるもの、誠実なものすべてを引き寄せる単一の党とするなら、われわれはこの要塞を奪取するであろう」（レーニン全集、日本語版、第4巻、四〇三―四〇四ページ）

世界労働運動・共産主義運動の歴史には、時の経過とともにその意義がますます高まってくるような出来事がある。新しいタイプのプロレタリア党―共産主義者の党の誕生もその一つである。一九〇三年8月にロンドンで第2回ロシア社会民主労働党が作業を完了したが、この大会では革命的なマルクス主義組織の結合過程が終わり、レーニンによって作成された思想・政治的、組織的原則にもとづいてロシア労働者階級の党が組織された。新しいタイプのプロレタリア党、ボリシェビキ党が生まれたのである。

それ以前の、一八九八年に開かれた第1回党大会は、党を組織することを宣言はしたが、党を結成するまでには至らなかった。国の社会・民主主義グループは単一の綱領や規約を持たず、単一のセンターからの指導はなかった。

第2回党大会の成功をもたらしたのは、レーニンによってつくられ、指導された全ロシア的政治新聞『イスクラ』の3年間の準備活動である。この新聞の発刊にかんする構想を、レーニンはすでにシベリアのシューシェンスコエ村に流刑されていた当時から抱いていた。自由の身になった彼は精力的に仕事に取りかかった。4ヵ月の間にロシアの11の都市を訪問し、そのうちの4都市は2回訪問した。彼は地下活動をしている革命家、すなわちその後、広範な通信員・新聞普及員網の中核となった人々としっかりした連絡を確立した。

第1回大会から第2回大会まで

亡命中、レーニンはロシアで始めた仕事を続ける。労働者通信員と緊密な連絡を保ち、秘密の交信のための暗号を作る（新聞の記事をそのままの文章で国境を越えて送ることはできなかった）。彼は『イスクラ』の印刷ができるような印刷所を選び、ロシア語の活字を探し、ロシアへ新聞を非合法に輸送する方法を考え出し、祖国から得た記事を新聞のために準備し、自分でもたくさん書いた。

『イスクラ』はレーニンの多くの論文を発表した。論文はマルクス主義と敵対する潮流に壊滅的な打撃を加えた。当時西欧諸国に存在した社会民主主義政党と原則的に異なる革命政党を創設するというレーニンの計画が読者の前にくっきりと現れた。新聞は将来の組織の綱領と規約を作成した。このようにして大会召集の基盤は準備されたのである。

第2回大会は一九〇三年7月30日にベルギーの首都ブリュッセルで開かれた。第1回大会より多くの代表が出席した。前大会の、6組織からの9人の代議員にたいし、この大会にはロシア各地区の26の社会民主主義組織からの43人の代議員が参加した。ロシアで大会を召集することなどは論外だった――ツァーの憲兵隊は革命家にひどい弾圧を加えていた。しかし、ベルギーでも秘密活動を守らなければならなかった。代議員は名前を変えさえした。それでもベルギーの警察は代議員たちを尾行したり、即時退去するよう勧告したりした。

ベルギーの社会民主主義者を通じて、大会の他の参加者たちにも逮捕の危険が差し迫っていることが明らかになった。というのは、当時、関係諸国の官憲にアナーキストを引き渡す国際協定が存在していたからである。ロシア外務省はこれを利用して、ベルギー政府にロシアのアナーキストがブリュッセルに集まったと警告したのである。

ぐずぐずしていられなかった。代議員たちは小グループに分かれてひそかに英国へ渡った。英国ではロンドンの労働者が大会組織者に大きな援助を与えた。

ブリュッセルの町はずれの打ち捨てられた倉庫の中で、次いでロンドンの港湾労働者クラブで、大会の会議（会議は37回行われた）は非常に荒れた。

レーニンとその支持者たちは提案を一つ一つ守りぬかねばならなかった。議事録にはレーニンの一三〇以上の発言、批判、答弁が記録されている。

代議員の中にはレーニンや『イスクラ』の支持者ばかりでなく、結成される党の性格にたいして異なった見解を持つ人々もいた。彼らは西欧の、本質上革命的でない政党をモデルに党をつくることを望んだ。たとえば〝経済主義者〟たちの指導者マルティノフはこれらの党の綱領を引用して、『イスクラ』の綱領を〝極端に〟革命的だと攻撃した。

党はどうあるべきか？

レーニンとその同志たちは、まったく別の党をつくることを提案した。彼らは社会改革の党ではなく労働者階級の先進的、組織的な部隊を持ちたかった。それは、革命的理論で武装し、搾取制度を転覆して社会主義を建設する闘争を指導し、貫徹させることができる党である。

当然、異なった綱領は大会が検討した問題の解決にたいする異なったアプローチを生んだ。たとえば、ブンド（ロシア社会民主労働党のユダヤ人組織）の地位問題討議のさいに、激しい論争が燃え上がった。ブンドは党全体の指導から独立した、民族的組織の結合体とし党を建設しようとした。このような見地に立つことは、党内生活における孤立を合法化し、党を何かもろい、管理しがたい、無定形のものに変えることを意味するだろう。大会はブンド派の要求を退けた。

規約の討議、とくに党員の資格条項にかんする討議では、レーニンとマルトフの意見が衝突した。レーニンはすべての党員が初級党組織の一つに必ず加入し、その活動に参加するよう提案した。マルトフはこれを退け、〝門戸開放〟を主張した。本質的には党員の資格条項にかんするマルトフの定式は、党内で働かず、何もしない者に、自分を党員とみなすことができるように門戸を開放した。レーニンの定式は、このような者に入党への道を閉ざした。それは、すべての党員のマルクス主義的教育と、彼らの高度の規律性と彼らにたいする指導とを保障するものだった。

レーニンとマルトフの意見は、二つの排除し合う正反対の見解を反映していた。マルトフの定式は、党を、雑多な、あいまいな、まだ結成されていない組織として見る見解を守っていた。大会はわずか6票の差（棄権1票）でマルトフの定式を採択したが、このような党ではロシアのプロレタリアートをツァーリズムの攻撃へと立ち上がらせ、まず民主主義革命を、つぎに社会主義革命を勝利させることはできない。2年後に開かれた次の大会がマルトフの定式を廃止し、レーニンの定式を採択した理由はそこにある。これは、新しいタイプの党の強化をめざす闘争の巨大な意義を持った。

第2回大会で〝ボリシェビキ〟と〝メンシェビキ〟の概念が生まれた。党中央委員会と『イスクラ』編集局の選挙のさいに多数の票を集めたレーニンの支持者をボリシェビキと呼ぶようになった。少数派になったマルトフの支持者はメンシェビキと呼ばれた。しかしこれは物事の外面にすぎない。本質ははるか深い所にあった。事態のその後の歩みが示したように、ロシアの労働運動で二つの党が組織されたのだ。一つは革命的改造と社会主義、共産主義建設を目的とするマルクス主義政党、もう一つはブルジョア民主主義のわく内での活動を理想とみなした日和見主義政党である。のちにレーニンは書いている。

「ボリシェビズムは、政治思想の潮流として、また政党として、一九〇三年以来存在している」（レーニン全集、日本語版、第31巻、9ページ）

党の分裂にもかかわらず、レーニンは楽観主義に満ちていた。次のようなエピソードは誠に象徴的である。休憩時間中に代議員の一人がレーニンに近づき、訴えるように言った。

「われわれの大会のふん囲気はなんと重苦しいんだろう。この激しい闘争、このおたがいにたいするアジテーション、この激しい論戦！」

レーニンは答えた。

「いやちがう！　なんとすばらしい事か、われわれの大会は！　公開の自由な闘争だ。意見は述べられた。ニュアンスが明らかになった。グループが形成された。手はあげられた。決定は採択された。一つの段階が過ぎ去った。前進だ！　私はこのように理解している。これこそ生活だ」

75年の歳月を経て

遠い一九〇三年8月24日に18人がマルクスの墓のそばに立っていた。彼らが大会でどれほどの支持者を代表していたか、言うことはできない。一九〇三年8月までは党員の正確な記帳は行われていなかった。知られているのは、一九〇五年までに党員が全部で八五〇〇人を数えたということだけである。

一九〇二年3月に出版された著書『なにをなすべきか？』の中でレーニンは書いた。「われわれに革命家の組織をあたえよ。しからばわれわれはロシアをくつがえすであろう！」（レーニン全集、日本語版、第5巻、五〇二ページ）。実際にそうなったのである。革命家のレーニン党の政策のおかげで、ロシアは後れた国から強力な社会主義国――平和と社会的進歩のとりでに変わったのである。

今度は最近の資料を見てみよう。一九七七年7月1日現在、ソ連共産党は一六二〇万人以上の党員を擁した。党は一握りの熱心家たちから志を同じくする積極的な闘士たちの大軍に変わった。労働者階級、全勤労者の中の最も優秀な人々が自分の生活を共産主義者の党と結びつけようと望んでいることは、党が国民を社会主義の勝利へ導くことができたわけを多くの点で説明している。

現在、党は相変わらず遠い過去の一九〇三年に開始された旅の途中にある。党と党によって指導されるソビエト人民の活動の最重要の成果は、ソ連で発達した社会主義を建設したことである。この発達した社会主義は人類の社会の進歩の最高の達成であり、しだいに共産主義的社会関係に成長してゆく社会主義的社会関係全体系の高い成熟度を示している。

新しい出し物を見せる

ボリショイ・バレエの日本公演

スサンナ・グリゴリエワ
カメラA・マカロフ



モスクワのボリショイ劇場

7月6日、東京を振り出しにソ連ボリショイ劇場バレエ団(通称ボリショイ・バレエ)の日本公演が始まる。

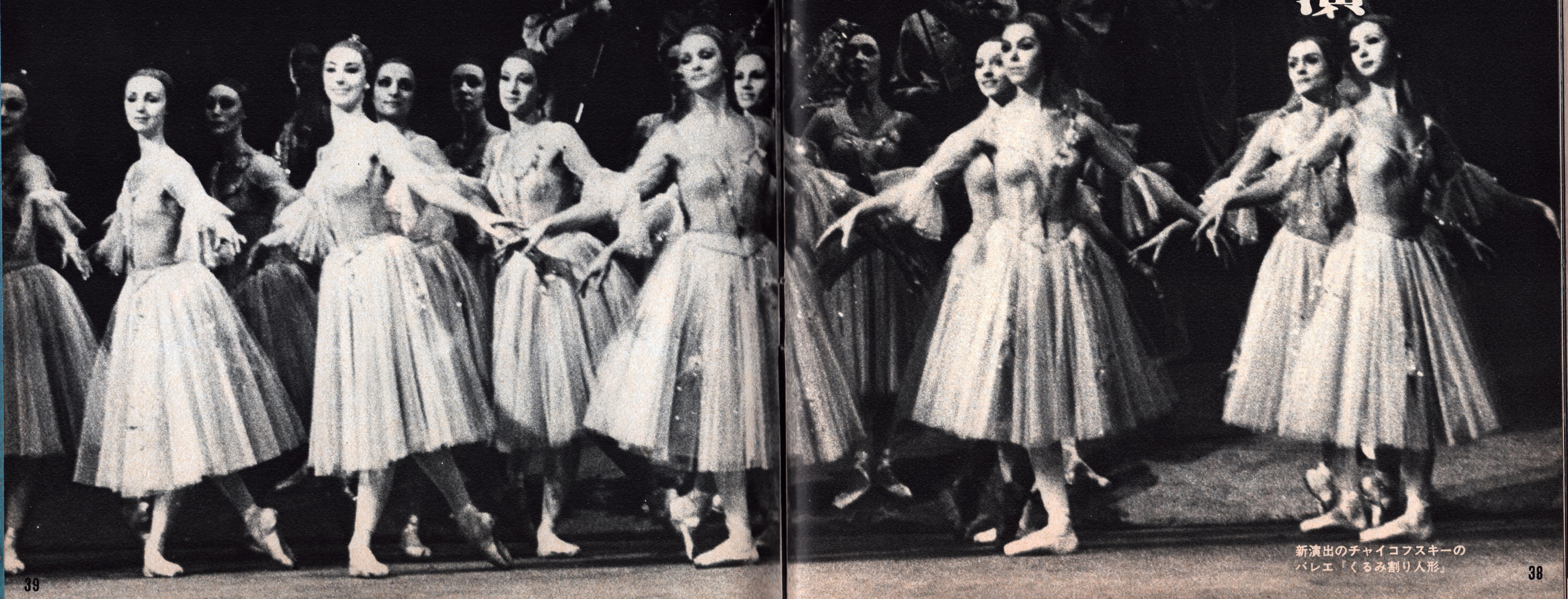
こんどの公演の五つの出し物のうち三つ——チャイコフスキーの『白鳥の湖』、アダンの『ジゼル』とミンクスの『ドン・キホーテ』は、ボリショイ・バレエのこれまでの上演で日本の観客にはすでにおなじみ。あとの二つ——チャイコフスキーの『くるみ割り人形』とメリコフの『愛の伝説』はこんど初めてレパートリーに加えられたものである。

ボリショイ・バレエのレパートリーの大半を占めているのはクラシックで、『白鳥の湖』と『ジゼル』もこのクラシックもの。この二つは世界の多くの劇場で上演されており、いまさら紹介するまでもないが、ボリショイ・バレエの『白鳥の湖』は、同バレエ団の主任振付師で、ソ連人民芸術家、レーニン賞受賞のユーリー・グリゴロビチが演出をこらしたもので、ほかのバレエ団のものとは一味も二味も違う。グリゴロビチ演出は、これまでの多くの演出に見られた、ありきたりの単純な物語性を脱して、『白鳥の湖』を理想と凡俗、空想と夢のない平凡さとの葛藤含みのロマンチックな悲劇に仕立てた。またバレエの共通のスタイルをこわさず、これまでの演出のすぐれた部分を生かした多くの新しい舞踊場面をつくり上げた。

バレエ『ジゼル』は古典に修正を加えた一例といえよう。振付のレオニード・ラブロフスキーは、古いロマンチックな踊りには一切手を触れてはいないが、現在アナクロニズムと見られるジェスチュアや顔の表情を取りのけた。多くの有名なバレエ専門家は、この演出に喝采をおくっている。

セルバンテスの小説をモチーフにした『ドン・キホーテ』も、バレエの古典の一つ。モチーフにしたとはいえ、小説の筋は、古典的なデュエット、バリエーションやジプシー・ダンス、スペイン舞踊その他の踊りをひき出すきっかけにすぎない。これらの踊りの絶妙さは観客の舌を巻き、舞台の人々を力づけている。

『くるみ割り人形』は『白鳥の湖』や『眠れる森の美女』などのチャイコフスキーのバレエと違って、ながい間この天才的な曲にふさわしい見事な演出に恵まれなかったといってもよいだろう。『くるみ割



新演出のチャイコフスキーのバレエ『くるみ割り人形』





『ドン・キホーテ』——タチヤナ・ベススメルトノワの魅惑的な踊り

◀
メリコフ作曲のバレエ『愛の伝説』の一場面

▶
『くるみ割り人形』——踊るのはナジェジダ・パブロワとビャチェスラフ・ゴルジェーエフ







▶
『愛の伝説』のフェルハード——M・ラブロフスキー

◀
ミンクス作曲のバレエ『ドン・キホーテ』の一場面



り人形』には子どものための単純なたのしいメルヘンという定説がついていたが、振付師のユーリー・グリゴロビチはチャイコフスキーの音楽をきいて、その原作であるホフマンの童話の筋を踏まえた賢明な哲学的な出し物をつくることができるとし、こうしてオリジナルな台本と新しい踊りをもとにした、新演出のバレエを生んだ。

バレエ『愛の伝説』の音楽を書いたのは、ソ連の作曲家アリフ・メリコフ。このバレエはユーリー・グリゴロビチの初期の演出作品（一九六一年）である。グリゴロビチは東方の有名なフェルハードとシーリンの愛の伝説をもとに、バレエを通じて、人間の生活と感情を深く掘り下げている。『愛の伝説』ではクラシック舞踊は、東方の優美なリズミカルな動きで肉付けられ、見ごたえのあるものになっている。

このように、五つの出し物は、それぞれまったく趣のちがうものだが、いずれも現在のボリショイ・バレエのレパートリーに見られるさまざまの傾向を正確に代表しているといえよう。またこのようなレパートリーだと、大ベテランも、有能な新人もいっしょに来日することになり、日本の観客はボリショイ劇場の新旧世代の踊り手にいっぺんに会えるわけだ。



斬新な演出をこらした『白鳥の湖』



ユーリー・グリゴロビチは次のように語った――「いつの公演もうれしいものだが、日本の公演というので、みんなとくに張り切っている。一九五七年以来日本公演は伝統となっており、これまで日本の観客はわれわれの多くの出し物を見てきたし、ボリショイ・バレエ団ともおなじみである。

ボリショイ劇場のバレエ・マスターたちが育てた東京バレエ団とは、仕事の面で友好関係にあり、『まりも』や『かぐや姫』の二つを演出したわがバレエ団の教師、振付師アレクセイ・ワルラーモフが東京バレエ団の発展につくした功績は、われわれの誇りである。ワルラーモフの日本のお弟子さんは、モスクワの国際コンクールで日本のバレエ芸術のレベルの高さをりっぱに示したし、一方モスクワのボリショイ・バレエで育った弟子たちも、東京の国際バレエ・コンクールで好成績を収めている。

われわれは日本のバレエ愛好者のなかに多くのよき友をもっており、これらの友と再会できる日を待ちこがれている。公演参加者はこんどの出し物がバレエ芸術愛好者たちから注目され、ソ日両国国民間の友好と文化交流の強化に役立つことを確信している」



チャイコフスキーのバレエ『白鳥の湖』のオデット姫――リュドミラ・セメニャカ。

ボリショイ・バレエ公演日程
7月6－8日・東京NHKホール／7月10－13日・東京・普門館／7月16日・千葉県文化会館／7月18日・神奈川県民ホール／7月20日・新潟県民ホール／7月21日・長野市民会館／7月23日・名古屋市民会館／7月24日・倉敷市民会館／7月25－26日・福岡市民会館／7月29日－8月2日・大阪フェスティバルホール／8月3日・石川厚生年金会館／8月5日・神奈川県民ホール／8月6－7日・東京厚生年金会館／8月8日・神奈川県民ホール／8月9日・福島県文化センター／8月10日・宮城県民会館／8月12日・札幌厚生年金会館／8月14－16日・東京・普門館

なお、詳細についてのお問合せは、新芸術家協会（電話03・503・7451）へどうぞ。

国内問題

夏は休暇の季節

『今日のソ連邦』評論員 ミハイル・エフィーモフ



まずおことわりしておきたいが、休暇をとるのは夏とは限らない。冬、春、そして秋さえもよいという人が大勢いる。たとえば二五〇〇万近い農民にとっては夏は書き入れ時だ。

モスクワの夏

さて、夏だが、ソ連の夏はどんなものかときかれても、ちょっと一概にはいえない。札幌の7月は長崎の7月と違うが、ソ連の場合気候の違いはもっとずっと大きく、トルクメン共和国の40度Cからソ連北東端チュコトカ沿岸の4度Cまでの違いがある。だが私はモスクワ育ちだから、当然モスクワの生活がぴんとくるし、それだけなじみ深い。

モスクワはロシアの中央部にあるので、夏の気候はいくらか〃中和的〃である。モスクワの気候は大体次のようなものだ——一日の平均気温は18・1—19度C。一日の最低気温（午前4—5時）は12・8—13・4度C、最高（午後2—3時）は23・4—24・5度C。相対湿度は40—68%、一日の平均降水量は2—4㎜（短時間の降雨による）。ご承知のとおり、モスクワの気候は大陸性で、台風も雨期もない。空は青く澄みわたる。

しかしそれでも夏がくると、モスクワはガランとなる。歩行者も、車も少なくなり、子どもたちの姿はほとんど見えなくなる。ほかの季節には見られない光景といえよう。

一体おとなも、こどもも、どこへ姿を消すのだろう? どこでたずねても、休暇というごく簡単な答えが返ってくるに違いない。

法律によって、労働者職員には一人残らず、15労働日以上の有給（平均賃金が支給される）年次休暇が与えられ、職種や勤務地（極北地方で働く者や労働時間が基準外の有害作業に従事する者）によって追加の休暇も与えられる。実際には大半の労働者職員の一年間の休暇日数は合計24労働日であり、休暇は数日とか、数週間とかにばらばらに分けないで、まとめて一遍にとるきまりになっている。

休暇の権利は憲法に定められており、労働の権利に次ぐ二番目の権利となっている。休暇の権利は憲法にうたわれているとおり、「年次有給休暇と毎週の休息日の提供、ならびに文化教育施設と健康増進施設網の拡大、大衆的なスポーツ、体育、観光旅行の発展」（第四一条）を含む一連の措置によって保障されている。

休息は義務!?

憲法は全ソビエト市民に多くの権利と自由を供与しているが、それと同時に一定の義務も課している。憲法はそういう義務として、別に休息を取り上げてはいないのだが、ソ連では休息は、たとえとても楽しいものであっても、やはり一種の義務といえる。げんにソ連の各労働者職員は毎年必ず休息しなければならないのだ。日本のあるいくつかの企業は、休日や祭日のほかに一年間一日も休まなかった人に物質的な表彰をするという話をきいたが、ソ連ではこんなことはおよそ考えられない。

ふつうソ連の全企業、官庁機関は年頭に、指導者から守衛にいたる全員の休暇表をつくる。ソ連では多くの国と違って、企業や組織がまるまる夏休みをとるということはない。だから企業や機関の仕事は休まないということが、休暇表を組む前提になっている。ある年私は編集の仕事の事情で、どうしても休暇表どおりの休暇がとれなくなった。そのうちに夏も過ぎ、秋も去って12月になった。これでは来年は二回休暇をとれると私は胸算用した（なぜなら休暇は御破算にはならないから）。ところがうちの労働組合が口を出し、きめた日時に休暇を私に与えることができなかったのはけしからん、と私の上司をきびしく叱責したので、私は12月31日（形式的にはまだ年内だったので）から休息に出かけなければならなかった。だが、このケースは典型的なものではなく、大体全部の者が休暇表どおりに

休暇をとっている。

休暇をとったら

さて、休暇はとったものの、それから先はどうか?

ソ連のどの工場、省、または研究所でも掲示所（ふつういろんな指示や告知が掲示される）に、労働組合現場委員会が利用券を発給できるサナトリウムと休息の家の一覧表が張り出される。利用券の若干は無料または割引だ。サナトリウムへ行くには（サナトリウムの最低の滞在日数は24日、休息の家は12日）、医者の許可書がいる。サナトリウム＝保養所は心臓血管疾患、胃腸病、精神・神経疾患など、病気によってさまざまなグループに分けられている。たとえば、ことしから急性心筋梗塞患者専門の部が20以上新設された。これらのサナトリウムの利用券は全部無料で支給され、それどころか、サナトリウム滞在期間を含めて、患者がやむなく働けなかった全期間の治療・療養費は一切無料である。

医者の意見で、サナトリウム療養の必要のない者は、別の種類の休息ができる。国民がどの程度あらゆる種類の組織的休息の恩恵にあずかっているかを知ってもらうには、次の数字を見てもらうだけでよいだろう。——昨年のサナトリウム、休息の家、観光基地の利用者数は、四九〇〇万人（勤労者とこの家族を合わせて）、またさまざまな遊覧や遠出の旅行に出かけた者は総計一億五〇〇〇万人（!）である。もうこうなると一部の限られた人だけが、組織的休息の対象になっているなどとはかりそめにも言えない。

しかしこの膨大な数字でも、休息とかかわりのあるわれわれのいろんな問題を隠すことはできない。まず第一の問題はサナトリウム療養希望者を全員収容できるまでにいたっていないことだ。だからこそ第10次5カ年計画（一九七六—一九八〇年）では約一〇億ルーブルが新保養所の建設に当てられる予定になっている。

もう一つのネックは、保養地が、ある地方にかたよって存在していることだ。たとえば保養地はクリミアの南海岸やカフカズの黒海沿岸の亜熱帯地方やバルト海沿岸にほとんどかたまっているといってよい。ところがソ連は、すばらしい風景のところはもちろん、温泉、泥浴場、鉱泉にも十分恵まれている。たとえば私は一度ならずキルギス共和国のイシク・クリ湖にいったことがある。青く澄んだ海水（この湖の水には少し塩分が入っている!）のような水、黄金色に映える砂浜（夏の湖の気温は20—25度C）、山の頂きの白さ（イシク・クリは高山地帯にある）——ちょっとこのすてきな光景を頭にえがいてもらいたいものだ。だがモスクワっ子にとっては、三〇〇〇㎞も離れたキルギス共和国へ行くよりも、ソ—チ、または外国とはいえブルガリア、ルーマニア、ハンガリーの保養地のほうがずっとなじみだし、近い。まして、キルギスのほうはまだサナトリウムも少ない。このような保養地の片寄りを徐々に解消するために、ソ連の新しい地区、とくにウラル、シベリア、極東が開発されることになっており、その開発費として一九七六—八〇年に、対前5カ年計画比二三〇〇万ルーブル増の一億六三〇〇万ルーブルが支出される。

保養地の〃処女地〃の開発計画には、親たちが子どもともども休息、療養できる（いまのところはまだこんなことをやっている所はごく少ない）〃家族〃サナトリウムの建設も含まれている。

さまざまな過ごし方

しかし休息は、きびしい日課をとるサナトリウムや、あるいはサナトリウムよりも〃自由な〃日課の休息の家でなくても結構できるのであり、自分の体力をどのようなやり方で回復するかは、まったく個人が決めることである。

お望みならイカダを組んで、友人といっしょにボルガ川またはエニセイ川を下るのも一興。また車でバルト海沿岸の森の中の湖に行くのもよいだろう。ザックを背にロシアの古い村めぐりもよいし、郊外の森をぶらついて、キノコや野イチゴ狩りをするのもよい。各自が行きたいところへ行き、したいことをやるのは自由だ。

わが国には別荘という夏の伝統的な休息形態もある。都市に住む何万という人（モスクワ市民も例外ではない）は、家族ともども自然の中へ引っ越す。ある人々は労働組合を通じて割り当てられる自分の土地をもつか、または別荘協同組合の組合員になって別荘をもつ。自分で郊外に別荘を建てようと思わぬ人は、夏だけ別荘を賃借りすればよい。

ところで、都市から子どもの姿が見えなくなるのは、大半の子どもがピオネール・キャンプやさまざまなスポーツ・健康増進基地に出かけて、休息するからだ。昨年の夏、こうした施設で休息した児童、未成年者の数はざっと二二〇〇万人にのぼった。

一方、まち中で夏を過ごすモスクワっ子も、別にぼやくことはない。市内の何十という水泳場、木陰の多い休息専用の庭園や公園、それにヨットさえ楽しめるモスクワ海（人造湖）が、暑さをふっとばしてくれる。

夏にはモスクワでいろんな国際コンクールや映画祭、ありとあらゆる美術展が催される。また一九八〇年7月にはオリンピックの聖火がモスクワにやってきて、モスクワは世界的スポーツ祭典の首都になる。だからこそ、好んでモスクワで休暇を過ごす人たちもいるのだ!

ソ連の視点

社会主義諸国の海運界にたいする批判のねらいは何か？

レオニード・ソボレフ

最近西側の伝統的な海運諸国で、社会主義諸国の海運政策〝批判〟がさかんだが、批判の的は、つまるところ、社会主義諸国のライナー（定期貨物船）の船腹量の急増とこれらの国の運賃〝ダンピング〟の二つにある。

コンテナ船の増強

社会主義諸国の商船（定期船を含む）船腹量の増加のあとをたどればすぐ分かることだが、これらの国の商船隊は、まず貿易貨物を輸送する必要に迫られて計画的に伸びてきた。そして〝拡張〟うんぬんと言われるようになった主な理由は、社会主義諸国の商船隊に最新のコンテナ船を急いで補充しなければ、海運界で立ち遅れる見通しが出てきたため、コンテナ船を補充したことにある。

周知のとおり、先進資本主義諸国の船主はかつて国際コンテナ輸送を独占していた。海運のコンテナ化がめざましい発展をとげるようになって、貨物の輸送日数は短縮し、輸送費も安くあがる見通しが出てきたが、当然それにともなって運賃も下がるものと見られた。しかし若干の航路でコンテナ化は80％余りにも達したが、運賃はいっこう下がらなかった。コンテナ船のオーナーの収益にかんする確実なデータはないが、コンテナ運搬船の生産性が普通の船の6隻分であり、またコンテナ運搬船のオーナーがコンテナ輸送の独占をあくまでも維持しようとつとめている点を考えれば、その収益額は容易に察しがつこう。

これと関連してコンテナ運搬船の船籍を分析して見るのもおもしろい。一九七五年7月1日現在、つまりソ連商船反対キャンペーンが始まった当時、米、英、日、西独、デンマークの五カ国とリベリア（さきの五カ国の船のなかにはリベリア船籍の便宜置籍船に登録されているものがある）は、世界のコンテナ船船腹量の83・5％を占めており、ソ連のそれはわずか1％にすぎない。一九七六年1月30日現在の世界のコンテナ船発注量は二三七隻、四三七万六七二二DWトンで、うちソ連の発注分は四八万二九〇二DWトン（西側の最近のデータでははっきり水増しされている）である。

一九八〇年には経済相互援助会議（コメコン）加盟諸国全部で世界のコンテナ船船腹量の5％余りになる予定だが、これで果たして西側の海運界を脅かすなどとまじめに言えるだろうか。

社会主義諸国がコンテナ船の発注量を増やしていることは別に秘密でも何でもない。西側諸国がそれにひどく神経をとがらしているのは、何といっても世界の海運界がいまひどい危機に見舞われているからだ。とくに一九七五年の世界の海上輸送量が前年比8％減と落ち込んだのにたいして、世界の商船船腹量は遂にその一年間に11％増えた。こんご一九八〇年までに船腹量の需給が均衡するかどうかは、だれも予言できない。

一九七四年秋、石油輸送運賃がとほうもなくあがり、大型タンカーがペルシャ湾からの一航海で六〇〇万ドル以上の純益をあげたとき、社会主義諸国は自国の貿易に必要なタンカーを終始、計画的に補充し続けた。当時社会主義諸国の増船計画は、西側諸国から批判を受けるどころか、逆にコメントで世界の商船船腹量に占める社会主義諸国の船腹量の比率の減少が強調されるありさまだった。だが、いま同じ現象が反対の評価を受けているのは、社会主義諸国の海運政策が変わったせいではなく、情勢の変化（いまはライナーの運航だけが比較的に安定している）によるのである。

ダンピング政策か？

西側諸国の各船主協会の幹部とのインタビューでよく言われるのは、社会主義諸国の船舶が、一部のラインでコンファレンス（海運同盟）の規定運賃を何割か（六割まで）割引しているという苦情である。その数字については西側の船主の良心にまかせるとして、アウトサイダーがコンファレンスの規定運賃を割り引くのは、社会主義諸国が考え出したことではなく、コンファレンスに閉め出されているか、それともコンファレンスに入ると経済的に採算がとれないアウトサイダーが普通にやっていることである。

社会主義諸国の船主団体は良心的パートナーとして知られており、かりにもしあるコンファレンスに加入することがあれば、その同盟組織のすべての条件を忠実に守ることは疑いない。時たま船主がコンファレンスに加入するチャンスともいえる情勢が生まれることがあるが、その加入者がコンファレンスの基本条件を乱暴に破る（秘密の割引）ので、そういうやり方についていけないし、それで競争能力をなくすのはごめんだから、船主は加入をひかえているのである。そうなると、コンファレンスに入らないでいて、公然と割引をやったほうがむしろ誠実だ。アウトサイダーは割引額を決めるさい、必ずコンファレンス加入者の秘密割引率をも計算に入れている。もちろん、社会主義諸国の〝ダンピング〟政策を批判する連中は、そんなことは頭においていない。

ライナー運賃のダンピングが、社会主義諸国の海運政策の一要素であったことは一度もない。かりにこれらの国の船主団体がときどきコンファレンス運賃を割り引くことがあっても、それはダンピング政策を物語るものではなくて、運航費が安い結果である。

運賃が安い理由

社会主義諸国の船舶の運航費が割安なのは、いろんな理由があるが、燃料が安い〝自分の〟港での燃料積み込み費が割安であることや減価償却控除額が少ないこと、船体や船の動力装置の保険料がいくつかの社会主義国にないことなどが主な理由にあげられよう。

減価償却控除額を比べて見るのもおもしろい。西側諸国に多く見られるいわゆる短期減価償却制度は、船主の公式の利潤を減らして課税額を減らすことをねらったものだ。たとえばフランスでは船主自身が減価償却期間を決める。ただし国がその最低期間を8年と定めている。米国ではこの制度により、減価償却期間を25年から14・4年に短縮できる……社会主義諸国の場合は船の平均〝寿命〟の期間に均等に割りふって減価償却をやっている。

英国海運総評議会のパンフレットは、国際海運における社会主義諸国の〝拡張〟批判の総括として、ソ連の運賃割引は短期間のもので、将来はその代償として高い運賃を支払うことになるから、荷主は警戒してかからねばならないと警告している。

こうした警告（もっと正しくいえば脅迫）は、社会主義諸国の船主団体が外国の諸港間の定期輸送を始めたばかりで、いろいろな間違いをやった10―15年ほど前なら、荷主も受け入れたかも知れないが、いまはわれわれの船のラインが安定していることやわれわれがこの先ずっと互恵の協力ができるりっぱな取引相手であることを、世界中の荷主が納得している。

英国の荷主評議会がさきのパンフレットの内容にたいして否定的な意見を述べている事実も、西側の荷主が船主よりもわれわれにたいして好感を寄せている証拠といえよう。

最後に強調しておきたいのは、西側諸国のオーナーが、定期輸送、とくに国際コンテナ輸送における自分たちの特権的地位を守るたたかいに、自国政府を引き込もうと強く望んでいることだ。しかし船主のあれこれのグループを特権的地位におくような法律を採択して、政府が介入に乗り出せば、国際海運界のただでさえごたごたしている情勢が、さらに険悪になるおそれがあることは、だれの目にも明らかだ。

トピックス

磁気浮上式輸送システムの建設

普通の鉄筋コンクリートの桟道。ボタンを押すと、その上を浮かんで走る旅客列車が現れる… これは磁気浮上式列車の模型だ。この方式の列車は市内では時速60km、市外では時速 150kmまでのスピードを出せるほか、さまざまな交通問題を解決する。将来は航空機にも太刀打できるようになるだろう。真空にしたパイプの中に路線を入れれば、時速 900—1000kmまで、さらにその先の可能性としては最高時速4000kmまで出せる。

磁気浮上式列車の路線建設費は地下鉄工事の半分。運行を開始すれば市内のバスの数を大幅に減らし、廃気ガスによる環境汚染を低める。乗客は振動、ショック、揺れを感じないし、列車そのものがほとんど騒音なしで走るので、沿線に住む人たちへの騒音公害の心配はない。

1979年にカザフ共和国の首都アルマアタで延長12kmの磁気浮上式乗客輸送システムの建設が始まる。将来、この路線は市から65kmの地点まで延長される見込み。10両編成の各列車は1回に 450人、路線全体では1時間に2—3万人の乗客を輸送することになる。

宇宙開発の大きな前進
——サリュート6号の実験成果

工学博士　セルゲイ・グリシン
カメラ　A・モクレツォフ



バイコヌール基地から宇宙空間へ飛び立ったソユーズ宇宙船



ソユーズ26号の乗員。船長のロマネンコ中佐と技師のグレチコ宇宙飛行士。

一九七八年初め、ソ連は宇宙飛行の分野で次々にすぐれた成果をあげた。

3月16日、ソ連のユーリー・ロマネンコ、ゲオルギー・グレチコ両宇宙飛行士は、サリュート6号軌道ステーション上での観測プログラムを完了、96昼夜にわたる史上最長の宇宙飛行を終えて無事地上に帰還した。両飛行士は学術および国民経済に役立つ大量の観測やさまざまな技術面、医学・生物学面の実験を行った。ウラジーミル・ジャニベコフ、オレグ・マカロフが乗り組んだソユーズ27号、アレクセイ・グバレフとチェコスロバキアのウラジーミル・レメクの国際チームが乗り組んだソユーズ28号、自動輸送宇宙船プログレス1号の三つの宇宙船は、それぞれサリュート6号軌道ステーションに到着した。プログレス1号は宇宙飛行史上初めて、エンジン用補給燃料、乗組員の生活機能維持と学術観測のための設備、装置、材料をサリュート6号に送り届けた。

この宇宙の偉業は、宇宙飛行の未来や科学技術の発展にとってどのような意義をもつか？　これについて、本誌編集部はセルゲイ・グリシン工学博士に話してもらった。

宇宙基地への道

サリュート6号の飛行は、ソ連の学術観測軌道コンプレクス（結合体）が大きく発展したことを示した。

一九七八年1月11日、地球周回軌道上で、宇宙飛行史上初めての軌道ステーションと2台の宇宙船から成るコンプレクスが出現し、4名の宇宙飛行士がここで5日間にわたって観測を行った。このコンプレクスの出現によって、ソ連の宇宙開発は、未来の大型居住用宇宙基地へと人類をさらに大きく一歩近付けた。

実際の宇宙という条件下で、複雑な軌道コンプレクスの運行を制御する課題を解決することは、重要な意義をもっている。サリュート6号＝ソユーズの結合体の飛行中に〝二重の〟ドッキングを実施し、現実の宇宙飛行の条件下でコンプレクスの力学的状態を調べ、コンプレクス制御の課題を実際に解決することなどによって、新しい軌道コンプレクスの開発に使う重要な学術データが得られた。

人類が宇宙に進出するためには、乗員が交替できる軌道ステーションを開発する必要があるというのがソビエト科学の考えである。サリュート6号＝ソユーズ＝プログレス1号の軌道コンプレクスの軌道上での順調な作動、輸送宇宙船の数回にわたる交替、消費したストックの補充作業の実施、96昼夜にわたる乗員の積極的活動は、長期軌道ステーションの開発の妥当性と有効性を実際に証明している。

宇宙の貨物輸送

ソユーズとプログレス1号の飛行中に、軌道ステーションへの新しい効果的な補給システムの仕上げが行われた。補給システムの開発にあたっては、地球から軌道ステーションへと軌道ステーションから地球への必要な貨物の輸送量の差が考慮された。

地球から軌道ステーションへ送られる貨物の大半は、軌道コンプレクスの作業のときに使われる貨物（燃料、生命維持システムのストックなど）であり、地球に戻ってくるのは、あまり有用でない貨物（空の燃料タンク、コンテナ、生命維持システムの使い古したエレメントなど）であり、不要なものか、それとも経済的に採算の合わないものかである。このように地球から軌道ステーションへの貨物の輸送量は、逆方向への必要な貨物輸送量よりもはるかに多いので、軌道コンプレクスへの経済的な補給システムの中には、プログレス1号のような地球へ帰らない自動宇宙船やソユーズのような地球へ帰る有人宇宙船も含まねばならない。

当然、こんご補給用宇宙船は改良されよう。軌道コンプレクスが発達し、貨物輸送量が増えるにつれて、輸送船の貨物積載量を増やし、何度も使える帰還可能な宇宙船を使用しなければならなくなろう。だから将来補給システムを開発するさい、ソユーズ、プログレス型宇宙船をベースとする補給システムの基本原理や宇宙の条件下での補給システムの使用経験が生かされよう。



宇宙飛行に先立ち、宇宙飛行士訓練センターで特別計画による長期のトレーニングと理論学習が行われる。写真――次の課業計画を検討するソユーズ26号乗り組みのユーリー・ロマネンコ（右端）、ゲオルギー・グレチコと宇宙飛行士のアナトリー・フィリプチェンコ（立っている）、技師・教官のビャチェスラフ・シャバーノフ（左端）



ソユーズ28号の最初の国際チーム。着水のさいの訓練に励む宇宙飛行士ウラジーミル・レメク（左、チェコスロバキア）と船長アレクセイ・グバレフ（ソ連）

宇宙空間での作業

サリュート6号の乗員が、ステーションの設備、システム、装置を使う一連の新しい作業を実施したことも、サリュート6号の飛行の特徴である。ユーリー・ロマネンコ、ゲオルギー・グレチコ両宇宙飛行士は、二つのドッキング・ユニットのうちの一つを含むステーションの外部の構造部分の状況を点検、チェックするためステーションの外に出た。二人は宇宙空間で予備、修理作業をやるさい半硬質の新しい宇宙服を使い、この宇宙服が一〇〇%信頼でき、便利であることを証明した。

2月2、3日に、両宇宙飛行士は軌道ステーションへのユニークな燃料補給作業をやった。燃料補給経路の気密性や輸送船とステーションのタンクの点検、コンプレッサーによるステーションの燃料タンクからの圧縮ガスの汲み出し、ステーションへの燃料充塡を含む作業のすべての段階で、新燃料補給システムのすべての計器や装置は順調に作動した。

軌道コンプレクスの飛行で重要な意義をもっていたのは、乗員の医学面の保障である。飛行中ずっと宇宙飛行士の医学調査が定期的に行われた。飛行中

の高い作業能力を維持するためと、地球帰還後の地上の重力への再適応をうまくいくようにするために、乗員は特別に開発した装置を使って、たえず総合的なトレーニングを行った。地上に帰ってからの宇宙飛行士の検査結果は、これらの装置の有効性を裏書きした。

宇宙からの情報

サリュート6号＝ソユーズの軌道コンプレクスの乗員たちは、地球にかんする情報を大量に入手した。

宇宙飛行士たちは地球の地表のさまざまな個所の写真を撮った。飛行日数が長かったおかげで、これらの写真から撮影時の撮影対象の状態だけでなく、地表で起こっている若干のプロセスの発展の動態も判断できよう。これはとくに雪覆や氷覆、海流、火山活動、各種の大気現象についていえる。肉眼観測のデータも非常に貴重だ。

自然環境にかんする宇宙からの情報は、有用鉱物や石油・ガスの探査や農林漁業、水力発電業、灌漑その他多くの分野で利用されており、現在ソ連の四〇〇余りの組織が、こうした宇宙からの情報を仕事に生かしている。

宇宙への窓

サリュート6号には直径1.5m、質量六五〇kg余りの主鏡をもつサブミリメートル波（数ミクロンから数ミリまでの間の波長域）軌道望遠鏡が、世界で初めて据え付けられた。この望遠鏡は、大気のスクリーンに妨げられて地上からは観測できない宇宙源を発見するためのものである。こうした宇宙源にかんする情報は天文物理学的諸問題を解決するのに必要である。このほか、全地球的な大気のプロセスを予測するためにこの望遠鏡を使えば、地球の大気のサブミリメートル波放射と赤外線放



サリュート6号の実験成果

射を測定できる。

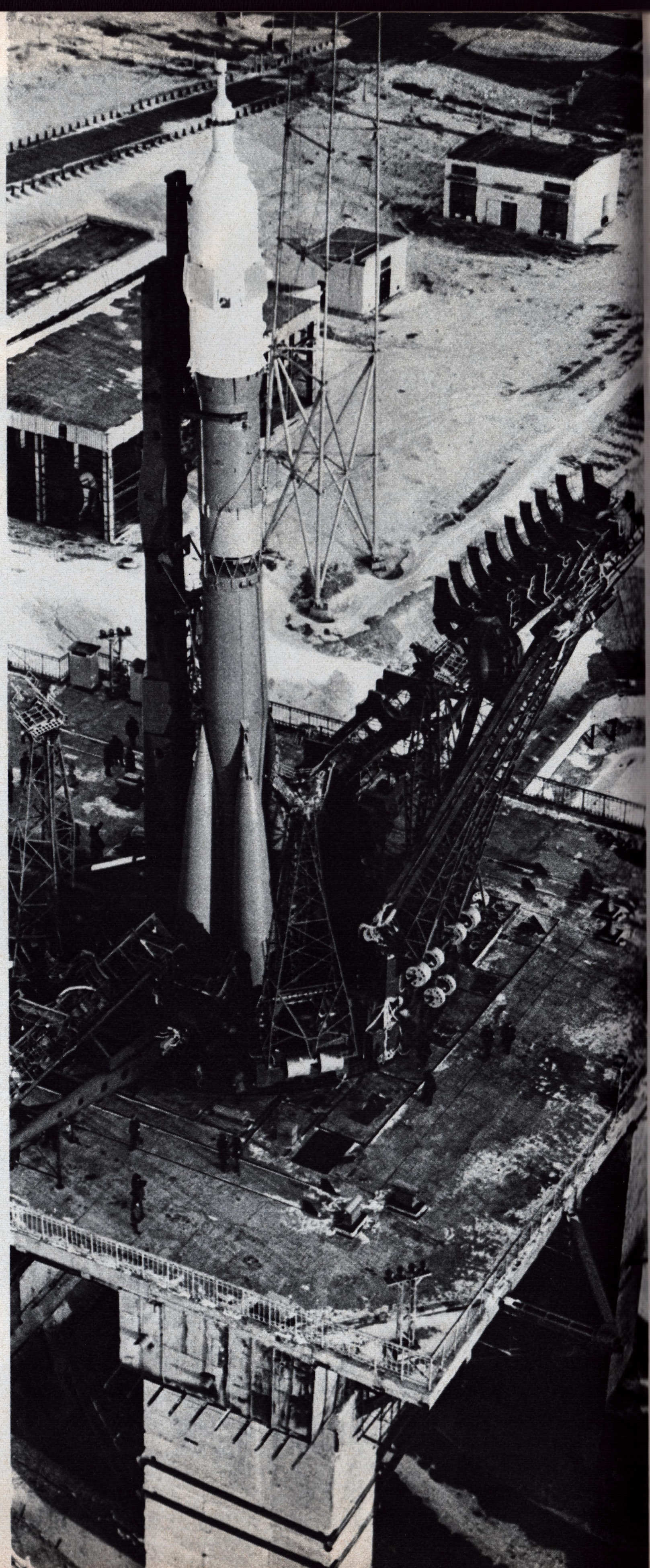
乗員はこの望遠鏡システムを実験して、宇宙飛行の条件のもとでの望遠鏡の作業能力を明らかにした。ステーション内での宇宙飛行士による複雑かつユニークな装置の調整、整備、予備修理と使用の可能性やさまざまな宇宙の観測対象に焦点を合わせるシステムを実際の宇宙的な条件内で実験する可能性は、長期軌道ステーションの重要な特徴であり、長所である。

無重力下で

飛行計画の重要部分は、長期の無重力下での技術実験であり、軌道ステーションでさまざまな物質の晶出実験が行われた。これらの実験には、熱プロセスを自動制御する小型コンピュータをそなえた電気炉ともいえる特別の装置『スプラフ（合金）』（九九〇度Cの高温が得られる）が使われた。

無重力は、晶出プロセスをさらに改良するあらたなチャンスをひらく。地球上で（重力の作用下で）こうした結晶を成長させる場合、結晶の組成や質が均一なものは得られないが、長期の

ソユーズ28号の飛行を見守るモスクワの制御センター・ホール（52ページ）



発射台の宇宙船

サリュート6号の実験成果

無重力下では構成が改良された、より均質の結晶体を得ることができる。

学者の中には、今までにわかっている組成の超高純度材料や原則的に新しい材料を得ることは、今世紀のあと20年間の人類の宇宙活動の主要方向の一つとなろう、と見ている人々がいる。

軌道学術コンプレクスでは、長期宇宙飛行の諸要因が人間の器官に及ぼす反応の調査とか、さまざまな生物体（海



ソユーズ28号の船内で宇宙実験中の船長アレクセイ・グバレフ（右）とチェコスロバキアのウラジーミル・レメク宇宙飛行士

サリュート6号の実験成果

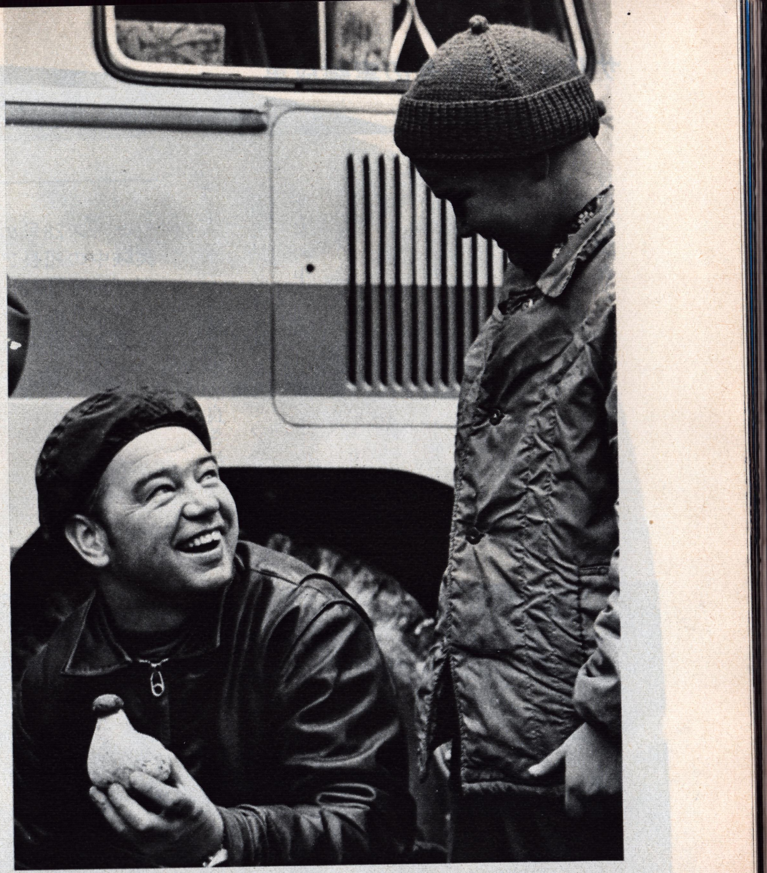
藻、高等植物のタネ、昆虫など）の成長、発達にたいする無重力の作用の測定などといった大量の医学・生物学的実験が行われた。

国際協力の前進

飛行の最終段階で新しいみごとな成果があげられた。世界で初めて、乗員の国際チームが軌道上の作業に参加したのである。ソ連の宇宙船ソユーズ28号でソ連のパイロット＝宇宙飛行士アレクセイ・グバレフとチェコスロバキア市民ウラジーミル・レメクが、軌道コンプレクスに到着して、Y・ロマネンコ、G・グレチコとともに作業に加わり、7昼夜にわたってソ連・チェコスロバキア共同の技術、医学・生物学調査、実験に従事した。

最初の国際チームの飛行は、社会主義共同体諸国の宇宙飛行士の単一の作業計画の実現に大きく貢献した。学者と宇宙飛行士の協力は、ソ連と社会主義共同体諸国間の緊密な友好関係を示すりっぱな手本であり、社会主義的国際主義の力を物語るあらたな証拠である。

ソ連の学者は社会主義諸国やフランス、米国、スウェーデン、インドその他の国々の専門家との協力の貴重な経験をたくさん積んできた。最初の国際チームの飛行と軌道上での作業は、平和目的のための宇宙空間の観測、調査と利用の分野での国際協業の見通しが、いかに明るいかを示している。第1号の国際チームに続いて、次々に国際チームが宇宙へ飛び立ち、こうして続々と新しい国が有人宇宙飛行の協力軌道に乗るだろう。





右上　休日を楽しむソユーズ26号のゲオルギー・グレチコ宇宙飛行士と息子のミーシャ君

右下　ソユーズ26号船長ユーリー・ロマネンコとアレフチナ夫人



左　ソユーズ28号の船長アレクセイ・グバレフ宅でくつろぐ28号乗組員のウラジーミル・レメク宇宙飛行士（チェコスロバキア）。左からウラジーミル・グバレフ、オリガ・グバレワ、A・グバレフ、V・レメク、ナジェジダ・グバレワ。

文学

セルゲイ・ザルイギン

文芸批評家　エブゲニー・シードロフ



ロシア・ソビエト文学のアンソロジー

セルゲイ・ザルイギン（一九一三年生まれ）は、すぐに職業的な作家になったわけではありません。ザルイギンは長いあいだ、水利・土地改良技師（博士候補）として西シベリアのチュメニ州で働き、自然条件の厳しいこの地方の企業改修に参加してきました。仕事のかたわら、シベリアの自然や人々、その歴史と今日の生活の深い知識にもとづく短編やルポルタージュ、論文を書きました。

シベリアの地質調査隊員や石油やガスの採掘関係者はザルイギンをひじょうに尊敬しています。一九六〇年代の初めにザルイギンは『リテラトゥールナヤ・ガゼータ』（文学新聞）の紙上で、シベリアのオビ川に水力発電所を建設しようという計画に反対していた専門家たちの意見を支持しました。この水力発電所ができれば、広大な地域が水没してしまうからです。一連の論文の中でザルイギンは、この計画は間違いであり、豊かな自然に莫大な害をもたらすだろうと、熱心に、証拠立てて論じました。計画は延期されました。

これはソ連の文学者が、国の精神生活や政治生活のみならず、経済生活にまで直接に参加していることの、雄弁な実例の一つでしょう。

ザルイギンは比較的おそく、散文作家として広く知られるようになりました。一九六二年には長編『アルタイの小道』が刊行されましたが、この中には、血を分けた自然を改造することについての作家の考えが、芸術的に反映されています。2年後には中編『イルティシのほとりで』が出ましたが、この力強い、ドラマチックな作品は、シベリア農村の集団化の時代に起こったことを扱っています。それに続く長編『ソリョーナヤ・パージ』（一九六七―六八）はシベリアにおける国内戦の時代を扱ったものですが、この作品はひじょうな成功を収め、一九六八年度ソ連国家賞を受賞しました。

ザルイギンの心を捉えているのは、ソビエト国家の創設期に、激しい階級闘争の中で生まれた人民と新革命政権の相互関係という問題です。主人公たちの性格は、未来の根本問題をめぐる衝突や論争や闘争の中で発展します。

ここにその最後の部分を紹介するザルイギンのもう一つの長編『委員会』もまた、テーマにおいて『ソリョーナヤ・パージ』につながるものです。

この作品の中では、ザルイギンが描くシベリア農民の形象に固有な、社会的真実の探求というモチーフが、いっそう強く響いています。

物語は一九一八年のシベリアの農村レビャシカで展開されます。ツァー政権は崩壊し、村の住民は土地の勤勉な主人としての感情に従って、近くの森林の保護にかんする社会奉仕の委員会をつくります。親子兄弟が敵味方に分かれ、対立し合う農村での階級闘争を描くにあたって作家は、人民が革命の側を選択する社会・歴史的根拠を追求し、人々の苦しみや浄化を示し、偉業や裏切りの根源を解明しています。村の良心であるサモルーコフ老人、ツァー軍隊のかつての中尉で知識人のスミルノフスキー、同じ村の富農たちによって背信的に暗殺される、未来の人間のヒューマニスチックな特徴を備えたニコライ・ウスチノフ等々、見事に描き分けられた人々の絵巻が読者の前に展開されます。森林委員会は、良心と正義にもとづく人民行政の典型的な形象です。

ザルイギンの文体に特徴的なのは、作者自身が主人公の中に〝溶け込んでいる〟ことです。ザルイギンの散文は客観的であり、読者は作者の作為を感じません。登場人物の性格は、作者の意志とは関係ないかのように展開されています。

ザルイギンは、過去と未来の接点を歴史の中に――何よりもまず主人公たちの心理を通して、探求しています。ザルイギンは語っています――

「出来事にたいする自分の態度を私は知っている。だが私にとってつねに重要なのは〝自分の〟態度だけでなく、私によってもう一人の個性を通して媒介された何かである。私には、思惟のための形象が、役者が演技をするために、自己を表現するために必要なのと同じ程度に必要なのだ。この〝もう一人の個性〟とは、役者にとってはその役柄である。私は主人公を通して、私のものの見方を、自分自身と読者に示す」

セルゲイ・ザルイギンのテーマはシベリアの歴史だけではありません。ザルイギンは現代のインテリを扱った長編『南アメリカ異文』や空想的な中編『おかしな少年オスカー』のような作品も書いています。またチェーホフについての堂々たる随想『わが詩人』や多数の文芸批評もあります。

ザルイギンの才能は多方面にわたっており、その作品の中には芸術家としての特徴と学者としての特徴が結合されています。その作品は、読者はもちろん、批評家のあいだにも大きな関心を呼び起こしています。

〔長編抜粋〕

委員会

S・ザルイギン
山田はじめ　訳

重々しい凍てついた空気が再び動いて、その中から肩章のない、よもぎ色の上衣を着て、毛皮帽の上に防寒頭布をかぶった将校が進み出た。

彼は手袋を脱ぎ、防寒頭布をほどいて、足踏みをし、馬にまたがってきた足をほぐした。

彼が足腰をほぐして、くつろいでいるあいだに、さらに兵隊たちが入ってきた。彼らは委員会を偶の方へ追いやった。将校はテーブルにもたれると、かじかんだ手で革の袋を脇から腹のまえに動かして、留め金をはずし、紙片を取り出した。彼は紙片を手のひらの上でのばすと、たずねた。

「これが委員会か？　全員か？　みんな集まっているのか？」

「全員です！　みんなです」と民警のピリペンコフが、てきぱきと、だが幾分おずおずと答えた。彼は兵隊たちといっしょに部屋へ入ってきたのだ。

将校はうなずいて紙片を読み始めた。

「デル……デリャービンはいるか？」

「私です！」とデリャービンが隅から答えた。「何でしょうか？」

「ピョートル・カラーシニコフは？」

カラーシニコフも返事をした。だがその声は、自分のことについて何か忘れてでもしまったかのように、自信なさそうだった。将校は彼に言った。

「以前は協同組合員だったな！　よおし！　イグナーチー・イグナートフはいるか？」

「ここです……私が……」

「ポロビンキンは……」

「私です……」

「サモルーコフは？」

サモルーコフはほっと息をつき、何かに元気づけられたかのように、大きな声で言った。

「イワン・イワノビチ・サモルーコフはここにいるよ。わしだ！」

「ロジオン・スミルノフスキーは？　もと陸軍中尉は？」

「ここにいます！」

「おまえも委員会のメンバーか？」

「そうです！」

将校がもう一人現れた。彼はテーブルに向かって座ると、目の前にピストルを置いて、委員会のメンバー全員の顔をすばやく眺め、寒さで痛くなった顔をこすり始めた。

「やったぞ！　全員集まっている！」と最初の将校が、あとから入って来た将校にうなずいた。

「ピリペンコフ？　この委員会のメンバーの名前はまちがいないな？」

「まちがいありません！」とピリペンコフは請け合った。だが将校は、きっ

と彼のいうことを信用しなかったのだろう。もう一度たずねた。

「この……おまえたちといっしょの、この地元の若い男は、ここにいるか？」

「クプリヤノフです！　マトベイ・クプリヤノフです！」とピリペンコフは言った。「彼です！　私の隣におります！」

「こっちへ来い、マトベイ・クプリヤノフ！」と将校が命令した。

ほとんど軍隊式の足取りで、新品の制服を着て農民帽をかぶったマトベイ・クプリヤノフが進み出て、将校の方を向き、不恰好に敬礼した。彼は大勢の兵隊たちよりも背が高かったが、その顔は10歳か12歳の少年、しかも手に負えない少年の顔だった。

「クプリヤノフ、この連中の姓を確認しろ」

「どの連中だって？」

「おれがいま呼び上げた連中のだ」

「全員まちがいありません」

「ところで、村長はおまえか、老人？」と将校は、やりとりをやめて、イワン・イワノビチにたずねた。「レビャシカの村長は？」

イワン・イワノビチは何も言わず、唇をもぐもぐやっただけだった。ピリペンコフが再び2歩進み出て——

「彼です、将校どの！　彼は必ずしも認めているわけではありませんが、ほかにその地位の者がいないのです！　もうずっとまえからいないのです！」

「どうしてわしが認めないものか？」とサモルーコフは答えた。「必要なときには認めるさ、本物の村長がいなければ、わしがその代わりだよ！」

「言うんだ。だれが委員会を選出したのか？　いつだ？」

「春早くですよ、将校さん。みんなから選出されたんですわい。全権を持った集会によって」

「議事録はあるのか？」

「すべて手続き通りだよ、将校さん！　どうして議事録のないわけがあるだろう？　そんなことはありえん！」

「議事録はどこへ送った？　いつ？　だれに？」こうききながら将校は相変わらず手のひらに息を吹きかけていた。恐らく、だんだん暖まってきたのだろう。だが彼の質問はいっそう鋭くなり、いっそう厳しくイワン・イワノビチを見ていた。

イワン・イワノビチの方は、ますます陽気に返事をし、背すじを伸ばして、ひどく視力が弱っているかのような、だが実際にはすでに視力の回復している目で、生き生きと見ていた。

「議事録は、当然のことながら、わしらが送ったよ。当局へ」

「どんな当局だ？」

「言うまでもないだろうて？　まだ秋の初めに、わしらの上にはどんな政権がありましたっけ？　思い出していただきたいものだ！　そのときのしかるべき筋へ送ったんですわい！　そういうわけだよ！」

「おまえたちの議事録への返事は？」

「ところが、返事はなかったのですわ」

「それはどういう意味だ？　返事がなかったとは、どういうことだ？」

「つまり、将校さん、そのとき当局はひどく忙しかったんですな。仕事に追われていたんですよ」

「当局が委員会の選出についての議事録に返事をしなかったのなら、委員会は存在する権利がない！　それでも存在していたのなら、独断であり、無法だ！　どうした、それが分からんのか老人？」

「でも、わしらには、民警ピリペンコフにかんする書類がまだありませんぞ、将校さん！　彼はここへ、すでに草刈りのときにやって来た。しかるに、彼にかんする書類はない！　すると、彼もまた独断というわけですな？　将校さん、ここから立ちさるよう、彼に厳しく命じてくれるでしょうな？」

「おまえを監獄へぶちこむよう命令するさ！　分かったか、じいさん？」

「何ですって、分かりませんな、将校さん！　わしらの考えじゃ、それが道理というものですわい！」

「それではきくが、老人、すでに7月に、臨時シベリア政府が私的所有権を復活したということを知らんのか？　聞いてはおらんのか？　土地の所有権も、森林の所有権もだ。皇室の森林が国家の所有に移されたというのはどういうことだ？　委員会は森林の所有権を勝手に自分のものにして、自分たちの武装森林警備隊さえ組織している！　これが犯罪ではないのか？」

そのときスミルノフスキーが進み出ると、〝気をつけの〟姿勢で立って、将校に質問した。

「あなたの階級を教えていただけませんか？」

「分遣隊長だ」

「ありがとうございます！」とスミルノフスキーは軽く頭を下げた。「誤解です、隊長どの！　森林委員会には、私欲で権力を手に入れた者はいません。みんな献身的に、無報酬で、社会的義務を遂行したのです。保護しなかったら、国家は森林資源を何倍も失っていたでしょう。委員会はあらゆる文書、報告、通達を緊急に出すことができます。あなたも、天然の、民族的な資源

を人民がどんなに賢明に保護してきたか、納得されるでしょう！」

将校はテーブルの上で委員会の書類を繰りながら、そのうちの一枚を取り上げてきいた。

「文書だと？」

「これらの文書です！」とスミルノフスキーが確認した。

「おお！　おお！」将校は頭を振った。分遣隊長は再び古びた革袋を脇から腹へずらし、中をさぐって、もう一枚の紙を取り出した。そして読み上げた——「レビャシカ村のみなさん、われわれはみなさんに、みなさんが選んだ民間組織を全面的に支持するよう呼びかけます。この組織は、今日、村で唯一のものであり、まして、あなた方すべてのところに文明と、みんなの協力以外には何ものによっても作り出されることのない諸概念を確立するために、欠くことのできない組織です」

読み終えると、青い澄んだ目をスミルノフスキーの方に上げて、くり返した——「〝レビャシカ村のみなさん、われわれはみなさんに……〟　え？　何ということだ、呼びかけるだと？」だれがおまえたちに、呼びかける権利を与えたのだ？　どこから手に入れたのだ？　だれから奪い取ったのだ？　それに、もと陸軍中尉の署名？　中尉も



呼びかけているのか!」
「呼びかけ! おお!」と言って、もう一人の将校は指を上げた。
「立派な呼びかけです! 署名するなという方が無理です! 署名しないわけにはいきません!」とスミルノフスキーが答えた。
階段口は暗く、弱々しい光が氷の張った窓からさし込んでいたが、そこからは、太陽や昼の明るさを想像することはできなかった。この破壊された光の中には、空さえもなかった。そして、この先どうなるかも、想像できなかった。この冬の短い昼の光がすっかり消えるまでには、まだ少し間があった。
分遣隊長は窓の方へ歩み寄って、紙を灰色の光にかざして、さらに読んだ。
「〝権力の本質は、道理ある法と秩序であり、あらゆる人間的な法と秩序も、人々が自然や大地を保護しなければ、無意味です……〟 何とまあ! もと中尉! 権力そのもの以外に、だれに権力の本質などが分かるのか? え? おまえではあるまい? それとも、この百姓にか?」と彼は手を前に延ばして、デリャービンでもなければカラーシニコフでもないだれかを指した。「なぜ勤務していない? 中尉、なぜ軍務についておらんのだ?」
「負傷して、除隊になったのです!」
分遣隊長はしばらく黙っていてから、スミルノフスキーには除隊の証拠があるかとピリペンコフにたずねた。ピリペンコフは、あります、自分のこの目で見ました、と叫んだ。
「さあて、合法的な徴兵忌避者か!」と言ってもう一人の将校はうなずいた。
「よろしい!」
「お願いですが……」とスミルノフスキーは彼に言った。だが将校は叫んだ。
「黙れ! 軍務での最後の地位は?」
「狙撃中隊の指揮官でした」
「なぜ悪党の一味に加わったのだ、狙撃中隊長?」
「私が参加したのは、社会的な自治組織です!」
「自治! どこで? レビャシカ村でか! おまえたちのレビャシカ村は、ロシアの村ではないんだろう?」
「ロシアの村です。だからこそ極めて必要な……」
「黙れ! 質問に答えろ! おまえたちのだれが、同類のウスチノフを殺したのだ? ニコライ・ウスチノフを? おまえがやったのか、もと中尉? 委員会とやら称するこのごろつき仲間なら、やらないわけもなかろう? ここじゃ、いずれ劣らぬ強盗ぞろいだからな!」
将校は息をついで、ちょっと考えると――「ふん、勝手にしろ! お互いに全員殺し合えばいいんだ。その方が世話がなくていい」
「私は要求します……」
「黙れ!」と言うと分遣隊長は、思いがけず静かに、むしろ考え深げに、はじめはだれということもなく、どこか脇の方に向かって、やがてスミルノフスキーの方に向かって言った。「勝手放題だ! すべてが勝手放題だ!」 彼は明らかにスミルノフスキーより若かったが、悩ましげに頭を振って言った。
「勝手放題だ、若いの! なぜ私がここへ来たか、たずねるがいい。こんな胸くその悪い村へ、クマの穴倉みたいな村へ? それを通ってきたからだ。勝手放題の償いでなければ、こんなところへ来ただろうか? そして、もと陸軍中尉、おまえもまた償いをするのだ!」――分遣隊長の声は、事務的な調子に変わった。
「さあて、委員会のメンバー諸氏」と分遣隊長は笑いを浮かべて言った。「軽くて済んだ。全員、槊杖(さくじょう)打ち30回。陸軍中尉スミルノフスキーは特別の功績により、40回! 天気はあいにくの厳寒だ。肌を出すのはつらいぞ。もっとも、シベリア育ちには寒さに慣れるまでもあるまいが! クジミン?!」
「はい、上官どの!」と兵隊がドアのところから返事をした。
「万事分かっておるな? くり返す必要はあるまい?」
「分かっております、上官どの!」
「みんなは広場か? レビャシカ村の連中は?」
「だれ一人通しておりません。すべての小路や門は閉鎖されています!」
「急いでやれ! 馬の餌はあるか?」
「あります、上官どの!」
「一時間後に、バルスコボへの帰路につく! ピリペンコフ?!」
ピリペンコフは返事をした。分遣隊長は彼に、森林警備隊員たちに一昼夜のうちに武器を差し出し、レビャシカ村から出ないという誓約書を出すよう伝えろ、と命令した。分遣隊長はピリペンコフにさらに何か言おうとしたが、スミルノフスキーがそれをさえぎった。
「森林委員会の書類の一つをお見せしたいのですが? ひじょうに興味深い書類です! それを見れば、多くのことが分かるでしょう!」
分遣隊長はうなずいて言った。
「見せろ!」
スミルノフスキーはテーブルに近づいて、せわしそうに書類の束をいじり始めた。
「ただいま、すぐです!」と彼は、まるで他人のような声で、うつろに言った。「ただいま! いま見つけます!」

委員会のメンバーは、うす暗い隅っこに身を寄せ合うようにして立ち、黙ってスミルノフスキーのせわしい手の動きを見つめていた。デリャービンが小声で言った。
「中尉のやつ、自分だけ助かろうとしているんだ! 裏切るぞ、畜生!」
将校は、テーブルに向かって座ったまま、ピストルに手を置いて、「さあ、さあ!」とアゴをしゃくりながらスミルノフスキーをせかしていた。と、とつぜんスミルノフスキーは、信じられないほどのすばやさで、からだごと将校にぶつかった。将校はピストルをテーブルの上に置いたまま仰向けに倒れた。銃声が響いた。そして、もう一発。
「逃げるんだ!」とスミルノフスキーが叫んだ。「逃げろ……」
うめき、叫び、ガラスの音、銃床で打つ音、そして銃声、さらに打つ音。
一分後には、スミルノフスキーの死物狂いの試みがどのように終わったかが明らかになった。将校は、右手で左手を支えており、その指の下には血がにじんでいた。分遣隊長はひっくり返ったテーブルの下で、自分の革袋を探していた。三人の兵隊が、床からスミルノフスキーを起こしていた。委員会のメンバーは、兵隊たちに隅っこに押しやられて、荒々しい息をしながら、あたりを見まわしていた。
こわれた窓からは、光が部屋に余計にさし込んで、凍てついた空気が床を這っていた。
分遣隊長はテーブルの下で袋を見つけると、ゆっくり起き上がって、軽く膝を曲げ、スミルノフスキーの顔を殴った。将校が反対側から殴った。
彼らは左右から交互に殴り、二人の兵隊が両脇から、もう一人が背後から、二人の将校の方へ交互に軽く突き出すようにしながらスミルノフスキーを支えていた。
奇妙なことに、スミルノフスキーはますますはっきり生きている徴候を示し、頭を動かして、目を殴られないように避けていた。呼吸もしだいに整ってきた。それから、彼は姿勢を正し、やがて力をこめて、足を前と横にふんばると、分遣隊長の腹を殴り、同時に将校の顔に血と、血まみれの肉片と、白い歯のかけらを吐きつけた。
再び鈍い殴り合いの音と、人間のからだが何か固いものにぶつかる音が聞こえ、再び痛さのあまり途切れがちな分遣隊長の声が聞こえた。
「クジミン! 連れ出せ! 全員だ! みんなを80回ずつ殴れ! 全員をぶちのめせ!」
兵隊たちは委員会のメンバーを部屋から連れ出しにかかった。
ピリペンコフが質問した。
「上官どの! 死んだ者はどうしましょうか?」
「だれだと?」 分遣隊長は椅子にうずくまって、痛さにうめいた。
「死んだ者です……ニコライ・ウスチノフです。死体を肉親に引き渡しましょうか? それとも何か? 棺に入れて、隣の家に置いてありますが」
「槊杖で殴れ、同じ仕打ちだ、けがらわしい奴め!」
「しかし、彼は死んでおります! すべては済んでしまって、死んでいるのです!」
「80回だ。いいな!」 顔から血を拭いながら、将校がゆっくり言った。「80回、80回だぞ……」
分遣隊長は立ち上がって、よろめきながらドアの方へ歩き出した。だがピリペンコフはさらに質問した。
「上官どの! 老人のイワン・イワノビチ・サモルーコフには、手かげんできないでしょうか? 彼には、村全体がついています。それに、正直のところ、私は彼の世話になっていたことがあるんです。80回はそれ相応でしょうが、なにぶん高齢ですから。どういたしましょう?」
分遣隊長は両手で腹をさすりながら、吐き出すように言った。
「好きにしろ!」 そして再び椅子に身を沈めた。「老人など、どうともなれだ、好きにしろ!」
イワン・イワノビチは、このときドアから最後に連れ出されるところだったが、兵隊の半外套をつかむと、死物狂いに、かん高い声で叫んだ。
「わしが一番悪いんだ、将校さん! 何だってわしにだけそんなことを? わしだって、あんたの顔につばを吐きますぞ! わしは少年のころから、いろんなものにつばを命中させるのがうまかった」
「さあ、ピリペンコフ」と分遣隊長は言った。「このしわくちゃじじいも、ぶちのめすんだ! おまえの首もひねってやるぞ!」
玄関口のまえの広場には、レビャシカ村の住人が、ぎっしり、凍えながら、黙って立っていた。
委員会のメンバーは、一人ずつ広場に引き出された。兵隊たちはスミルノフスキーの両腕をかかえて運んだ。カラーシニコフは何が行われているのか分からんといったふうに、不思議そうに見上げていた。イグナーチー・イグナートフは、すすり泣きながら、群集の方に手を延ばした。イワン・イワノ

ビチ・サモルーコフは、相変わらず将校につばを吐きかけてやるぞと毒づきながら、猫背の肩をふるわせふるわせ、さっさと歩いていた。そして、まるで喜んででもいるかのように、大声で群集に語りかけていた。

「この将校たちは、じつに卑劣漢だ！ ニコライ・ウスチノフはどうだ、立派だった。じつに立派だった。卑劣漢どもの手を借りずに、みずから果てた！ それでも立派ではないのか?! え? 賢明だよ！ 彼はいつだって賢明だった！」

キリル・パンクラートフが将校に近づいて、アゴひげをなでながら、しきりに凍りついたまつ毛をしばたたかせて、話し出した。

「将校さん、お願いです……人間的に扱って下さい。イワン・イワノビチ・サモルーコフ老人を放免してやって下さい!! 彼は高齢です。それに、人々にたいしてどれほどよいことをしてきたことか?!」

「名字は？」と将校がきいた。

「だれの名字です？」とキリルは分からずにきき返した。

「おまえのだ、百姓！ おまえの名字だ！ さあ？」

「パンクラートフです！ キリル・パンクラートフです……」

「おまえの家に謀反者どもが集まったな？ 森林委員会が？ 陰謀団だ！ そうだな？ 書類に書いてある――〝キリル・パンクラートフの家で〟と。棚杖50回だ！ 50回！」

キリルも兵隊たちに捕らえられ、引き立てられた。

ミーシカ・ゴリャーチキンが、凍えて青くなった唇で笑った。

「おまえたち委員会には、これでいいんだ、吸血鬼どもめ！ それ見ろ！ これがおまえたちの正義だ！ふん！」

デリャービンはポロビンキンと並んで歩きながら、腹を立て、むしろもったいらしく、非難をこめて彼に言った。

「おまえもこうなればいいんだ！ みんなから死ぬほどの目にあわされて当たり前なんだ！ おまえの盲目のために！ 百姓旦那スミルノフスキー中尉の言いなりに動く、立派な方々のために！」

「さあ、おまえはひどい目にあわなくていいのか？」とポロビンキンが面白がった。「お前は生き残れるとでも思っているのか？」

「おれはどうなってもいい！ 勝手にしろだ！ おまえたちみんなと、広場にいる馬鹿者たちの勉強になればな！ 正義がほしかったら、このいやな生活を変えることだというおれの言葉が、確認されればそれでいいのだ！ ひっくり返すんだ！ 畜生の墓場へ捨てちまえ！ 残念なのは、ウスチノフがもう生きていないことだ！ 彼にはもう、どうなっているのか分からない！ 残念だ！ あの善良さと、正義を行いたいという果てしない願望を持った彼が、自分がどんな値打ちがあるかを知ってくれたなら！ かわいそうに、すでに死んでしまった彼には、何を証明してやることもできない……彼は、いいかい、われわれの委員会がお仕舞いになるまぎわに、まるでうまいことをやったかのように、われわれみんなより先に死んでしまった。われわれと一緒にではなく！」

そのときデリャービンは、歩きながらクデヤールにぶつかった……ぶつかって、何か恐怖と絶望にとらわれているかのように、力なく彼を抱くと、兵隊たちがもたついているあいだに、クデヤールにささやいた。

「クデヤール、せめて生涯に一度でも、人間らしいこと、必要なことをやるんだ！ おまえはだれにも疑われていない。玄関口を通してもらえるだろう。おまえは、そこから納屋へ行け。あそこにはオゼルナヤ通りへ抜ける通路がある。私の家の地下室には、いまベーニャ・パンクラートフその他の人々がいる。その人たちに、悪党どもを帰路のバルスコボへの道で待ち伏せして、一人のこらずやっつけるように言うんだ！ やってくれ。これは人々のためなんだ、忘れるな！ やってくれるだろう?! 忘れるな！」

一分後。クデヤールは息を切らせながら、オゼルナヤ通りを走っていた。

彼は、ころんでは起き、ころんでは起きしながら、二人の女性――ドームナとジナイーダに追いついたり後れたりしながら走った。ドームナとジナイーダもまた急いで、走りながら紐でニコライ・ウスチノフの死体の入った棺を、踏みならされた、きしり音のする道をひきずっていた。

＊ ＊ ＊

そうこうするうちに、太陽は沈み、じっと動かない凍てついた空からゆっくり遠ざかり、たそがれの中をベールイ・ボールの森が次第にレビャシカ村に近づいていた。

あちこちの百姓家の上には煙が立ちのぼり、雪に埋もれた屋根を地面の上に少し持ち上げて、空にささげていた。

冬は自分自身に、自分の本性に耳を傾けていた。

星が目を覚ました。北斗七星の東の端に二つの星がきらめいた。

（さし絵 V・ガリジャエフ）

МОСКВИЧИ ЗНАКОМЯТСЯ С ИСКУССТВОМ ОРИГАМИ

Вряд ли в ми́ре найдётся хоть оди́н япо́нец, никогда́ не слы́шавший, что тако́е оригами. Большинство́ из них уже́ в де́тстве уме́ют скла́дывать э́ти причу́дливые фигу́рки из разноцве́тной бума́ги. А вот сове́тские лю́ди смогли́ познако́миться с иску́сством оригами то́лько неда́вно.

17 апре́ля о́бщество дру́жбы “СССР-Япо́ния” в До́ме дру́жбы с наро́дами зарубе́жных стран организова́ло встре́чу активи́стов о́бщества с президе́нтом Междунаро́дного це́нтра оригами Ёсидзава Акира, прибы́вшим в СССР по приглаше́нию Посо́льства Япо́нии. До прие́зда в Москву́ он продемонстри́ровал своё мастерство́ в Нахо́дке и Ленингра́де, а 19 апре́ля Ёсидзава вы́ступил пе́ред большо́й аудито́рией в Моско́вском городско́м Дворце́ пионе́ров и шко́льников.

Ита́к, Дом дру́жбы. “Введе́ние в курс” оригами напомина́ло уро́к в нача́льной япо́нской шко́ле. На столе́ пе́ред Ёсидзава — образцы́ его́ тво́рчества. Тут и павли́н, распуши́вший пы́шный хвост, и гори́лла, пригото́вившаяся к нападе́нию, тут и разли́чные соба́ки и ко́ни, слоны́ и за́йцы, ле́беди и ба́бочки и так да́лее. На отде́льном сте́нде, — не́сколько ма́сок, та́кже вы́полненных из бума́ги.

Ка́ждому из прису́тствующих в э́тот день в До́ме дру́жбы бы́ли ро́зданы набо́ры листо́в цветно́й бума́ги, и по сигна́лу Ёсидзава и под его́ руково́дством рабо́та закипе́ла. Он пока́зывал после́довательность опера́ций, перево́дчица переводи́ла его́ слова́ на ру́сский язы́к, а прису́тствовавшие в за́ле жёны сотру́дников япо́нского Посо́льства во главе́ с супру́гой Посла́ г-жей Сигэмицу подска́зывали, как на́до пра́вильно скла́дывать те и́ли ины́е фигу́рки.

Все рабо́тали дру́жно, с вдохнове́нием, акти́вно обме́ниваясь мне́ниями и сове́тами, демонстри́руя друг дру́гу свои́ успе́хи. Взро́слые стара́тельно выде́лывали весёлые фигу́рки, что́бы до́ма научи́ть э́тому мастерству́ свои́х дете́й и вну́ков. По сигна́лу Ёсидзава че́рез ка́ждые два́дцать-три́дцать мину́т “рабо́ты” все дру́жно де́лали дыха́тельную гимна́стику и дава́ли о́тдых непривы́чным к подо́бному труду́ рука́м.

И хотя́ ба́бочки, цветы́, соба́ки и традицио́нный япо́нский журавли́к, сде́ланные начина́ющими, ма́ло напомина́ли то, что выходи́ло из-под рук Ёсидзава, ка́ждый из прису́тствовавших в за́ле за два часа́ суме́л хоть на немно́го приобщи́ться к э́тому дре́внему япо́нскому наро́дному иску́сству, ощути́ть ра́дость тво́рчества со́бственных рук, для кото́рого тре́буется лишь листо́к бума́ги и фанта́зия.

本号のテキストは，20–21 ページに掲載されている「日本の折り紙にうっとり」の全文です。

【注】

☆1行目：Вряд ли в мире найдется хоть один японец ...〈(折り紙がどういうものか，聞いたことがないような）日本人は，世界中に一人もいないだろう〉

☆11行目：“Введение в курс” оригами напоминало урок в начальной японской школе〈折り紙の“入門コース”は日本の小学校の授業風景にそっくりだった〉

☆16行目：розданы は разда́ть〈配る〉の過去被動形動詞 ро́зданный の複数短語尾形。なお，раздать の過去形は ро́здал, раздала́, ро́здало, ро́здали。

☆17行目：Он показывал последовательность операций〈折り方を一つ一つ，順を追って説明した〉

☆22行目：с вдохновением〈熱心に〉

☆26行目：...и давали отдых непривычным к подобному труду рукам〈そのような仕事に慣れていない手を休ませた〉

☆27行目：И хотя бабочки, цветы ... сделанные начинающими, мало напоминали то, что выходило из-под рук Ёсидзава ...〈初心者たちによって作られたチョウや花…は吉沢氏の手の下から出てくるものとはほとんど似ていなかったが〉

読者のページ

日ソ合作バレエ『かぐや姫』

東京都　村松　和

『今日のソ連邦』に掲載される、ソビエト・バレエ、舞踊についての記事、グラビアを、いつも心おどらせ、関心をもって拝読しておりますが、1月1日号の日ソ合作の舞台、東京バレエ団の新作『かぐや姫』は、特に興味がありました。

そのバレエ『かぐや姫』は、4月15、17の両日、東京バレエ団15周年記念公演として上演されましたが、振付のアレクセイ・ワルラーモフ氏は、その晴れの舞台を見ず、4月4日、モスクワで亡くなられ、はからずも遺作となってしまったのです。バレエ『かぐや姫』は、アイヌを主題にした『まりも』以来、日本の民族バレエとして大きな期待を抱かされていた作品で、今回も、故ワルラーモフ氏や作曲家メーエロビチ氏の日本文化への造詣の深さに驚き、憧憬の念に心打たれる思いでした。N・ベノア氏の豪華、ロマンチックな美術を背景に、V・エーデルマン氏指揮の流麗なる旋律にのって踊られる、かぐや姫と地上の恋人、太郎のパ・ド・ドゥの中には、心にくい程の日本のフィーリング、味といったものが織りこまれ、その振付には、私達日本人が気がつかなかったような発見がありましたし、東京バレエ団の見事なアンサンブルと共に、このバレエの振付に命を燃やしたワルラーモフ氏を思い、まさに感動の舞台でした。

ワルラーモフ氏は、「日本のバレエ芸術におけるソビエト・バレエの役割」（『今日のソ連邦』一九七六年五月号）のインタビューでも感じられるように、日本を愛し、心をこめて日本のバレエへ尽くされた稀有な振付家でした。氏亡き後もバレエ『まりも』、『かぐや姫』は残り、伝統のソビエト・バレエを通して日本の民族バレエの可能性と、バレエ芸術の醍醐味、不思議な力を教えてくれたワルラーモフ氏のことを、私たちは決して忘れることはないでしょう。

クチンスカヤの近況を知りたい

東京都　保坂　静

私は東京に住む女子大生ですが、なぜ私が『今日のソ連邦』を読むようになったか、そのきっかけをお話しします。

私が小学4年生の時でした。私はメキシコ・オリンピックでのソ連女子体操のエース、クチンスカヤの演技、ほほえみを見て、すっかり彼女の大ファンになってしまったのでした。それから私は大のソ連びいきとなり、図書館で『今日のソ連邦』をみつけていっしょうけん命読むようになりました。

彼女は今29歳になっていることと思います。バセドー氏病という不運にみまわれ、体操をあきらめたというタス通信以来、どんなニュースも入ってきません。

彼女は今なにをしているのでしょうか。結婚したのでしょうか。一ファンとして彼女の幸せを祈らずにいられません。彼女の近況をお知らせください。また彼女の事について書かれた本（たとえば自伝など）を知らせてください。彼女のソ連での人気、評価はいかがなものでしょうか。お忙しいところ、いろいろお願いしてすみません。

よいお返事を期待します。

所沢市　水村　真理子

私の『今日のソ連邦』を読むうえでの楽しみの一つは、読み終わった後、その表・裏表紙を本のカバーにすることでした。ところが今度非常に小型化されたため、私の楽しみは半減してしまいました。私は前の大きさの方が〃グラフ雑誌〃として良いと思いますが、だめならせめて『タイム』や『ニューズウィーク』位の大きさに、又裏表紙は広告に使わず、もとの様にして下さる様お願い致します。

仙台市　上野　周也

私はソ連邦に興味を持ち、『今日のソ連邦』をいつも楽しく読ませてもらっています。『今日のソ連邦』で取りあげてもらいたい点をいくつか書いてみたいと思います。

一、ソ連の原子力砕氷船についての記事を載せてください。

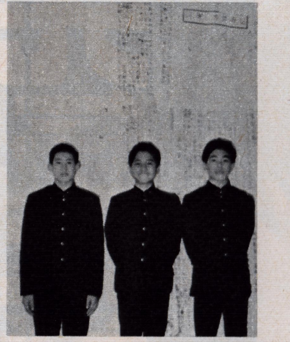
二、ピオネールについて、またソ連の児童と青少年の生活について教えてください。

三、トレチャコフ美術館について教えてください。

これからも楽しい記事をたくさん載せてください。

〔編集部から〕

上野さんのご要望のうちすでに『今日のソ連邦』誌で取り上げたものは、その記事のコピーをお送りします。



（学校の文化祭の展示で本誌の記事を利用した東京の葛飾区立大道中学校の生徒さんたちから、次のようなおたよりと写真が送られてきました）。

このたびは、豊富な資料をいただき有難うございました。

そしてその資料を生かし、写真のように立派なレポートを作ることができました。

いずれまた、後輩がそちらへ訪れることと思いますが、その時もよろしくお願いします。

とりあえずお礼申し上げます。

ソ連の若者と文通したいが…

野田市　井口　和基

拝啓。初めまして。『今日のソ連邦』を毎月とはいきませんができる限りたびたび読んでいます。回を重ねていくうちにソ連邦に住む人々の考え方、生活、社会一般の事などが分かってきて、ソ連という国のよさが改めて見直されました。そしてこの雑誌の中にはソ連の進もうとする道やその意図などが明白にされており、その精神が伝わってくるような気さえします。しかし残念な事に僕のような一若人がソ連本国へ学びに行く事もできないまま、ソ連邦の同じ若者たちと話ができないという事をとても残念に思っています。

そこでできるなら、本誌誌上に文通欄として文通をしてくれるような若者の住所を載せて欲しいと思いますがどうでしょうか？

ソ連と日本の良き、より良き親交はやはり若いうちから努めておくことこそ重要ではないでしょうか？　いや、これはソ連と日本だけにとどまるものではありませんが……。先程も言ったように、少なくとも本当にソ連の人々を知りたいと欲しているのなら、誰もが文通相手がないということに失望してしまうでしょう。

ぜひ僕のこの希望がかなえられ、次に本誌を見る時に喜びを持って読むことができる事を祈っています。

貴誌の御健闘を心からお祈りいたします。

〔編集部から〕

ほかにもソ連の人と文通をしたいというお手紙を時々いただいておりますが、編集部では文通のお世話はできません。ソ連にはペンフレンドを紹介してくれる特別の機関といったものはありませんが、ソ連の対日友好団体である「ソ日協会」か、外国の青年団体と協力している「ソ連青年団体委員会」へ直接お願いしてみて下さい。住所は左記の通りです。なお、お手紙はロシア語か英語でお願いします（ソ日協会は日本語も可）。

ソ日協会

The "USSR-Japan" Society
(14 Kalinin Prospekt, Moscow, USSR)

ソ連青年団体委員会

The USSR Committee of Youth Organizations (8/7 Bolshoi Komsomolsky Pereulok, Moscow, USSR)

モスクワ日本語放送の時間と周波数（1978年9月2日まで）

放送時間（日本標準時）	17.00〜17.29	17.30〜18.14	18.15〜18.59	19.00〜19.29	19.30〜19.59	21.00〜21.29	22.00〜22.29	23.00〜23.29
周波数（メガヘルツ）	0.62 1.25 5.96 9.54 11.91 12.03 15.24 15.28	左に同じ	左に同じ	左に同じ	0.62 1.25 5.96 9.54 11.91 12.03 12.04 15.24	0.62 1.25 5.96 12.04 15.28 15.33	0.62 1.25 5.96 11.77 12.04 15.28 15.33	0.62 1.25 5.96 7.18 9.73 11.77 12.04 15.28 15.33

元気に学ぶ聴覚障害児

——早期実験教育の成果

アレクサンドル・ロボフ



耳にしたことのない新しい単語を発音するのはむずかしい。でも子どもたちはいっしょうけんめい。

本誌6号の「読者のページ」にも紹介しましたが、松江市の関　光子さんをはじめ多くの読者から、ソ連の目や耳や手足の不自由な、いわゆる身体障害者の教育について紹介してほしいという要望が寄せられています。本号では、耳の不自由な子どもたちの早期教育について取り上げました。

医学はいまのところまだ、どうして聴覚障害が生じるかについて、統一的な答えを出していない。原因としてはっきりしているのは、遺伝的な影響と薬物による副作用だけである。抗生物質の服用によって、幼児に聴覚障害が生じる例が知られている。統計によれば、世界の子どもの3—4%が、生まれながらの聴覚障害児である。ろう者および難聴者の数は一億人以上、つまり大きな国の人口に匹敵する。

もちろん、障害児教育者や教育理論家の多くは、ろう児が精神的に異常であるとか、知的に限界があるとは考えていない。にもかかわらず、実践を離れた理論の場では、「障害児を正常児に変えることは不可能ではないか!?」とか「ろう児はやはり欠陥児だ。証明するまでもあるまい」という声が時折きかれる。

この世に生まれ出たときから、聴覚障害児は眼球の動きが鈍い。一人で座れるようになるのも、立てるようになるのも遅い。耳がきこえないことによって、視覚の発達もおくれる。これらの事実にたいして、どんな反論ができるだろうか?

これにたいして、その通りだと主張する学者もいれば、同じく断固として、そうではないと主張する学者もいる。

私は、欠陥学研究所がモスクワのある幼稚園で編成した聴覚障害児実験グループの子どもたちの絵を見たことがある。この研究所では一九六六年に初めて、音を奪われた子どもたちの可能性を確信している学者グループによって、科学的な実験が開始された。聴覚障害児たちの絵は、正常な子どもたちの絵に決して劣っていないばかりか、しばしばその色彩や想像力において優れてさえいた。

かなりの時間を耳の不自由な子どもたちといっしょに過ごし、彼らを観察した私は、同じ年齢の耳のきこえる子どもたちよりも発達した、5歳から7歳までの何十人ものすばらしい、楽天的な子どもたちを見てきた。これらの子どもたちは、仲間の誕生日には劇を演じたり、夢中になってゲームをやったり、踊ったり、誕生日を迎えた子にお祝いの詩を読んでやったりした。

実験プログラムが、両親たちとの協力を聴覚障害児教育のもっとも重要な一環と見なしているとはいえ、〝生活のための生活〟という原則は、学者たちにとっては本質的な問題ではない。この実験の目的は、教師たちの熱狂的な献身や、親たちの没我的な犠牲を必要としない、完全な聴覚障害児教育システムをつくり出すことだった。

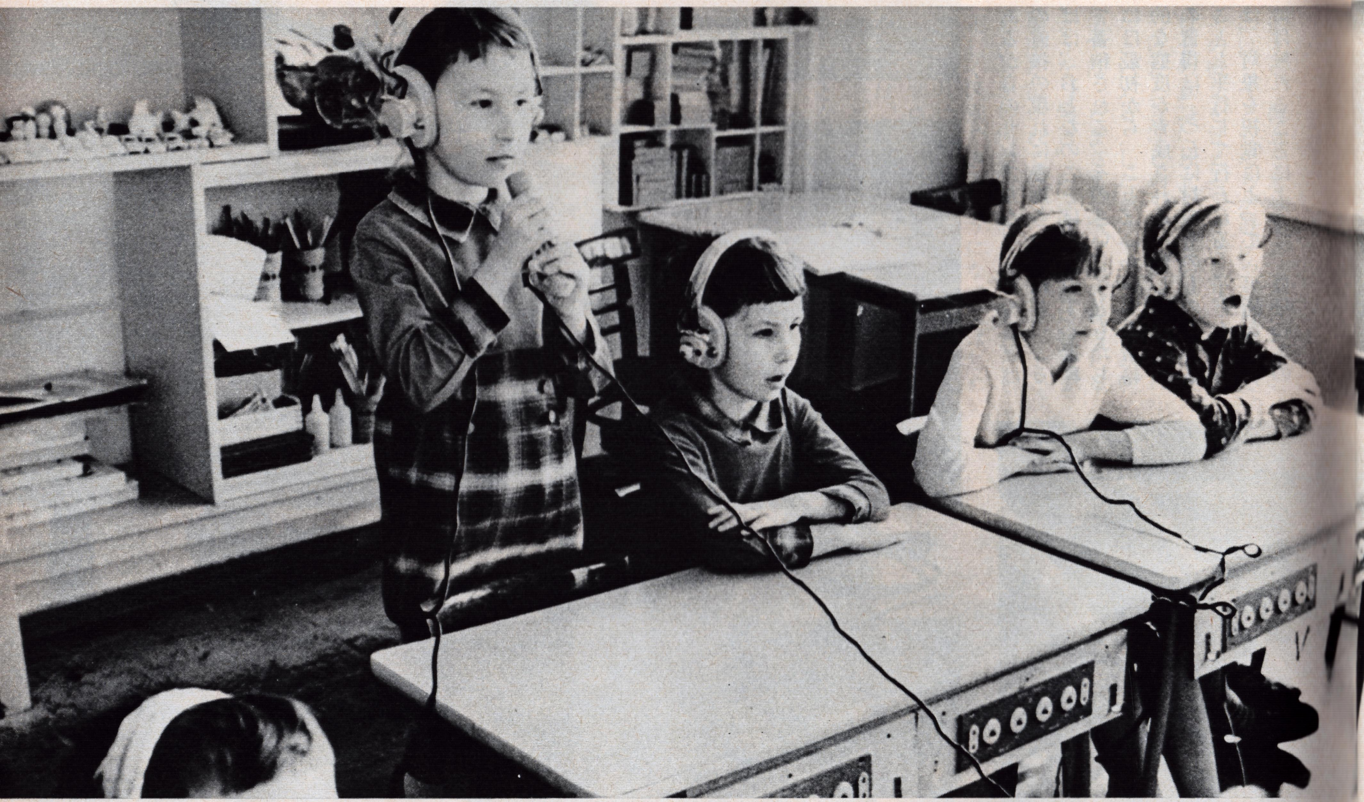
耳の不自由な子は、幼稚園での3—4年にわたる聴覚障害児教育によって完全に、通常の普通教育学校への準備がされなければならない。10年以上まえに始められたこの実験は、今日、その理論的、実践的命題が、具体的な、体系立ったプログラムとして実を結ぶ段階にまで到達した。このプログラムに沿って学習する障害児グループが、全国の多くの都市につくられている。



▼実験グループの子どもたちは、あらゆるものにたいして驚くほどの知識欲を示す。

◀耳の不自由な子どもたちに積極性と知識欲を植えつけるのが先生たちの課題。





補助設備を使って発音の練習。





◀「これは何という語ですか？」「これはちょっとむずかしいなあ」



「はい、先生の口もとをよく見て」

このようなグループで最初に教育を受けた30人の耳の不自由な子どもたちは、現在すでに普通教育学校で学んでいる。その多くは、成績も悪くない。小さな補聴器さえなければ、学童たちのにぎやかな群れの中で、耳の不自由な子を区別することさえできないだろう。

聴覚障害児の教育は、きわめて簡単である。学者たちは、正常な知能を持った聴覚障害児のあらゆる行動の異常は、補償的な教育や訓練の欠如、コミュニケーションの一定の困難、あるいは、コミュニケーション手段の未発達によるものであることを確認した。そこで学者たちは、聴覚障害児教育の最初の段階から、話しことば、ことばの形象の形成、残存聴力の積極的な利用、聴覚機能の発育に特別な関心を払った。すべての教育や訓練は、子どもたちの年齢的な特徴、心理の"塑像"にとってもっとも好ましい時期が具体的に考慮されている。

耳が不自由だとはいっても、いかなる音をも感じることができないような子は、実際にはいないので、訓練の最初の日から、不断のトレーニングと、共用あるいは個人用の特殊な補聴設備を使っての、聴覚の活発化が行われる。本質的には、学者たちは聴覚障害児の知的発達を、音の環境にまったくめぐまれない普通の子どもの発達として見ている。実験プログラムのすべての命題は、この音の環境を最大限に大きくすること、音が奪われていることによる心理的発達の後れを、体操、リズム運動、絵、音楽、知脳発育訓練、聴覚障害児の親たちが知っていなければならない一連の特殊技能によって最大限に補うことをも目ざしている。

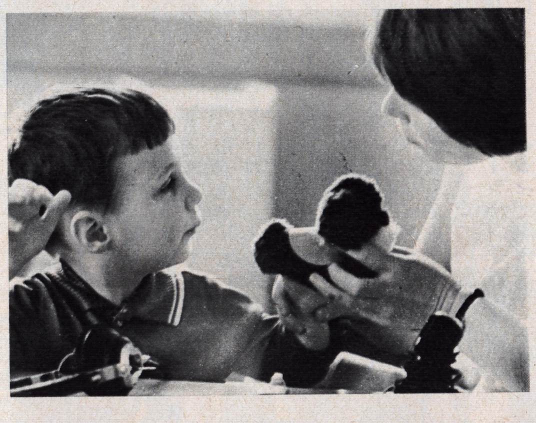
重要なのは、作り物であってはならないという原則である！　子どもたちは訓練の最初の日から、ノドのふるえや床の振動、計器の目盛りなどの、音やことばの間接的な反映にではなく、唇の動きや、初めはきわめて単純では



あるが音のサンプルなど、音やことばの直接の現れに参加させられる。ことばは、おとなのことばを真似する過程で蓄積される。そのさい、子どもたちには最初から、ことばにたいする情緒的な態度が育成される。新しいことばの習得は、つねに対象そのものを知ることと平行して行われる。子どもたちは、対象を視覚によって、可能な場合には触れることによって、自分のものにする。概念を意味することばの場合には、子どもたちが遊びや練習の中でその概念を使えるようになり、それを自分の意識に独立したものとして植えつけたときはじめて、それは習得されたといえる。したがってプログラムの中では、さまざまな概念が形成されるような"無言"の課題や遊戯に特別な場所が割かれている。たとえば、子どもたちが幾何学的な形、色、大きさを正しく区別できるようになってはじめて、それに相応する概念が与えられる。

教育プログラムのもう一つの本質的な細目は、ひじょうに多くの課題や遊戯に、子どもの自主性が考慮されており、おとなの干渉や介助が完全に排除されていることである。

今日、耳の不自由な子どもも7—8歳で、同年齢の子どもたちといっしょに普通学校の1年生になるが、読み書きはもちろん、むずかしい質問に答えることさえできる。耳の不自由な子どもたちは、言葉の文法的な形態を知っており、前置詞や代名詞を正しく使ったり、話の中で複雑な文章構造を使うこともできる。同じ年齢の、正常な聴覚を持った子どもでさえ、必ずしもみんながこれらのことを知っているわけではない。しかし、これが肝心な点ではない。はるかに重要なのは、耳の不自由な子どもたちが、自分たちを取りまいている世界の沈黙の真空状態と永久に訣別して、色彩や動きや生命に満ちた別の世界を知ったということである。彼らは、すべての子どもたちと同様に、喜々としており、活発で、知識欲に富み、いたずらもさかんだ。



▲4歳の子どもに"木"や"太陽"や"家"という概念を教えこむのに、教師はどれだけの努力と忍耐を必要とすることか。

手で触れたり見たりすることのできるものは覚えやすい。



「さあ、思い出して言ってごらん」

動作による訓練は早期教育の重要な一環。もちろん、子どもも大喜び。



オリンピックとソ連選手(7)

ワレリー・シテインバフ

モントリオール大会（一九七六年）

一九七六年にカナダのモントリオールで開催された第21回オリンピックではソ連選手は大勝利を収めた。ソ連チームは金メダル49個、銀メダル41個、銅メダル35個の計一二五個のメダルを獲得し、非公式国別団体得点で七九二・五をあげ第1位となった。

オリンピック史上初めて三段跳びでソ連のビクトル・サネエフが3連覇を成し遂げた。モントリオール大会の一年前までサネエフがオリンピックで3連勝すると信じていた人は少なかった。

それは、ブラジルのJ・オリベイラがサネエフの持つ世界記録を一挙に45cm上回る17m89の世界新記録を出したからだ。

その時、サネエフはどうだったか？彼はこの記録にびっくりしたものの、がっくりはしなかった。サネエフはオリベイラの記録について論評し、自分はオリベイラと勝負するのを楽しみにしている、それは強敵と顔を合わせ、それに勝つことほど名誉なことはないからだ、と語った。

モントリオールではサネエフは5回目に17m29を出し、これが優勝記録となった。オリベイラはサネエフの記録に39cmおよばず（16m90）、3位に終わった。

オリンピックのある種目で一国の選手が金、銀、銅を独占するのは、きわめてまれなことである。この快挙を成し遂げたのがソ連のハンマー投げ陣（学生のユーリー・セディフ、学生のアレクセイ・スピリドノフと36歳のアナトリー・ボンダルチュク）であった。

ボンダルチュクは表彰式が終わった後、記者会見に出席し、にこにこしながら次のように語った。「スポーツ生活の終わりを前にして、オリンピックのメダルをとれたことは非常にうれしい。しかし、もっとうれしいのは、ユーリー・セディフの勝利です。それは彼が私の弟子だからです。弟子が師匠に勝った時、それは師匠の勝利でもあるのです」

タチヤナ・カザンキナは女子八〇〇mと一五〇〇mの2種目で金メダルをとったが、八〇〇mでは1分54秒94の世界新記録で優勝を飾った。

モントリオール大会でソ連のレスリング陣は大活躍した。グレコローマンでは金7個、銀2個、銅1個、フリーでは金5個、銀3個を獲得した。ソ連のレスリング陣がオリンピックでこれだけのメダルをとったのは初めてだった。フリーのレワン・テジアシビリとイワン・ヤルイギン、グレコローマンのワレリー・レザンツェフはオリンピック2連勝。

ハンドボールがオリンピックの正式種目になったのは72年大会からだが、このときは男子のみで、ソ連チームは5位の成績だった。モントリオール大会の優勝争いではかなり複雑な状況が生まれた。72年のオリンピック・チャンピオンであるユーゴスラビア・チームに敗れた後、対西独戦がソ連チームの優勝のカギをにぎっていた。しかしソ連チームは見事に勝利して、チャンピオンとなった。

モントリオール大会で初めて行われた女子ハンドボールでソ連チームがオリンピックの最初のチャンピオンになったことは、喜ばしい限りである。

モントリオール大会の前までマリーナ・コシェバヤ、マリーナ・ユルチェニヤ、リュボーフィ・ルサノワの名は水泳ファンの間であまり知られていなかった。この3人が女子二〇〇m平泳ぎで金、銀、銅を独占したのである。ところがモントリオールではスクワの女学生マリーナ・コシェバヤ（16歳）は2分33秒35の世界新記録を樹立した。

ソ連の競泳陣はモントリオールで金1個、銀3個、銅5個を獲得した。

ソ連の柔道陣は金を2個、銀を2個、銅を1個とり、これまでのオリンピックの中で最高の成績をあげた。金メダルをとったのは軽中量級のウラジーミル・ネブゾロフと重量級のセルゲイ・ノビコフ。

重量あげではスーパーヘビー級ワシリー・アレクセーエフがスナッチで一八五kgのオリンピック新、ジャークで二五五kgの世界新を出し、トータルでも四四〇kgのオリンピック新記録でオリンピック2連勝を達成した。アレクセーエフ以外に6人のソ連選手が金メダルを獲得した。

自転車の団体ロードレースではソ連チーム（4人）がミュンヘンに続き2連勝。

男子体操ではニコライ・アンドリアノフが個人総合優勝したが、彼は種目別でも金を3個（床運動、つり輪、跳馬）、銀を1個、銅を1個獲得した。

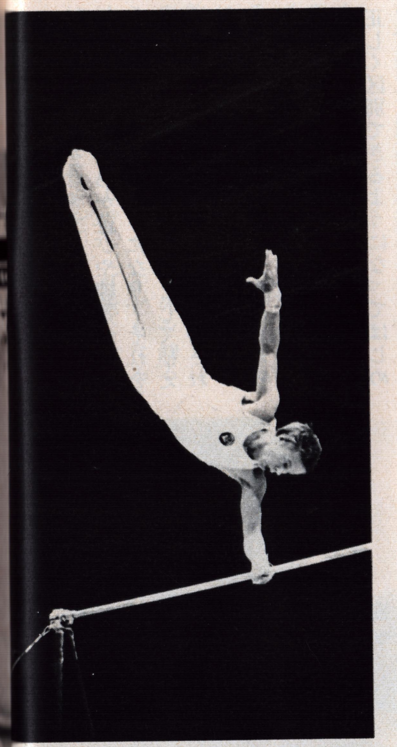
この控えめでまじめな青年は、東京、メキシコ、ミュンヘンと個人総合の王座を独占してきた日本の選手をついに破ったのである。アンドリアノフは見事な技を連続して見せた。彼が加藤沢男選手を総合得点で1点上回ったのは偶然ではない。

ソ連のフェンシング・サーブル陣はモントリオールで再びその強さを発揮した。ソ連チームはサーブルで全部のメダル、つまり団体で金、個人ではビクトル・クロボプスコフが金、ウラジーミル・ナズルイモフが銀、ビクトル・シジャクが銅とメダルを独占した。女子フルーレ団体でもソ連が優勝した。

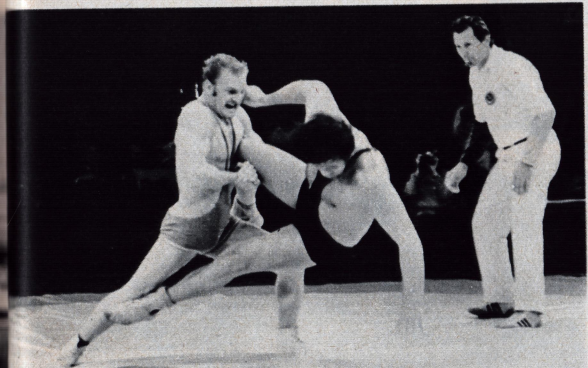
カヌーのカヤックとカナディアンではすべての金メダルを社会主義諸国の選手が分かちあった。ソ連が6個、ドイツ民主共和国が3個、ルーマニアとユーゴスラビアがそれぞれ1個という内訳だった。

モントリオール・オリンピックは社会主義諸国におけるスポーツの高い発展水準を示した。夏季大会の非公式国別団体得点で社会主義国が1位、2位と続いて占めたことはなかった。モントリオールではドイツ民主共和国が強敵の米国を3位に追いやった。社会主義諸国の選手は一九八個の金メダルのうち一二一個を獲得した。


サーブル個人で優勝したビクトル・クロボプスコフ


男子体操で個人総合優勝を果たしたニコライ・アンドリアノフ


カナディアン2人乗り500mと1000mの両種目を制覇したセルゲイ・ペトレンコ、アレクサンドル・ビノグラードフ組。


レスリング・フリースタイルの100kg級で無敵の強さと技を見せたイワン・ヤルイギン（左）



激戦の末、金メダルを獲得したライトヘビー級のワレリー・シャーリー


オリンピック史上初めて三段跳びで3連覇したビクトル・サネエフ

OLYMPICS-80
オリンピックの水泳競技

レオニード・ゴリャノフ

水泳競技が近代オリンピックの種目に、これまでずっと加えられてきたという一事だけで、このスポーツの人気と国際的権威のほどは、十分納得がいこう。オリンピック水泳（競泳）競技の種目はたえずふえており、一八九六年にわずか4種目、しかも男子に限られていたものが、いまは男女とも個人種目が11、リレーが2種にのぼっている。言いかえると、オリンピックのプールには26組という陸上競技に次いで多い金、銀、銅メダルが競泳選手たちを待っているわけだ。

初期のオリンピックでは欧州勢が金メダルを独占したものだが、一九二〇年代に入ると米国選手がトップをおさえ、三〇年代では日本の男子とオランダの女子がめざましい成績をあげた。戦後の非公式の団体成績では、米国、オーストラリア（以上男女とも）、日本（男子）の選手が三つどもえの激闘を交じえた。一九六四年の東京オリンピック、一九六八年のメキシコ大会、一九七二年のミュンヘン大会では、いずれも米国選手が他を大きく離して優勝を独占したが、モントリオール（一九七六年）では、ドイツ民主共和国の選手たちが金メダルの仲間入りをした。

ソ連の水泳選手がオリンピックに初出場したのは、一九五二年のヘルシンキ大会（男子15人、女子3人）。この大会でマリア・ガブリシ選手は二〇〇m平泳ぎで6位に入賞。4年後のメルボルン大会でソ連勢はさらに気を吐き、K・ユニチェフ選手は二〇〇m平泳ぎで2位に、I・ザセダ選手は同じ種目で5位に入った。四〇〇m自由型リレーでソ連は銅メダルを獲得した。

一九六四年の東京オリンピックで、ソ連の水泳選手は金メダルへと大きく飛躍した。この大会でセバストーポリ出身の15歳の高校生ガリーナ・プロズメンシチコワは、二〇〇m女子平泳ぎで優勝を飾り、また男子の二〇〇m平泳ぎでもゲオルギー・プロコペンコが2位に入った。一九六八年のメキシコ大会ではウラジーミル・コシンスキー（レニングラード）が平泳ぎで銀メダル2、銅メダル1を獲得、さらに一九七六年のモントリオール大会でもソ連選手は好成績を収め、女子二〇〇m平泳ぎで1―3位を独占した（1位マリーナ・コシェバヤ、2位マリーナ・ユルチェニヤ、3位リュボーフィ・ルサノワ）。これまでのオリンピック大会でソ連の競泳陣が獲得したメダルは金2、銀9、銅13である。

いまモスクワの平和大通りに、屋内スタジアムと、水泳プールが入るマンモス・スポーツセンターが建築中だが、二つの施設は長さ約五〇〇m、幅二五〇mの一階の共通の観覧席で結合され、事実上一体のものとなる。観覧席の上には屋内スタジアムの大きなダ円の屋根と屋内プールの円屋根がそびえる。

プール施設には50m×25mプールが二つと一万人を収容する観覧席のほか、33m×25mの飛び込み用プールが設けられる。子どもプールは12・5m×9mのものが二つ、25m×14mが一つ出来る。ここで一九八〇年7月20日から28日までオリンピックの水泳競技が行われる。競技種目は男子――自由型（一〇〇m、二〇〇m、四〇〇m、一五〇〇m）、平泳ぎ（一〇〇m、二〇〇m）、バタフライ（一〇〇m、二〇〇m）、背泳ぎ（一〇〇m、二〇〇m）、四〇〇m個人メドレー、リレーは八〇〇m自由型と四〇〇mメドレー。女子――自由型（一〇〇m、二〇〇m、四〇〇m、八〇〇m）、平泳ぎ（一〇〇m、二〇〇m）、バタフライ（一〇〇m、二〇〇m）、背泳ぎ（一〇〇m、二〇〇m）、四〇〇m個人メドレー、リレーは四〇〇m自由型と四〇〇mメドレー。

モスクワ・オリンピックには世界の60カ国から約一〇〇〇人の強豪水泳選手が参加する予定。平和大通りのプールではまれに見る白熱した戦いがくり広げられるだろう。

名人続出のソ連チェス界

●読者の質問に答える●

神戸市にお住まいの中山美佐代さんからソ連のチェス界について紹介してほしいとのご希望がありましたので、ソ連チェス界の現状を紹介しましょう。

現在ソ連のスポーツ協会、クラブ、工場・官庁のチェス部、大学や小中高校、ピオネールの宮殿や会館でチェスをやっているチェスの組織人口はざっと三〇〇万。ソ連のチェス界は、人数、技量ともに世界のトップで、65人のグランドマスター（チェス界の最高位）と七〇〇人のスポーツマスターがいる。

世界一の座を独占

一九五〇年以来女子世界選手権はずっとソ連が独占しており、ここ15年間はグルジアのノーナ・ガプリンダシビリがチャンピオンの座にある。彼女は女性で初めて国際グランドマスター位を獲得した。

男子も一九四八年から一九七二年まではソ連が世界チャンピオンを独占してきたが、当時最もながくその座にあったのはミハイル・ボトビンニクである。彼のほか、ワシリー・スムイスロフ、ミハイル・ターリ、チグラン・ペトロシャン、ボリス・スパスキーも当時チャンピオンになった。

ボトビンニク（現在工学博士）は、一九四八年から一九六三年まで世界チャンピオンをほぼ独占し、ソ連のグランドマスターの中ではチャンピオンの在位年数が最も長い。一九五七年にスムイスロフ、一九六〇年にターリと戦って、いったんはチャンピオンの座を下りたが、いずれも翌年のリターン・マッチでチャンピオンに返り咲いた！

ソ連のグランドマスターたちは一九七二年から3年間、米国のロバート・フィッシャーに世界チャンピオンの座を譲ったのち、再びタイトルを取り戻した。一九七五年には、レニングラード大学経済学部を卒業した若手のホープ、24歳のアナトリー・カルポフが世界チャンピオンとなった。ウラルの工業都市ズラトウストで成長したカルポフは、はやくからすぐれた天分を発揮し、15歳でスポーツマスター、その2年後にはジュニア世界選手権保持者となった。カルポフは20歳そこそこのときも、その後も、出場したほとんどの大試合で勝利しており、たとえばこの3年間の15回の大試合のうち13回も優勝している！

輩出する有望新人

カルポフとほぼ時を同じくして頭角をあらわし、チェスのすぐれた、独創的技量を発揮した若手として、オレグ・ロマニシン、ラファエル・ワガニャン、ユーリー・バラショフ、ボリス・グリコ、ビタリー・ツェンコフスキー、ヨシフ・ドルフマンなどがいる。いずれもすでに世界チェス界のおしもおされぬグランドマスターである。彼らは内外の多くの試合で安定した好成績をあげ、その腕前を証明してきた。

しかしすでに次代を継ぐごく若いプレヤーも輩出している。その多くはまだ18歳未満だが、とくに注目したいのは二度ソ連ジュニア選手権大会で優勝した14歳のガリク・カスパロフである。カスパロフはアゼルバイジャンの首都バクーのピオネトル宮殿でチェスを始め、最近は強力メンバーをそろえたミンスクの男子成人の試合でスポーツマスターの基準を3.5点もオーバーする成績で優勝した。カスパロフのこの成績は偶然のものではなく、ソ連の学校、ピオネールの宮殿や会館がチェスにものすごく熱を入れているたまものといえよう。たとえば、〝ピオネールスカヤ・ラジヤ〟（ピオネールのルーク）競技会という学童のチェス試合には、毎年全国で何十万という少年が参加する。

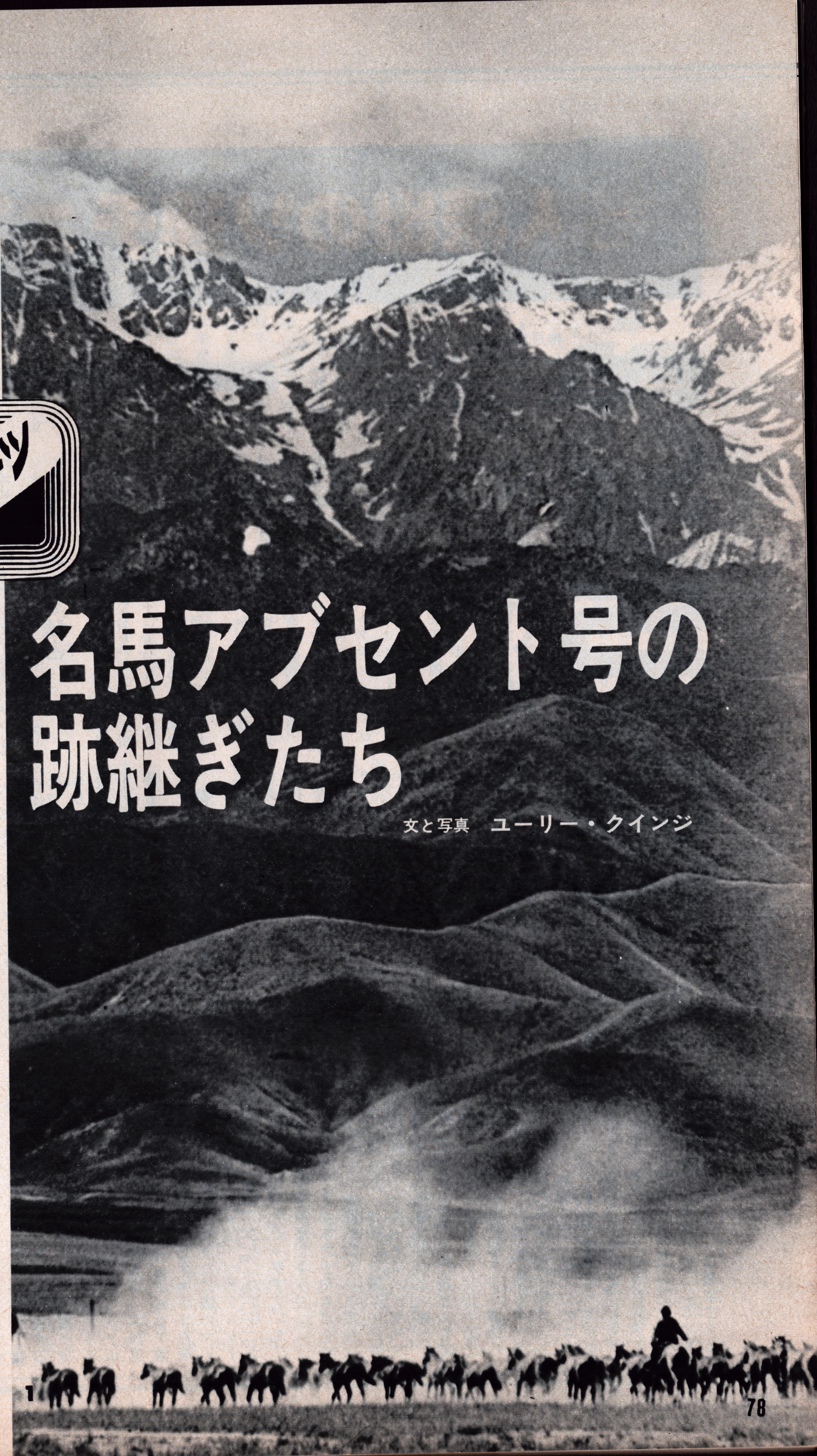
毎年こうして将来性のある大器が見出される。かつてモスクワのピオネール宮殿のチェス部で学んだアルツール・ユスポフは、昨年の世界ジュニア選手権大会で優勝した。またグルジア共和国の首都トビリシのピオネール宮殿で〝チェス教育〟を受けた17歳のマイヤ・チブルダニーゼは、ベテラン女子選手の試合で勝ち、ことしの8月には冒頭に紹介したノーナ・ガプリンダシビリと世界女子選手権を争う。

ソ連のグランドマスターやスポーツマスターたちは国際的なチェス競技に積極的に参加し、出場した第2次世界大戦後の世界チェス・オリンピックでは毎回、チーム優勝するなどの輝かしい成績をあげている。また過去3年間にソ連のチェス・プレヤーは40カ国に出かけ、また22の外国のチェス連盟の代表を招待した。ソ連のグランドマスターやマスターたちは外国の公式試合だけでなく、外国での一回だけのエキジビション・ゲームや講演にもどんどん出かけている。たとえばアナトリー・カルポフ、チグラン・ペトロシャン、エブゲニー・ワシュコフはさきに訪日した。チェスのソ日交流がこんごとも積極的に続けられることは確実である。

スポーツ

名馬アブセント号の跡継ぎたち

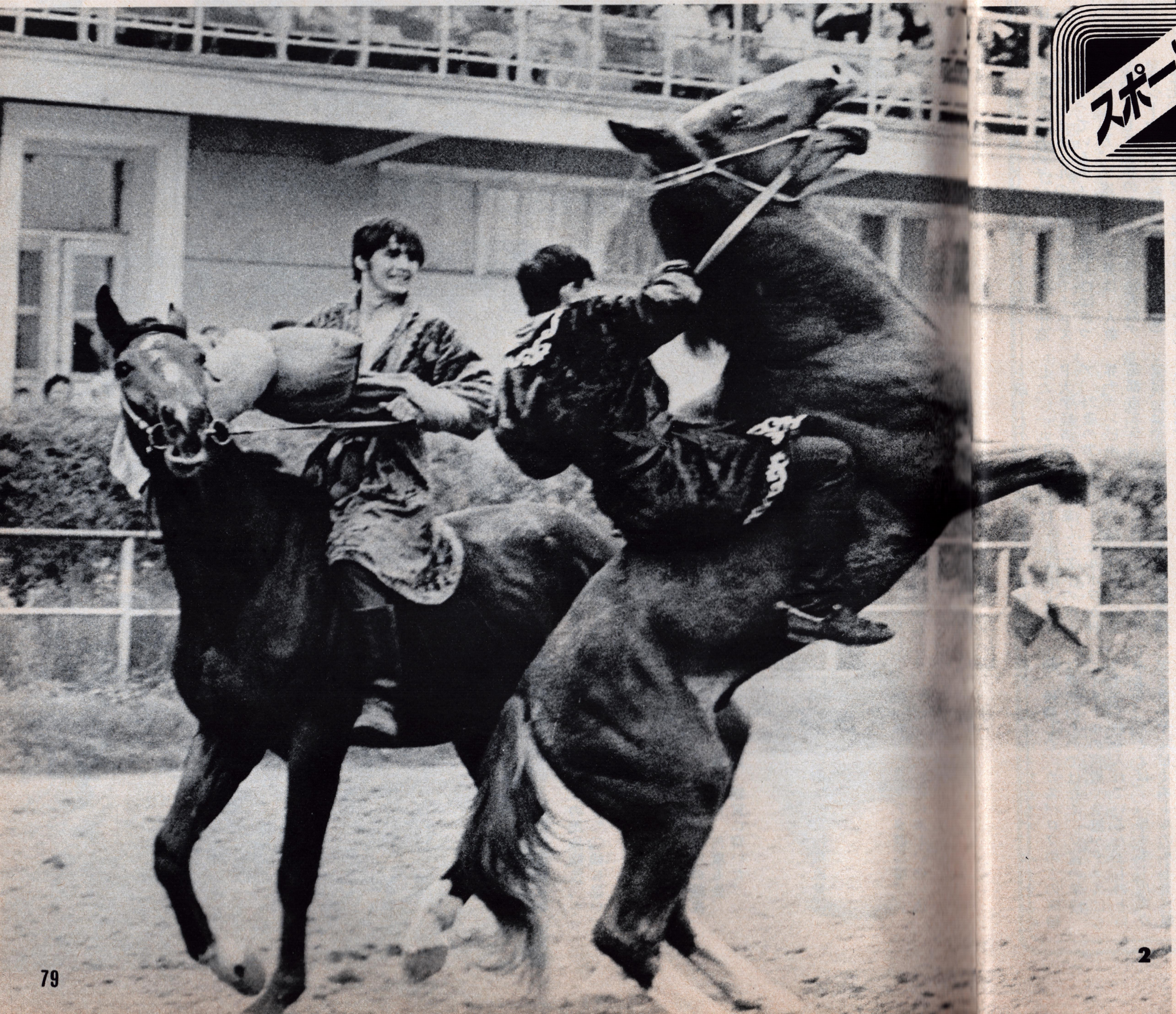
文と写真　ユーリー・クインジ



1

1 テンシャン山脈のふもとを疾走するルゴボエ育成場のアハル・テーケ馬の群れ

2 相手を袋で打ち合うカザフの民族競技



2

カザフ人は遠い昔から果てしない草原の広野に住み、およそ馬のいない生活など考えられない遊牧の暮らしに明け暮れてきた。今でもカザフ人は馬を非常に大切にしている。

現在カザフ共和国の馬の数は一〇〇万頭余り。それらを飼育しているのが、何十という専門の育成場やコルホーズ、ソフホーズである。ここで飼養されている伝統的なカザフ馬やロシア、トルクメン種の競走馬は、主にスポーツ用やサーカス用に使われている。

雪をかぶるテンシャンの山なみのふもとの、色とりどりの草花が乱れ咲く高山の牧草地の中に埋まるかのように古いルゴボエ村が広がっている。南カザフスタンのこの村は、トルクメニアを原産地とする有名なアハル・テーケ馬（競走馬）で知られている。この村に育成場が設けられたのは一九三五年。その数年後にははやくもアハル・テーケ馬のサイガク号が一昼夜平均の持久力（一昼夜に三〇一kmを走破）の新記録をたて、ソ連チャンピオンとなった。

ルゴボエ育成場はソ連最大。ここで飼養された純血競走馬は、ソ連をはじめ、遠く海外にも知れわたっている。馬の通やマニアたちは、ここの純血馬の毛色の美しさや外貌、



軽やかな、弾みのある動き、スピード、根気強さを賞賛している。

いま育成場の厩舎にはざっと二〇〇〇頭の速歩馬がいるが、そのうちで最も有名なのが黒毛の競走馬アブセント（アブサン）号であろう。アブセントの父——灰色のアハル・テーケ馬アラブ号は三歳のとき、一六〇〇mを1分50秒で走破するという大記録をたてた。この記録は4半世紀近く破られなかった。また一九三五年のアシハバード＝モスクワ間の大行進（全行程四三〇〇kmを84日間、一昼夜平均65kmで走破）で輝かしい成果を収め、そのごモスクワ競馬場で2m12という高跳びの好記録を出した。余談になるが、一九四五年5月24日ジューコフ元帥はこのアラブ号に乗ってモスクワの勝利パレードを観閲した。

アラブ号の産駒——黒毛のアブセント号と金栗毛のアバンガルド号は、父馬の栄誉をりっぱに受け継いだ。

功労スポーツマスター、セルゲイ・フィラトフは12年間アブセント号で出場し、うち





3 カザフの民族競技〝キズ・クー〟（〝娘に追い付け〟）

4 ルゴボエ育成場の純血競走馬は、何度も金、銀、銅賞に輝いた。

5 馬術学校の授業風景

6 アルマアタ競馬場。ゴール前の激しい追い込み

7回、ソ連調教チャンピオンの栄冠に輝いた。フィラトフは一九六〇年のローマ・オリンピック大会で金メダル、一九六四年の東京オリンピックで銅メダル（大賞典馬場馬術団体）を獲得、さらにメキシコ大会でアブセント号は世界の優秀競走馬の称号を受けた。

引退後アブセント号はルゴボエに帰り、種牡馬として活躍。アブセントの産駒は57頭にのぼっている。その多くは父譲りの優秀馬で、ソ連の競馬場で好成績をあげている。

いまルゴボエ育成場で飼養された競走馬は、ほとんどすべての全ソ的、国際的競技会に出場している。ルゴボエには馬術学校が設立された。

林に囲まれた小さな丘に立つと、オアシス中央部の果樹園の緑の中に白い家々、幼稚園、文化会館、病院、スーパーマーケットなどが見える。村からちょっとはずれたハコヤナギの林の向こうに、りっぱな厩舎、競走場、競馬場、室内大調教場がある。

さて高山の牧場では、まだ誰にも知られない駿馬が育成されている。これらの駒はまだ競馬場のカネの音を聞いていないが、その中から名馬アブセント号の跡を継ぐ数々の未来のオリンピック・チャンピオン馬が現れるかもしれない。



今日のソ連邦　一九七八年7月1日号

編集・発行　ソ連大使館広報部（東京都品川区東五反田3—9—13、

印刷　大日本印刷株式会社